
デイズブレイク

久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイズブレイク

【Nコード】

N2147B

【作者名】

久遠

【あらすじ】

剣術の達人の父と魔女の母をに持つ普通に生きたいと願う少年、宗我悠斗。しかし、両親の強要で、人里離れた山奥で剣に魔術の鍛練の日々…。だが、両親の事故死により、自由を得て高校に通い出した…。やっと掴んだ自由に幸せ絶頂な悠斗だが……

プロローグ

剣術…

んなもんクソ喰らえだ！

この平和な日本にんなもん使う機会などない。真剣を使って人を殺す時代はとうに過ぎ、今は許可なしに帯刀するだけで捕まってしまう。

さらに、銃という飛び道具が主流の武器となり、剣術は廃れてしまった。

魔法…

んなもんいるか！

使えろと人に言ったら馬鹿にされるか、病院を進められるだろう…
仮に信じたとしても異怖の目で見られ、化け物扱いだ。

隠しながら使っても人生がつまらなくなるだろう…

予知の魔法を使えば、競馬などで嫌というほど稼げるし、そもそも魔法を使えば金そのものを複製できる。

何を目的として日々生きていくのだろうか？

俺はただ普通に生きたかった……だが、生まれたときからそれは叶

わなかった…

そうが げんじ
宗我玄治

俺の父にして宗我流小太刀二刀術の三代目師範

人知を越えたイカれた流派で、銃が相手でも剣で勝利する事が可能である。

妻と剣術を溺愛し、その業を後世に残すために、一人息子の俺に修行を強要した。

母、エクリア・宗我。

一見すると金髪碧眼の普通の外国人だが、驚くことなかれ、彼女は高位の魔法使いである。

魔女界。完全にこの世界とは別世界で、魔女しか住んでおらず、世界樹ユグドラシルと共に暮らす平和な世界。この世界でエクリアは1、2を争う程の魔法使いであった。だが、その性格は自分勝手に我が儘。その性格のままに好き勝手に生きてきた彼女は、異世界…それも男に興味を持ち始め、世界を渡る魔法を研究し始める。それに気がついた他の魔法使いは止めるように忠告するが、素直に聞くようなタマじゃない。結局力づくになり、数人の魔力と自分の魔力がぶつかり合い、爆発。その時に起こった爆発でこの世界に来ることが出来た。そしてエクリアは森の中に倒れているのを修行中の父親に保護され、惹かれ合い、俺が生まれた。

耳にタコが出来るほど聞かされた話である。

通常、魔法使いは女しかない。魔法使いはユグドラシルから産まれ、女しか産まないからである。魔法使いとは一定量の魔力を持つ人のことを指す。

しかしそこで異変が起こった。

本来交わるはずのない魔女の女が交わり、子どもを宿したのだ。そして産まれた子は自分と同等以上の魔力を持った男の子だった。

つまり、史上初の男の魔法使いの誕生である。

エクリアは大いに喜び、自信の知識を子に教えた。

そんな両親の教育方針により、昼は魔法と剣術の鍛練。夜は睡眠学習としてあらゆる基礎知識の学習という地獄の日々を過ごし、また妙なオカルト集団に追っかけられ、逃亡生活をしていた、家族の一員が。俺、宗我悠斗である。

しかし、鍛練と逃亡の日々は突然終りを告げた。両親が死んだのだ。普通悲しむような出来事だが、親不孝にも俺はガッツポーズをしていた。あの人の心が欠片もないような鍛練内容から解放されるならば当然の反応だろう。

両親の死に紛れ、自身と言う存在も隠蔽し、死んだという事にし逃亡生活から一転、やっと自由という切符を手に入れた俺は人里に下りてきて、かねてからの望み。普通の平和な生活を手にした。

当初、戸籍や住処などの問題があり、主義に反して、魔法に手をつけてしまったが、住処も決まり、高校に入学し、ようやく落ち着いた16の5月：

もう二度と魔法を使わず、普通に生きていこうと誓うも、その望みが見事に壊される事を、このときはまだ、知るよしも無かった。

プロローグ（後書き）

新連載！！

悠斗「……おい、ラブコメはどうした？」

いやゝ折角友達と考えた設定だからこれを書いて載せてみようかと…。平行作業だね！

悠斗「ふうゝこの駄目作者の駄文製造機が！」

ひ、酷い…

悠斗「キリキリと読める文章を更新するようにしろ」

頑張ります…

悠斗「こんな駄目作者だが感想を書いてやってくれ…お願いする」

第一話：デイズブレイク

「えっと、今日は燃えるゴミの日だったよな」

カレンダーで曜日を確認し、ゴミを纏め、学校に行く準備をして家を出た。

「おはようございます」

「あら、悠斗君、おはよう。これから学校？」

「ええ」

「一人暮らし大変でしょう？」

「はい。でも、もう慣れましたよ」

お隣の若奥様との会話… ああ、普通っていいな

「ふふふ、何かあったら遠慮なく言ってね。困ったときはお互い様だから」

「はい、では失礼します」

ゴミを置いて学校に向かうことにする。幸い、ご近所にすんでいる人はいい人で何かと俺を気にかけてくれる。ありがたいことこの上ない

「おはよう宗我君」

「おはよう」

クラスメイト達に挨拶を交わし、席に着く。入学してから一ヶ月、新しい環境にはだいぶ慣れてきたが、いかんせん、今まで俺は学校というものに行ったことがなく、また、同年代の知り合いとのコミュニケーション経験も皆無。おまけに世間に疎く、共通の話題がない。

そもそも、俺は人間と言う生き物があまり好きじゃない。もちろん、中には良い奴も居るが、そんな奴はほんの一握りだ。

なので、積極的に自分から交流を持つような行動はおこなっていない。

そんな要素から俺には特定の友人というものはいない。

挨拶くらいは交わすが、あくまでクラスメイトとしての付き合いである。皆、趣味が合う同士のグループで固まり、昼食などを取っているが、俺は孤立しているのだ。まあ、寂しくないと言えば嘘になるが、それでもあのまま人里はなれた場所で鍛錬に明け暮れるよりは遙かにましだ。いずれ良き、そう親友と呼べる人間と仲良くなり、可愛い彼女を作りたいと思う。

まあ、全ては時間が解決してくれるだろう。

そう考え、俺は英語の教科書を取りだし予習を始めた。リードで当たりそうだからだ。

暫くして顔を上げる。和訳はまったく進んでいない。

（わからん…）

お手上げたった。

意思伝達魔法が使えるので語学は父さんの日本語しか分からない。母さんの異世界の言葉も、この魔法を用いて日本語に変換してたし…。つまり、何がしたいかと言うと、英語はまるっきり分からないのだった。

（そもそも何故、言語を統一化しない？不便で仕方が無いぞ！）

愚痴を言いつつも、辞書をフルに活用しながらどうにか和訳を進めるのだった。

あつという間に放課後になる。俺は部活に入っておらず、バイトに勤んでいる。

そのバイトもやっと見付けたものだ。

今の俺は（……）父親譲りの黒髪と母親譲りの碧眼と言う容姿をしているせいで何度か面接に落とされた。親は美人な母親に似た容姿なので整った容姿をしていると言って、実際、今のバイトはカラコンをつける事で一発採用だった。

ちなみに喫茶店のウェイターと言う接客業である。

バイトを終え帰宅。後は風呂に入って寝るだけなのだが…

「はあゝ」

習慣とは恐ろしく、長年の鍛練が生活の一部となってしまうっており、やらないと落ち着かず、眠れないのだ。

なので刀を持って、深夜の公園に結界を張り鍛練をしに行くのだった。

これが俺の基本的な生活のサイクルで普通の生活に満足していた。だが、この日…俺の日常は崩れてしまった……。

その日…俺はいつも通り、授業を終え、バイト先に急いでいた。そして、近くの公園に差し掛かった時…

「……………子共の泣き声？」

聞こえてきた泣き声…行ってみると小さい女の子が何かを抱えて泣いていた。

小さい子に声をかけるのはよろしくないが、此处で見てみぬ振りはできない。

人間はあまり好きじゃないが、子供は好きだ。まだ純粹で穢れが無い。それが年を取るとどうしてあんなに性格が悪く、醜いものになるのだろうか？

言うてはおくが、俺は別にロリコンではない。

「どうした？」

怖がらせないように微笑みながら屈み視線を合わせる。

「この子が…」

抱いていたのは白い仔猫。

「木から落っこちたまま動かないの!」

確にピクリとも動かない…あまり気は進まないけど仕方ないか…

スツと手を翳し、猫に触る。

「……えっ？」

暫くして元気そうに目を開ける

「…もう大丈夫だよ」

軽く猫を撫でた後、呆けている女の子の頭をポンポンと撫でる。

「お兄ちゃんが治してくれたの？」

頷いて肯定を示すと、パアツと笑みを浮かべて

「どうやって!?!あの光は!?!」

「魔法だね…俺は魔法使い。名前は宗我悠斗」

普通はこいつ頭おかしいんじゃないかねえか?という目で見られること受

け売りな台詞だが…

「す、凄〜い」

……キラキラした目で見てる…信じてるよ。純粹な子だ…。やっぱり、子供は良い。

何度も言うが、俺はロリコンではない。

「私、水菜月沙那みなづきさなこの子を助けてくれてありがとう」

「どういたしまして…」

さてっと…バイトに行くかな…

用も無いので一言告げて立ち去ろうとしたが…

「あつ、猫が…」

沙那の腕から猫が抜けて走っていき、慌てて追い掛ける沙那だが…

「つ、捕まえた…。えっ!？」

「——!?!沙那ちゃん!」

猫を捕まえた沙那の回りが光に包まれ、地面には輝く魔法陣が描かれている。

悠斗は全速で沙那に近寄る

「嫌だ…何これ…怖いよ…」

「沙那ちゃん！」

駆け寄った悠斗は光の中から沙那を引きずり出そうと手を伸ばすが…

「お兄ちゃん！」

その手を取るために沙那も手を伸ばす…。そして、二人の手が繋がれた瞬間、光が強まり、やがて、消えていく……

公園に静けさが戻る…。

だが、そこに二人の姿は無かった。

第二話：異世界へようこそ

——Side Yuto Souga

「……はあ、これからどうすっかな……」

人知れずため息を吐く……

狭く暗い空間に居るという事もあいまって気分がめいっていく……

だが……問題はそこじゃない……

やっと、悪質変態異常な精神と思考を持つ両親から解放され、ようやく人並みに……普通に生活できると思ったのに……その希望は一月と持たなかったのだ……

拳句の果てには牢屋の中

「……はあ……。なんか……どうでもよくなってきた……」

さて、何故このような状況になってしまったのか？ちょっと時間を遡ってみよう……

～～～回想～～～

猛烈に嫌な予感がした…

沙那ちゃん下に書かれていたのは間違えなく何らかの魔術を行使するための魔法陣だった……

光が収まり、ゆっくりと辺りを見回す…

……黒いフードを被った男…かどうかは分からないが、とにかくそんな奴らに囲まれていて…リーダー格なのだろう。眼鏡を掛けた金髪の優男がにこやかに両手を広げ…

「ようこそ！わが国へ…私の名はミハ…」…ダボがああー！ー！
「！」「グフ！？、な、何を…グッ！？ガッ！？グヘッ！？」

「お前か！お前がこんな事を…ふざけんな！！俺の平穏を返せ！！
死ね！朽ちろ！！」

理性が飛んでいた…元凶と思わしき、男に拳打の嵐を見舞わせる。
周りがどよめき…「ミハイル様ー！！」とかほざいているが知ったことか！

俺は暴れるだけ暴れて…

「くそ、こら、暴れるな！」

「ぐるうう！がるるうううう！！G u g a g a g a a a a a！！」

「ひっ…？」

「ひるむな！突っ込めええ！！」

取り押さえられ牢屋に入れられたのだ…

「はあ…」

暫くして落ち着いたのだが…自分の行動の軽率さにあきれ果てる。

あの状況では大人しく情報を収集した後に行動を起こすべきだった…ましてや、お偉いさんらしき奴をボコってしまったのだ…

それに…一緒に飛ばされた筈の沙那ちゃんが居ない…どこか別の場所に飛ばされたのか…また、無事だったのか…

ともかく、俺は母さんから学んだ知識を総動員して状況を整理する事にした。

まず、あの魔方阵…あれは間違いなく使い魔召喚などに用いられる物だ…前に母さんがやったのを見たことがある。

多少のアレンジを加えているのだが、基本的な形は同じだったし、魔力の種類が酷似しているのが何よりの証拠だ。

魔力の種類というのは例えるのなら色のようなもの…赤なら攻撃、白なら治療、召喚なら紫といった感じになる。もっとも色なんて見えないんだが、感覚的にそういう感じなのだ…

で、今回のケースは紫。召喚の可能性が高いという事だ…とはいえ…

「まいったな……」

正直お手上げである。召喚された場合、送還をすれば基の世界に戻るのだが、召喚と違って、送還は比べようも無いくらい難しい術なのだ……

召喚はいうなれば、ランダムにそこらを歩いている人間を引っ張って来るようなもの……それに対し、送還は広大な迷路の中、何重にも頑丈な鍵がかかった沢山のドア中から一つだけある自分の部屋に戻るようなもの。当然、場所は分からない。

ま、分かりづらい例えで恐縮だが、ようはすつごく難しいって事だけ理解してくればいい。

さらに言えば、あの母さんですら偶然の産物で生み出した技術。異世界への転移。その応用が送還である。

魔女界とは違い、書物や資料も無い……。まさに不可能、お手上げである。

「はあ……これからどうすっかな……」

そんな経緯から冒頭に至る。

「沙那ちゃんは無事かな……」

場所か、それとも時間軸か……いずれにせよ。召喚の過程で離れ離れになってしまった。まあ、とりあえずだ……

「出るか」

状況整理もしたし、何時までも此処にいるわけには行かない。

とりあえず、牢の壁を触ってみる。

対魔術用防護壁……生半可な魔術じゃびくともしない壁だ。まあ、でかい術なら関係ないが、脱獄するのに目立つのはよろしくない上に、今の俺はそんな大それた術が使えない。

「…あの手で行くか……」

あまり気はすすまないが、この際仕方が無い……。

俺はゆっくり目を瞑り…作戦を実行した。

「ぐっ！？ぐああああ！！痛い…痛いいい！！」

「な、なんだ！？お、おいどうした！？」

俺のうめき声に反応し、慌てて見張りをしていた男が鍵を開けて入ってきて、俺に蹲る声を掛ける。それを見計らって

「じめんさい」

「なっ！？もが！？むゝむゝ」

痛がる振りをやめ、ガシツと口を押さえて声を出せないようにして…

「てい」

首筋に手刀を落し、意識を刈り取った…。

一番スマートな脱獄方法。だけど、人の良心に漬け込んでるのも、物凄い罪悪感に苛まれるのだが…

いきなり召喚した奴らの仲間だし…おあいこさ

強引にそう結論付けつつ、倒した男の持ち物を探る…

「えっと…財布と…鍵と…うゝん、やっぱり地図とかは持ってないか…」

逃げるなら色々と必要だ。さしあたってはこの世界のお金だろう…。泥棒なんてしたくないけど…いきなり召喚…以下略

財布と鍵をそつと、自分の懐にしまいつつ…

「えっと…あとは…あ、服が目立つな…それにちょっと寒いし…」

倒れた男が着ている黒いフード付きのローブを拝借。

…いきなり…以下略

だんだんこの言い訳もきつくなってきたと思いつつも、多分、風邪を引くくらいで住むだろう、けど、念のために、牢屋内にあった毛布を掛けてあげて…よし、OK

自己満足に過ぎないような気がそこはかなくなるが……気にしないようにしよう。

そつ自己完結して、ローブを着込んで、俺は牢屋を後にした。

さてさて…出たのはいいんだが…

牢屋から出て周りを見回す。それほど広くは無いと思うが、どこに何があるか分からない上、他の看守と鉢合わせしてしまう可能性がある…。

スツと目を閉じて周囲の気配を探ってみた…

ん？誰か居るな…

人の気配を感じたのは、俺が居た牢屋の三つ隣の牢屋。

これは…好都合か？牢屋に居るという事は俺と同じ囚われた人である可能性が高く、また何も聞かずに暴れて牢屋に放り込まれた俺よりもこの世界の事について詳しいはずだ。

だが、物凄い凶悪で危ない奴が囚われているという可能性もある。とりあえず…

見てから判断することにし、そつと気配を消して移動し、そのまま牢屋の中を覗き込んで…

「……っ！？」

息を呑んだ。

牢屋の硬く無骨な壁に寄りかかるようにして目を閉じていたのは…
一人の女性。

長い黒髪と整った容姿が月明かりに照らされて、美を強調している。
そして…

スリットの入った黒いチャイナ服と抜群のプロポーションが見事に
マッチングしており、思わず見惚れてしまった…

って、何故にチャイナ服！？

心の中でツツコミをいれたのだが…

「…誰だ？」

「あ…」

俺のツツコミに反応したかのように女性が目を開け、俺の目を見ながら聞いてくれた。

瞳の色も黒。見事なまでに黒尽くしだな…とか思ってる場合じゃなく
くて…

「…とりあえず、話しは後。今は…」

ガチャッとさつき奪った鍵で錠を開ける。うん、盗ってきいてよかった。

「ここから出よう。俺もキミと同じく囚われてた者だし、利害は一致してる」

相手に警戒心を与えないために出来る限りの笑みを浮かべる。

「くっ！？あ、ああ……そ、そうだな」

「？ どうかした？具合でも悪いとか？なら、おぶる位は……け、結構だ！」…そ、そう？けど、あまり大きな声は出さないでね、仮にも脱走するんだし、俺ら」

す、すまない…と恐縮しつつ、女性が早足で俺の元にやってくる。

歩き方で分かる…この人…武人だ。しかも達人クラス…。隙とかないし、静かだし。これなら気配を消して動くことも出来るだろう。

「じゃ、行こうか」

「あ、ま、待ってくれないか。その…囚われる時に盗られた物を取り戻したいんだ……この状況でいう事じゃないが、大切な物なんだ。駄目なようなら一人で先に逃げてくれ」

「いいよ。置いて行くのも目覚めが悪いし、二人なら効率がいいし、探そう」

それに、出来ればもう少し必需品を獲得しておきたい。願わくば、地図とこの世界のことが分かるような書物と…後は水と食料と言ったところか……

「…すまない……世話をかけるな」

「いいよ。というか、喋っている暇があったら動こう」

今は深夜といった所か……夜明けまでには此処を出ないとややこしくなる。

「で、探しものって何？」

「…青龍偃月刀という槍のような武器だ」

珍しい得物を使っただな…

「じゃ、まず詰め所に行こう。宛ても無く探しても効率悪いし、誰かに聞いた方が確実だしね」

少々気が引ける、強引な手段をとるわけだが…しかたないよな……

その言葉に女性も頷き、その方針で行動を開始する事にした。

第三話：チャイナ少女と喋る武器

——Side ???

「許せん…絶対に許せん…」

豪勢な内装の部屋の中で、一人の男が怒りに震えてる…。

ミハイル・ムイ・グレース。悠斗を召喚した召喚師である…。

悠斗の攻撃によりダウンしていたが、ようやく目が覚め、こうして怒りに震えているのである。そんなミハイルに…

「ふう…ミハイル。いい加減にしろ。大体、いきなり見知らぬ世界に強制的に呼ばれたら誰でも怒る」

「それは分かっている！だからこそ僕は最大の誠意をもって友好的に接しようとした。だがな、いきなり…いきなりだぞ！この僕の顔に殴りかかったんだ！？信じられるか？カリウス！？」

カリウスと呼ばれた大男が話しかける。カリウス・ライベルト。赤い甲冑を纏い大剣を携えたこの国の騎士団長に当たる人物である。

「信じるも、信じないも…事実だろ？その手当ての後を見れば分かる…」

「くっ！ま、まあいい！！あの生意気な女とともに僕に絶対服従させてやる！」

意気込むミハイルに付き合っていられんと部屋を後にするカリウス。そして、心の中で見知らぬ世界に突如召喚され、牢屋にぶち込まれた悠斗に同情の念を抱くのだった…

— Side Yuto Souga

「……………」

「ひつ、た、助け…」

「だからさゝ殺しはしないよ。まあ、この人の武器を保管している場所とちよつとこの国のお金をくれれば…だけど」

兵士達の詰め所を奇襲し、やりたい放題であつた…。今、脅されている一人を除いた数名は瞬く間に昏倒させられ、床に倒れている。

で、残った一人に対し、脅しをかけているのだ。そんな悠斗にチャイナ服を来た女性は啞然と眺めていた。

「…うん、そうそう。ありがと、じゃ、暫く眠っててね」

用が済むと、尋問していた兵士の首に手刀を落とし、気絶させ…

「…お前は悪魔か？」

そこで、黙っていた女性が口を開いた…

「むう、心外だな。半分以上はキミのためにやっていることだぞ…

つと、えつと……鍵は、あつたあつた。さ、行こう。この部屋の隣に押収した品物があるんだってさ」

「だがな。金まで盗ることは無かるう？」

「逃亡生活に金は必要不可欠……命を奪っている訳じゃないし、お金を少しばかり頂戴したくらいで地獄には落ちないさ」

喋りながらもガチャガチャと鍵を開けて中に入る。

「……あつた！私の『旋武』」

中に入り、チャイナ服の女性が自らの獲物を見つけ飛びつく。

【おせーよ。鈴嵐りんらんつたく、辛気くせーところに何時までも閉じ込めやがってよ。で、大丈夫だったかよ？エロい事とかされてねーか？】

「……………」

「ば、馬鹿！何を言っているんだお前は！」

【ああ？捕虜にはエロい拷問って古今東西決まってるだろーが、けけ、おまけにそんなムチムチしたい体してんだからよ！】

武器が喋ってるとか、鈴嵐って名前なんだ？とか突っ込むところが多すぎるが……とりあえず……

「ねえ、状況分かってる？今は、とつとと此処から出るのが先決でしょうに」

「す、すまない…その通りだ」

【ん？ははあん…鈴嵐。けけけ、敵の男をたらしこんで脱出とは鈴嵐もやるようになったじゃねえか】

「だ、黙れ！」

またも漫才をはじめるが、俺は無視しつつ部屋を出て…

「碌なモンがないし、そろそろ逃げないと手遅れになりそうだから逃げるよ」

金はあるし、必要なものは何処かの町で調達すればいい。そう結論付け、漫才コンビに一言告げて外に出た…

さてさて…外に出たのはいいが…

「…で、どっちに行けばいいんだ」

困り果てていた。突如召喚され、何の情報も無く牢屋に放り込まれたわけで…

当然、土地勘なんてもんは皆無であり、更に言えば、目的とかも無かったりする。

正直、逃げる前に方針位は決めとくんだったと公開しつつ、鈴嵐と呼ばれていた素敵なお嬢さんの方を見る…

「……ある程度の土地勘はある。着いてくるといい」

素敵だ…素敵るぎるぞ！ああ、もう惚れちゃいそうだ…

当然のごとく嬉々として彼女の後に続いた…

移動しながら辺りを見回す。

文明は俺らの世界で言うところ…中世くらいか…なんとなくヨーロッパンって感じがする。前に、母さんと一緒にやってたRPGのゲームを思い出すな……なんですか？異世界としてのデフォルト設定な訳ですか？

捕まっていたのも、この町にある城の敷地にある建物で、敷地内には召還された時の塔もあった。

そんな見学をしつつ進んでいると、前を歩いていた鈴嵐が手際よく町へと続く門の前の見張りを昏倒させていた…

「行くぞ、追っ手が来る前にできるだけ距離を稼いでおきたい」

「そうだね」

ううーん、完全に主導権を取られてしまった。いや、別にいいんだけどさ…楽だし…

つてな訳で、一目散に城下町を脱出し、街道を外れて森の中へと飛び込んだ。

「はあ、はあ…」

「大丈夫？」

森へと入り、俺達は出来る限り距離を稼ぐために走っていたのだが、鈴嵐の息が上がり始めた。

無理も無いな…いつからかは分らんが俺よりも長く牢屋に入っていたわけだし…

「はあ…だ…大丈夫…だ……」

「……此の辺で休もうぜ？」

「…はあ、はあ…気にするな」

「いや、気にしてねーよ。ただ俺が疲れた。休もうぜ」

暫く訝しげに俺を見たが、鈴嵐は提案を受け入れてくれた。

互いに木に寄りかかって座る。獣避け用の火は当然のごとく炊け無い。追っ手に見つかるとはかもしれないからな。

森もそんなに深くないので、空に浮かぶ月明かりが俺達を照らしていた。

「こんな状況だからな…のんびりと眠るわけには行かない」

「そんなに気負うと疲れるぞ。そうだなせつかくだから、少し話を

しょうか？互いに自己紹介もしてないしな」

「ああ、では私から。私の名は『鈴嵐』という…先程は助けてくれてありがとう。礼を言う」

ぺこりと頭を下げられる。うーん、真面目な人だな。

「いいよ別に…。俺の名前は宗我悠斗…悠斗でいいよ」

互いに自己紹介を済ませる。さて、俺にとっては此処からだ本題だ。鈴嵐からなるべく情報を聞かないと…まずは…

「…鈴嵐はどうして捕まってたんだ？」

そう、彼女の事を知らなければ。彼女は俺と同じで召喚されて抵抗したから牢屋に入れられたのか、もしくはこの世界の人間であそこに居る連中と何らかの問題を起こしたのか…

俺的には後者の方が望ましいんだが…

「……大した事はしていない…ただ、私は私の主となるべき人間を探して旅をしていて……大国の一つ『クリアール』に訪れたんだ…だが、そこで他所の国の間者と間違われてな…なにぶんこの格好はあの国では珍しいから…」

……ふむ、後者か…

「危うく、主を見つける前に終わってしまうところだった…まだまだ私は未熟だな…」

自嘲気味に笑う鈴嵐。

【まったくだ…危うく俺まであんな辛気臭せー所に放置されるところだったじゃねーか！】

「ま、結果的に助かったんだからいいじゃん。これも教訓ってことにすれば…で…その喋る武器は？」

「っ！？」

【おっ！？】

ん？なんだ？なんで驚くんだ？

「聞こえるのか！？旋武の声が！？」

「聞こえるも何も…牢屋からべらべら喋ってたし…あんたも声に出てたぞ。もしかして…普通の人には聞こえないのか？だったら氣をつけたほうがいい。一人でブツブツ言ってたら怪しいことこの上ないからな」

【ぶっ…ぶわっはっは！！いいねえ！！あんちゃん！ひっさしぶりだぜえ…契約者以外に俺の声が聞こえる奴にあったのはよ！あんちゃん、相当出来るだろ！？】

「いんや～お箸より重いものなんて持ったこと無いなあ～俺は。か弱くて貧者な優男なんでね」

（絶対嘘だ…）

胡散臭さそうな視線を送る鈴嵐を無視し、旋武という武器に向かっ

て話しかける……傍から見ると俺も変人なんだろうな…

「で、お前は？」

【おお！俺様は旋武！緑のエレメンツウエポンだ！！】

エレメンツ？ウエポン？

「…すまん。言ってる意味が分からん。なんせ、俺はあのクリアール…と言ったか…あの国のボケに異世界から召喚されたんだ。だから、こちらの世界の知識は殆ど皆無なんだ」

俺の言葉に一瞬驚いたような表情を浮かべる鈴嵐。だが、俺の格好を一瞥し…

「なるほど…こちらの世界ではそのような服装のものは珍しい…だが『キャスト』なら話しは別だな」

またもや聞きなれない単語。だが、話しの流れから推察すると…

「…ふむ、俺らのような召喚されたものをキャストと呼ぶのか……んで、そんな呼び名があるという事は、召喚されたのは俺が初めてとかではなく、結構頻繁にそういう事は起きてるみたいだな…」

「…驚いたな…ユウトは見かけよりも頭がいいみたいだ」

むっ？それは俺が見た目馬鹿って事か？

「ふふ、気を悪くしたなら謝る…」

俺の表情から考えていることを察した鈴嵐が微笑みながら謝る…

……ちつ、笑顔が可愛いじゃねーか！？女は卑怯だ！！

この世の不条理を呪っていると鈴嵐は一つ咳払いし…

「なら、順を追って話そう。夜明けを待って行動した方が安全だし…それにこの状況じゃどのみち睡眠なんて取れないから」

「心配しなくても襲ったりなんてしねーぞ？」

さっきの反撃を試みて見ると…

「／／／ば、馬鹿！いいから話を聞け！」

効果は靨面のようだ。この暗がりでも赤くなった顔が分かる。旋武は声を押し殺して笑っており、そちらを睨んでから鈴嵐は話した…

「この世界…ベルンティスに住む人々には精霊を扱う力がある……古の時代人々は精霊を使った術…精霊術で発展を遂げ、生活を豊かにしてきた…」

ほうほう、精霊とな…

【んでもって、その精霊術によって、精霊が憑依した武器。それが俺様たちエレメンツウエポンだ！エレメンツには属性ごとに色があつてな！俺様は緑、草花から成長の恩恵を受けて、持ち主の身体能力の強化ができるんだぜえ！鈴嵐が俺を軽々ぶん回せるのにもそれ

が作用してんだ。けけけ、だからよ。おれっちがいなきゃ、かよわい女の子さ。襲うならそんな時だぜ！】

「ああ、今後のために良く覚えておこう」

「／／／き、貴様ら！一体なんの話をしているんだ！！」

顔を赤く染めながら叫ぶ鈴嵐。うん、初で可愛い…

「で、キャストってのは？」

とりあえず、話を変える。鈴嵐は何度か深呼吸をし、心を落ち着かせ俺の問いに大して口を開いた…」

「精霊術の力で異世界の力あるものを召喚し、知識やその能力を国のために生かそうという考えの元、召喚されてきたものを私達はキャストと呼んでいるんだ…だが……」

いづらいことなのか、言いよどむ鈴嵐。だが、やがて決心したのかゆっくり口を開き…

「召喚されたキャスト達は反乱を起こし、戦となったんだ。無理やり召喚された拳句、帰る手段は無い…などと言われたらそれも当然だ……キャスト達は人数こそ少ないが、元の世界の優れた知識と、この世界で身に付けた精霊術を応用させ高い戦闘能力をほこり、双方に多大な犠牲を与えて戦争は終結。今は、キャストたちが収める国、大和を建国したんだ」

「なあ、ということはだ。俺が元居た場所に帰るすべは無いって事か？」

「…そうなる……」

やっぱりか…あゝ自力でどうにかするしかないのかあゝ。ん？でも無理して帰る必要があるのか？こっちで平穩に生きるって言う道も…

と、あれこれ色々考えていると、鈴嵐が若干怒気を込めた声で…

「……クリアールめ…噂をこの目で確かめようとしたのだが、今更キャストを召喚するなどは……何を考えているんだ」

「まあ、相手の思惑はどうでもいいけどさ。ああ、これからどうすっかな」

手持ちを確認する。奪ったローブと幾ばくかの金銭。住居なし、食材もなし、着替えもなし。衣食住全部が不安定だ…

「……大和に行ってみるのは？あそこは万が一キャスト達が作った国だから、待遇も寛大だと思うし、大陸有数の学園があるはずだ。この世界で暮らしていくための知識を学ぶにも事欠かないと思うし…私もそこに行ってみるつもりだ」

「そうだな…でき、鈴嵐はまた主つてのを探すわけ？なんでそんな事をするのさ？」

「……それが私の村の決まりだからだ。私の村はメルティア王国内の南の偏狭の地にある。その村は戦を生業とする強者達の村でな…。その村では鍛えたその武を認めた主のために尽くす、どの国を覇貢するわけでもない。認めたのがただの農民だとしてもそのものを一

生守りぬく。そんな一族なんだ…」

「ふむふむ…それで鈴嵐も主を探していると？」

「ああ、私達は16まで里の者に鍛えられる。そしてその後旅に出るんだ。男はそのまま主を見つけ、死ぬまで尽くし、女は…その…なんだ…」

ん？ 恥ずかしそうに顔を赤らめモジモジとする鈴嵐…やがて、意を決して…

「あ、主に…こ…子種を恵んでもらってだな…村に帰って子育てをするんだ…あわよくば、主の妾になり、一緒に添い遂げる……」

「……………あゝゝ」

要するにだ。より良い遺伝子を求めて、子孫を優れたものにしよう…そんな所だろう…

「で、さっきの国には鈴嵐のお気に召す男は居なかったと？」

【けけけ…そういうことだ！ 鈴嵐が望んでるのは腕っ節のつええ男！ だが、マツチヨは嫌いに来たもんだ！ つまり、優男で強い男つてわけだ。我儉な女だぜえ】

「なっ！」

「ま、一生の問題だからな。いいんじゃないのそれで？」

【それで、捕まってるや世話ねーけどな…クリアールに行ったのも

優男が多いからって理由だ。最近、きなくせーから止めとけつたのによ！自分の目で見なきゃ信じられんと来たもんだ！】

「お前が居たのに捕まったのか？その恩恵とやらはどうなった？」

【ああ、武器持つてで門を抜けられないんで、そこで兵士に一旦あずけたんだわ。んでもって、第二関門で身元確認で異常が無けりや、武器も返ってきてめでたしなんだがよ。その第二関門で捕まっちゃったんだよ。おれっちがいねーから、当然かよわいまま。あれよあれよと、屈強な兵士達の慰み者に…】

「／／／せえんぶ！！そ、そもも！に、にやぐさみもろなんてみやつてない！！！」

小声で怒鳴るという高等技術で見せる鈴嵐だが呂律がおかしい。旋武はくぐもった声で笑っている。うわゝ武器にからかわれてるよ。ま、責任の一端は俺にもあるんだけどさ…

今の鈴嵐の言葉を正常に変換するなら『旋武！！そもそも、慰み者なんてなっていない！』だろう……にしても、本当にギャップがあるな。

見た目は凜としているのに、物凄い初だ。こりゃ、へたすりゃ悪い男に騙されるね……

【兄ちゃんはどうだい！？俺の声が聞こえるし！このじゃじゃ馬を貰ってやってくれねーか？こつ見えて可愛いところもあるんだぜ！？きつといい声で鳴くと思うがどうよ！？】

「そろそろ、やめてやれ。いい加減、可哀想だ」

真っ赤になって口をパクパクしている。つか、緊張感ねえな…まあ、別に敵も近くには居ないみたいだし、緊張してたら疲れるだけなんだから、別にいいんだけど…

【へいへい】

旋武がからかうのをやめ、鈴嵐が数回深呼吸をし、落ち着いたところを見計らって俺は口を開いた

「とりあえず方針は決まったな。さて、夜明けまではまだ少しある。さつきはあいつが無理にでも寝とけ。倒れたら元も子もない。なんなら、俺が優しく寝付かせてやろうか？」

「ひ、必要ない!!」

プイツとそっぽを向き、木に寄りかかると数秒たたずに寝息を立て始める鈴嵐…

「……寝てんじゃん………」

ああは言ったが、やっぱり疲れてんだな…

【……兄ちゃん、一緒に居る時だけでいいからコイツ頼むわ。戦闘時には結構つええんだけどよ。緊張感というか、警戒心が皆無なんだわ】

「戦闘を生業としてるんだろ？そんなでいいのか？」

【元々、こいつはそんなに向いてねーんだよ。生まれは自分で選

べねーからよ。ま、俺様が常に起きてるから寝てる時まで警戒する
って技術がいらなかったってのもあるけどなあ】

確かに、寝顔は年相応の少女だな…

【それに、気を張ってて疲れてたんだろーよ。きっと、牢屋で私は
これからどんな卑猥な拷問を受けるのかな？とか考えてたんだぜえ
…】

「……後半の台詞がなけりゃ、いい感じで終わったのに……ま、
構わん。いつまで一緒に居られるかは分からんがな」

それだけ言い、とりあえず今までであったことをまとめてみる。

1まず、学校帰りのバイトに行く途中に猫と沙那という少女に会う。

2猫の怪我治す。

3猫逃走。沙那が追いかけた後、魔方陣の展開を確認。助けようと
したものの巻き込まれる。

4ベルンテイスという異世界に召喚され、我を失い暴れた結果、召
喚師を殴打し、捕まり牢屋に。

5牢屋からの脱獄に成功し、逃げる途中で鈴嵐と旋武に出会う。

6無事、逃げ切ってこの世界の事を聞く。

で、今に至ってるわけだ……いやゝあはは、劇的な一日だったな…

…こんちくしょ…

ん？ということはだよ。沙那とあの猫もこっちの世界に居る可能性が高いな。まあ、生きてるかどうかは微妙だが…

俺と同時召喚されたにも関わらず、牢屋にもあの場にも居なかった…そこから考えると俺が正規召喚、向こうはイレギュラー召喚になった可能性がある。

イレギュラーの場合、世界間の時空と時空との狭間に取り残される場合がある。こうなったら生存確率はゼロだ。

もう一つ考えられるのが別の場所に召喚された可能性だ。この場合は、俺と同じこのベルンティスに居るといふ事になるが……あんな子供と猫にサバイバルのスキルがあるとは到底思えない。

となると、生きているとすれば、町なり村……人がある程度いるところに居るはずだ…

「なあ、旋武。この世界には大和とクリアール、それに鈴嵐が居たメルティア王国…それ以外にはどんな国があるんだ？」

【大きいのはその3ヶ国と軍事国家シャリトスの四つだ。だが、あと、魔族たちの国ゲールシュティンとエルフの住むユミルがある。】

旋武の情報を元に、地図を想像すると、この世界の大きな大陸は三つ。北の大陸にゲールシュティン。南の大陸は森ばかりでそこにユミル。そしてここが丁度中央に位置する大陸で、この世界最大の大陸らしい。大和が大陸の北に位置し、南にクリアール。東にメルティア、西にシャリトスと他に小国が多数で形成されているらしい。

【メルティア、シャリトス、大和の3国は同盟国家でな。さつきも行ったように大和にある学院に貴族の坊ちゃんを始め、大勢の生徒が通ってる。そこで大和のキャスト特有の独特の知識とこの世界の精霊術との知識の交換の場という風になってる。まあ、それと魔族が南下し侵攻してくる為の防波堤や胡散臭いクリアールの牽制って意味もあるだろうがな】

なる。

ともかく、沙那ちゃんが居るとしたら、この大陸のどっかって事が……うーん……

……どうにかなるか

縁があればきつと会えるだろうし……

よし、となったら俺も寝ようつと

S i d e クリアール

首都クリアールにある。ベネッセル城。その魔術師の塔の最上階に彼の部屋はある。

「逃げられただど!？」

翌朝、起きてきたミハイルは兵の報告を聞き、怒鳴り散らした。

「…で、どうするミハイル？この件に関してはお前が国王に任されているのだろう？」

ミハイルの立場はこの国の最高顧問魔術師。

「…我が偉大なる御先祖様のお告げが確かならば、あの女はともかく、男の方は『使徒』である可能性が高い……すぐに軍を編成し、探し出せ！！」

「…それは不可能だ…」

ミハイルの命令をカリウスが即座に否定する

「何故だ！！」

激昂するミハイルにややため息を吐きながらカリウスは告げる。

「……そもそも、何故我らがリスクを犯してまでキャストを召喚したと思っている？3ヶ国同盟に対抗するため。少しでも軍備を強化するためだろう？」

その軍を脱走者の追っ手に使うなどとは、強化どころか逆に衰える。そうなったら、他国の侵攻を受ける可能性が高い。

「ぐっ！！捨て置けと言うのか！！！」

（使徒…神の使い……神に愛された者か……）

ミハイルの祖先は偉大なる大魔術師である……その死の直前に予言したのは、異界から現れる使徒の事。

神に愛され、絶大な力を持つもの…味方につければ、これ以上の戦力増強は無い。

「別にあの少年が使徒と決まっている訳ではあるまい。どのみち、牢屋に一度ぶち込んでいるのだ。探し出したところで協力を仰ぐのは難しいだろう…」

「し、しかしだな！！この件が大和に露見すれば色々ややこしい事になるぞ！！」

「…それは、外交に頑張ってもらっしかならうな」

「くっ！？では、各地に駐在する軍に手配だ！国境を越えさせるな！！」

「…了解した」

確かにその手段は有効だ。街や村で宿なり、食料を調達せねば逃亡生活はままなるまい。もっとも…

（この街から脱獄したのだ…すんなり捕まるとは思えんがな…）

そうは思っても、他に手段も無い…カリウスは言われたとおりに各地の駐屯軍に指令を飛ばした。

第三話：チャイナ少女と喋る武器（後書き）

更新完了。

読んでくれている人、ありがとうー。

久遠です。ようやくデイズ更新。卒論の締め切りが迫っている中、見事なまでの現実逃避w

ちまちま、更新していくんでまた読んで下さい。

第4話：力の片鱗（前書き）

えー、今更ですが…

この話はファンタジーです。ですが、コメディの要素が結構含まれて居ます。これは、作者がコメディ作家であるためですので、御容赦ください。

また、この作品は、仲間と力を合わせてピンチを乗り越えたり、経験を積み力を徐々に身につけるなどといった熱い部分は殆どありません。

主人公が物凄く強いです。

そういう話に嫌悪されるかたは読まれないことをお勧めします。

第4話：力の片鱗

— Side Yuto Souga

「…ねえ、鈴ちゃん。いつごろつくの？」

「誰が鈴ちゃんだ！」

脱獄した翌日。昼過ぎ近くまで爆睡したのち、腹の虫がなったので起きだした俺達は、強奪した食料で腹を満たし、国境へと向かうため森の中をひたすら歩いていった。

「可愛いと思うんだけど…ねえ？」

【けけけ、いんじゃない？少女趣味だよ！】

「だよねえ」

【ああ、そんなくらい可愛らしけりゃ男が腐るほど引つ掛かるぜ】

「…腐った男じゃ駄目じゃん」

【ちげえねえ！！】

鈴嵐の武器である『旋武』と意気投合しながらみちを歩く。にしても、初めて出来た友人？のように会話が出来る相手が武器とは…ちよつと鬱だ

「……………」

鈴嵐は無言でズンズン歩く。旋武はよほど自分と会話できる人間が居るのが嬉しいのだろう。しきりに話しかけてきた…それも……

【なあ、なあ、兄ちゃんの居た世界にはいい女は居たか？ウハウハだったのか？】

「あゝ彼女は残念ながら居なかったなあ……」

正直、作る暇なんてあるはずが無い、自由になったとたんに召喚された…あゝ俺の青春……

【なんでえ…んじゃ、女の裸、見たことねえのかよ？男としてそりゃ、人生の97%は損してるぜ】

「いや、あるよ。最もAVとかエロ本だったけど」

そりゃ、年頃の男なら誰もが持つてるだろう。

【えーヴい？えろほん？なんじゃそりゃ？】

そっか、こつちの世界には無いのか…ちよつと、残念。

そう思いつつ、元居た世界の機械技術を交え、説明する…

【な、なんじゃそりゃ！！そんなもんがあんのかよ！！今すぐ俺を連れてけ！！】

興奮する旋武が吼える。よつばどカルチャーショックだったんだろ…う…そして…

「は、破廉恥な！！そのような物！！」

異世界の話が気になったんだろう。無言で歩きつつ、聞き耳を立てていた鈴嵐が顔を真っ赤にし、怒鳴っている。

「いや、そうは言っけどな。そういう知識無いといざって言う時困るし……」

【だなあ……主に情けを貰うんだろ？里でも伽の訓練があつたのによお……恥ずかしいからって逃げ回りやがって……】

「そうなのか？ふむ……それは色々と前途多難だな……向こう側に期待するしかないな」

【けどよあ……相手の経験が豊富つてのも釈然としねえんだよなあ……】

と、男二人で色々と話していると……

「……きゅ」

真っ赤になった鈴嵐がぶっ倒れた……

【あ……たく、初な奴だ……羞恥の熱でショートしやがった】

「……本当に前途多難だな……」

なるべく……鈴嵐の前で下ネタをいうのは避けよう……

「今日はこの辺りで野宿だな」

森の中を歩き続けると、開けた湖の辺に出た。夕日が湖に移っていて、かなり綺麗だ…

「さて、んじゃ飯の支度にするか」

幸い、ここは森。食材は困らん。だが、一つだけ問題が…

「鈴ちゃん、料理できる？」

そう、俺には料理スキルなんぞ、かけらほども無い。作れるものといったら、お湯を注ぐものか、お湯で温めるものか、レンジを使用するものだけだ。

「だから、鈴ちゃんと…はあ、もういい。料理だったな、ある程度は母様から仕込まれたから問題ない」

【こつみえてもよお。料理は上手いんだぜえ…へっへっへ、乙女してるだろ？どうだ？お安くしとくぜ？】

「ふむ、それは物凄く悩む問題だな…ま、それはともかくだ。それなら問題は無いか…んじゃ、俺が食材探してくつから、鈴ちゃん調理担当ね」

「…それは、構わないが…大丈夫なのか？」

不安そうに見る鈴ちゃん。

「ああ、こつ見えても狩りは得意だ。鈴ちゃんは俺が戻ってくる間に、水浴びでもしてると良いよ」

それに、一人で考えたい事もあるし…

それだけ言つて、俺は鈴ちゃんに手を振つて森へと入っていく。

「さてつと…」

森の中を歩きながら、俺は考える。

召喚術、精霊。この世界は、科学が発展していた元の世界に比べると、異端と呼べる力が普通に存在するらしい。むしろ、科学の方が異端なのか…

「…なら、ある程度は俺の力も…許容してくれるかもな…此処にはあの狂信者どもや、戦闘狂やオカルト野郎どもがいねーしな」

苦笑いを浮かべながら、過去へと思考を移す。

忌み嫌う俺の力。

～～回想～～

きっかけは些細なものだった。

父親が剣術、母親が魔法。そんな力がある両親を持てば、子供にも

当然その才が現れる。

とりわけ、魔法の才が俺にはあった。

魔法使いにはそれぞれ一つだけ力がある。例えば、物体操作ならその名の通り、物体を操作する魔法が使える。しかし、洗脳などの精神に作用する魔法や何かを生み出す創造系の魔法は使えない。それは持つて生まれた才能。

母さんの才能は『マナ・エーテルの変質』だ。

全ての魔法の根本的な力は、マナとエーテルと呼ばれる魔力だ。

マナは、大気中に満ちている魔力の事でそれは世界樹ユグドラシルからもたらせられる恵み。

エーテルはそのマナを体内に取り込み変質したもの。例えるならマナが食材だとするなら、エーテルはそれを消化液などで分解した際に生まれるカロリーのようなエネルギーだ。

マナは、ユグドラシルから生まれた魔法使いにしか使うことが出来ないが、エーテルは違う。

エーテルは普通の人間が生きていくエネルギーとしても必要不可欠で、さらに魔術師や術師と呼ばれるものはそのエーテルを利用して超常現象を起こす事が出来る。

一般的に魔力といわれるのはこのエーテルの事だ。

母さんの能力はそのマナ・エーテルを自分の思い通りに変質するこ

とができる力だ。

炎、水などの別のエネルギーに変化させるどころか、マナを素粒子に変質することによって物体の具現化すら可能とする力である……つまり何でもあり。

母さんが他の魔法使いから敬遠され、最強と畏怖されていたのもその能力が原因だ。何故なら、魔法とはマナかエーテルを使う。つまりは、それを自在に変質させるという事は相手の魔法を無効化する事も造作も無いのだ。

まさに、反則である。

そして、母さんの血を引いているからか俺にもマナを扱うことが出来、その才能すら受け継いだ。

しかも、もう一つ。本来なら一つだけのはずの魔法の才能だが、母さんの才能とは別に俺だけの才能がもう一つある。

それを知った時、母さんは狂喜乱舞した。

神々の王であるオーディンも元々はハーフエルフ……つまり、人間とエルフの混血である。

異端と人が交わることで、より強力になることが実際に証明されたのだ。

そして、当初俺はこの力があまり好きではなかった。

自分の能力を使いこなすまでは、マナに押しつぶされそうになった

からだ。

ハーフという身体では魔法使いのようにマナを利用すべき体が出来ていない。

つまり、人間の部分がマナに耐えられないのだ。だからこそ、死ぬ物狂いで力の使い方を覚えた。

制御できなければ、死んでしまうから…

母さんが、結界を張りその空間内を魔法の練習に適した空間にしてその中で4年過ごした…

7つ…位の頃だっただろうか？ようやく自分の力が自由自在に使えるようになった時は、自分のこの力が凄く好きだった。

母さんは喜んでくれるし、母さんと一緒に見たヒーロー物のアニメは魔法や剣を使ってバシバシと敵をやっつけてたからだ。

幼子はどういったものに影響され、将来はこうなりたいなどとヒーロー願望を持つ。だが、大概の子供は現実を知り、非現実と諦める。

だが、皮肉にも俺にはそれをかなえる才があった。

類に漏れず、大きくなったらこうなりたいと父さんから剣も教わり魔法も勉強もした。

それから3年。

10の頃、その思いに転機が訪れた。

普段は人里はなれた森の中で、母さんが作った家で三人で暮らしていたが、転移の魔法を覚えた頃から母さんのように街に遊びに出るようになった。

そこで、一人の少女に会ったのだ……

少女は可愛かった。同年代の女の子を見るのが初めてだったからかもしれないが、雪のように白い肌に心底見とれた。

その少女は、3人の男の子にいじめられていた。

ヒーロー気分でその少女を助けようと、その中に割って入り、手から雷を出した…

それに驚いたのだろう、いじめっ子たちは逃げ出し、少女に手を差し伸べた『大丈夫だった?』と

だが、帰ってきた返答は…予想とはまったく違っていた。

恐ろしいものを見るような目で、少女は言ったのだ…

『…う、こわいよ…』

その瞬間、世界が真っ白になった。

なんで?

ぼくはヒーローじゃないの?

たすけてあげたのに…どうしてそんなにおびえためでぼくをみるの？

やめろ…ヤメロ…ヤメロ

家に帰って泣きながら母さんにこのことを話した。だけど…

『そりゃ、そうよ。普通の人間ならビビルわね。心がちっさいわよね、お父さんは大きい人だからそんなことないけど、ああ、愛してるわ』

なんで？ぼくはヒーローになりたかったのに…

『無理ね。どちらかというと私と悠は異端な存在。というより、人間よりはるかな高位にいる存在だけだねえ。お父さんと違って、下劣な人間からしたらヒーローものの怪人みたいに写るんじゃない？』

そんな…そんなことないよ！

『んじゃ、確かめてくれば？この世界を…でも……そうねえ、あと2年。12になったらね。それまでみっちり鍛えてあげるから』

そして、俺は12になって3年旅に出た。そして思い知った。

ある者は畏怖し、ある者は実験動物を見るような目で、ある者は絶対的な悪と攻撃をしてきた。

魔術を使う、優れた人間と自分達を称する団体、対魔を生業とし、

異端の者を狩る団体。

なんで？なんでボクを…そんな目で見るの？ただボクはヒーローになりたかっただけなのに…

いや、もうそれよりも…ただ、友達が欲しかっただけなのに…

何で？なんで？ナンデ？

人間達が悪い？そうかもしれない…自分以外を認めようとしな
い心が狭い生き物…自分達で自分の住処を汚染する愚かな生き物
でも、それだけじゃない事に気がつく。人間全部が悪い訳じゃない
ってあることがきつかけで知ったからだ。

なら、原因は他にある。

ボクにこんな力がなければ…あの時の少女は友達になってくれたか
もしれない。

こんな力さえなければ、敵意を向けられなかった。

こんな力さえなければ、普通に生きられたかもしれない。

こんな力さえ、ちからさえ…チカラサエ…

それ以降、こんな力を使わずに普通に生きて行こうと思った。

人間として自分を偽ろう…だって…もう…狙われるのは嫌だから……

人間全部が俺を拒否するわけじゃない。中には父さんやあの人のように俺や母さんを受け入れてくれる人が居るかもしれない。

何より、孤独は辛すぎる…

なら、異端としての自分を隠し、そんな人を見つけようと…そう思った……

『グウウー!!』

かかった見たいだな

昔を振り返っているとそんな音が聞こえ、視線を戻す。

そこには見えざる何かに困惑し、だが完全に動けなくなっている結構でかい猪が暴れていた。

「ふむ…すまん。だが、弱肉強食。食物連鎖という言葉があっただな。なあに、お前もそこまで成長するのに他の生き物を糧としてきたんだろ？今回は自分の番なだけだ。次回は、もっと強者に転生しろよ」

手をかざし、猪を圧縮し小さな宝珠とする。その方が運びやすいからだ。

「…やはり、便利だな」

自身を嘲笑する。魔法とはやはり便利だ…そうだな、やり過ぎない程度に使う

それが、この世界の普通ならばそれに合わせて生きるだけさ。

その後、果物などがある程度集めて元来た道に戻っていった。

辺の近くに来て、宝珠を猪に戻す。まだ暴れているので拘束したまままだ。

「鈴ちゃん、ただいまー♪」

ずるずると猪を引きずる。鈴ちゃんはその大物に目を丸くしている。

「武器も持たずに…その、猪を拘束しているのは……系？」

【だがよ、こりや魔力で出来た系だ。あんちゃん、やっぱり、ただモンじゃなかったな】

「とっても便利なんだぞ。やろうとすれば鋭利にもなって、切断も可能だ。何より、切れないし、伸縮も思いのままだし、出したり消したりも自由だ」

指から伸びた魔力の糸。魔^{まし}糸と俺は呼んでいる。

「んじゃ、後は調理よろしく。あ、糸は鈴ちゃんが猪をさばく時には四散させるから。なんなら、俺がやるつか？」

それくらいはできる

「いや、こんな大物を取ってきたのだ。あとは私がやるう。旋武」

【あいあい！】

旋武を手に取り、猪に一閃。

「ふっ！」

そして、次々と手際よくさばいていく。そう、手際よく…だけど…

…シユールだ

青龍偃月刀を手には猪をさばくチャイナ服の美女…

「なんじゃそりゃ…！」

思わず、非現実的光景にひとりつつこみを入れてしまった。事実は小説よりも奇なりっていう言葉はこのためにあるんだな…

鈴ちゃんの料理は凄く美味かった。

旅に出る際に自給自足も考えていたと言う鈴ちゃんは旋武と一緒にあった部屋の自分の荷物もちゃんと持ってきており、その中には調味料もあった。

そして、ある程度離れたという事で、火を使い、肉を焼く。ま、追ってが来たら返り討ちにすればすむしな……鈴ちゃんがね…

焼いた肉は塩と胡椒でスパイシーで…あんと結婚する男は幸せだなあ…とか思いつつ、齧り付いた果物類も中々だ。

なかでもりんごに似ている青いりんご（命名俺）は滅茶苦茶甘くて尚且つ後味すつきりだ。元の世界に帰るとしたら是非とも何本か木を引っこ抜いて、栽培したいと思う。

食事を終え、後始末を鈴ちゃんが済ませ、火を囲む。そして、旋武が何時ものお茶らけた口調とは違い、真剣な口調で口を開いた。

【…なあ、あんちゃんよ。さっきの技といい。あんだ…マジで何者だい？】

「旋武？」

そんな旋武に鈴嵐も戸惑ったようは表情を浮かべる

【…それに…どうして、姿を偽るんだ？そして、その希薄な気配……あんちゃん、意図的に自身を隠してるな？】

まいったな…

「鋭いな旋武は…」

苦笑いをしながらそう返す。

「どついう事なんだ？」

【鈴嵐、おめーも武力だけじゃなく、もっと色々な力をつけねーと駄目だぜ？いいか？普通人間ってのはなある程度の気配がある。ま、

存在感と言っても良いがな、あんちゃんはその希薄なんだよ…いや、意図的に希薄にしてるってトコか…】

「シャイなんでな、あんまり注目されたくないんだよ」

そんな掛け合いに、鈴嵐が困惑したように…

「希薄？気配を絶っているという事か？」

【ちよつと違うな。気配を絶つまではいつてねえ。普通より存在感が薄い程度だな。で？もう一度聞くがあんちゃんは どうして そんな事をしてるんだ？】

…降参だな

「お手上げた。流石に精霊は騙せねーって事か。さっきも言ったように注目を浴びるのが嫌だから。この理由は本当なんだよ。それと前の世界で妙な奴らに追っかけまわされてたからな…いい加減しつこいんで、ちよつと工作して死んだ振りしたんだ。だから、元の姿のままじゃ拙かったから擬態してたんだけど…まあ、異世界にきたしそれももうやめるか」

ため息を吐いて、擬態を解いて本来の姿に戻る。

な、なんなんだこれは？

悠斗がため息を吐いたと思った瞬間、あいつの姿を見て私は息を飲んだ。

圧倒的存在感…月明かりに輝く彼の髪は金。金髪は何人が見たことあるが、金という色かがこうまで美しいのかと疑問に思える程の美しさをもった髪。

その瞳はどんな宝石よりも輝き、神秘さを醸し出す……紫の瞳。スツとした綺麗な形の鼻。艶やかな唇。それらのパーツが完璧なまでのバランスで並んだ、顔。

同じ人間とは思えないほど人智を超えた美しさ。いや、もう神々しいと言っても過言ではない。

顔の形は今までと変わったわけではない。だが、私は今始めて彼の美に気付いた。

それは、認識できなかったただけだ。前までは彼の前に霧が掛かったように、彼の顔を認識できなかった。

私は呆然と彼に見とれるしかなかった。

やれやれ…

「やっぱこうなったかあ…」

【…あんちゃん。もったいねえな、女だったらなあ】

「俺の母さんがこんな感じだ。まあ、瞳の色が違う上にもう死んでっけだな」

俺は自分の容姿を自覚している。人智を超えているという事も。これは人ならざる母さんが母だからだ。

この元の世界の美女と呼ばれている女性達。その容姿は魔女の世界ではデフォルト…つまりは普通らしい。

自称、魔女の世界でもトップクラスの美女だったらしい母さん。そんな血を受け継げばこうなる。

俺は圧倒的に母さんのほうの遺伝が強く、この髪の色も母さん譲りだ。金という色には神を印象付けるらしい。

そして、神秘を印象付けるのはこの紫の瞳。この忌々しい色が俺が混血の証。

向こうで俺を追っかけまわしていた奴が言うには、異端の瞳が赤。紫は混血や人が生み出した化け物…ホムンクルスの瞳の色らしい…知るか！勝手に理屈を押し付けやがって…あのイカレ集団が！

そんな事もあり、俺は色で言うと紫が一番嫌いだ！この目のせいで狙われてたんだからな。ちなみに二番目は白、追っかけまわしてた奴らが着てた服が白だったから。

珍しいのと異端の美しさを誇る俺の顔…街を歩けば、人の視線が煩い。ウザい！

ナルシストでなくても、人並みの感性を持っていれば自分の容姿は美しいと気付く。

だからこそ、認識できないようにしてたんだが…

「ポ」

【あらら〜鈴嵐逝っちまってら】

「鈴ちゃん、一人なら良いさ。元の世界でこの状態で街あるったら
まるで珍獣扱いだ」

男からナンパされた時はマジで切れ掛かった。もう、どうでもいい
から極大の威力を誇る魔法をかみたい位イラついた。まあ、回し
蹴り一発で済ませたが…

数メートルすっ飛び、ピクピクしてたが、まあ平気だったろう…多分

【しかし、それでうろつきゃ、女は引っ掛かり放題だったろうに
…】

「外見だけを重視する女なんぞ。俺のタイプじゃない」

スツと元通りに気配を抑えて…再び擬態する。

「鈴ちゃん！おい、鈴ちゃんやーい！」

ペチペチと頬を軽く叩くが…

「……………ほお…」

【駄目だこりゃ】

旋武が、元の世界の日本で、凄く有名な台詞を呟く。

結局鈴ちゃんが返って来るまで、数分の時間を要した。

第4話：力の片鱗（後書き）

更新完了。

今回は悠斗君の能力に触れましたが、分かりにくい点があったかもしれません。

要所所で細かな説明はすると思いますが、まあ、漠然とそんな力なのかあ…とと思ってください。その程度の認識で十分です。あんまり突っ込まれると作者が自爆します。

では、ちよくちよく更新していきますので、応援よろしく願います。

第5話：精霊姫

——Side ???

「あーあー、炎姉^{えん}え達だけずるいよねえ…」

とてつもなく広大な空間に一人の少女の言葉が響く。

そこには何もなく、色も無い。ただただ広い空間が広がっているとしか表現が出来ない。

そんな異空間に3人の女性達が顔を合わせていた。

「こら、光^{ひつ}ちゃん。久しぶりに集まったのにそんな事いわないの」

「だってさあ、風姉^{ふう}え。毎日退屈なんだもん。それに集まったって言っても、ボクと闇ちゃんと風姉えだけじゃん」

愚痴を言うのは、光と呼ばれた、白く長い髪で赤い大きな瞳の美少女。顔立ちは整っているがまだ幼さが残るあどけない表情で頬を膨らませている姿は可愛らしい。

フリルのついた白い服。所謂ゴスロリファッションがその可愛さを一層に引き立てる。

そんな少女を嗜めるのは風姉えと呼ばれた、薄い翠色のミドルヘアの美女。その瞳の色も翠で、嗜めるように光に注意をする。

その豊満な肢体を包むのは皮で出来たスカートと白いシャツにベス

トという格好で、どこことなくエルフの服を印象付ける。

「ふう…そんなことを言っても、私たちには所持者^{マスター}が見つからないんだから、仕方が無いでしょ？」

「何を悠長な！そんな事を言っているから、風姉えだけ行き遅れ…ご、ゴメンナサイ！！」

光の言葉に、風の視線が剣呑なものとなり、慌てて謝罪するが…

「う、うふふ……光ちゃん」

「（や、ヤバ？な、なんとか話題を変えないと……そうだ！）あ、闇^{あん}。さつきから、静かだけど？どうしたの！？」

先程から一言も喋っておらず、ボーっとしていた少女に話を移し、話題の変更を図る光。

その闇と呼ばれた少女は光と瓜二つの容姿であるが、決定的な違いは髪が烏の濡れ羽色と呼ばれるほどの美しい黒髪と無表情な顔である。

そして、着ている服も同じゴスロリファッションだが色は黒。見事に対照的である。

「……うるさいわね」

闇は光を一瞥し、それだけを言うとおっさりと視線を戻した。

「なっ！？」

この二人、性格が正反対なこともあってか、決定的に仲が悪い。

「な、なにさ！そんなんだから鉄面皮で可愛げの無い暗い奴になるんだよ！それじゃ、一生所有者は見つからないね！」

「……………」

「こ、このお！ああ、無視ですか！？そうですか！」

「はあ…どうして、炎姉様と水姉様といい、光ちゃんと闇ちゃんといい、仲が悪いのかしら」

困ったのもだわとため息を吐く風。図らずとも光の話題変更は成功したようだが、光の怒りは収まらない。

「なんとか言ったらどうなの！？」

「！？」

とことん無視していたが闇だが、何事か気がつき、無表情な顔を驚きに変えたかと思いきや、微笑を浮かべながら光の方を向く。

「どうやら、見つかったみたいよ」

「何がよ！？」

「あなたが、一生見つからないって言った私のマスターが」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる闇。

「闇ちゃん、それって本当？」

「ええ、風姉さん。少し前に大きな力を持つものがこの世界に召喚されたのを感知したので、ずっとそのお方を見ていたのですが……彼の器なら私を扱えることができるかと確信いたしました。それだけじゃありません、あの容姿と汚れなき美しい闇を秘めた愁いなる瞳……」

うつとりと心酔する闇。先程の無表情が嘘のようで、実際に付き合
いの長い光は口をあぐりと開けて驚いている。

我に返った闇がそんな光を見て、鼻で笑い……

「……みつともないわよ」

「う、うるさいわよ……」

そんな光を声を見無視しつつ、手を広げ空間に黒い穴を作ると

「それじゃ、私行くから。行き遅れないように頑張ってね」

二人に対して最大級の毒を吐き闇は消える。

後に残された二人は……

「……ふふ……あなたまでそんな事を言うの？闇ちゃん、次に会った時覚えてなさい」

「何様のつもりよ！！次に会ったらけちよんけちよんにしてやるっ

「！！つて、風姉え？」

「…うふふ、そういえば光も言ってたわよねえ」

「ゆ、許してえ！風姉え！」

光の絶叫が、広大な空間に木霊した…

——Side Yuto souga

なしてこうなつたんじゃろ…

「ほら、いくぞ！！」

旋武を構え、俺と対峙する鈴ちゃん。

【あきらめな。こうなつたらもう止められねえよ】

俺を諭すように声をかけるのは旋武。人間ならポンポンと肩に手を置いてくれたことだろうが、生憎旋武は武器だ。

「やりましょうマスター。この者に身の程を教えて差し上げましょう」

ゴスロリ美少女もやる気満々だ。

はあ……血気盛んだな最近の女の子は…

事の起こりは、前日の夜のこと…

三日前、俺達はようやく森を抜け街道に出た。そして街道沿いにあった小さな村で食料を購入し、出発したのが一昨日の昼のこと。

その後、街道沿いを歩いていると馬車が通りかかり、進む方向が同じだったのでちよつと失敬して走行中の馬車の荷台に飛び乗って距離を稼ぎ、昨日の夜によろやく国境を越えた。

そして、街道から少しはずれた森の中で、焚き火などの準備をし、慣れた手つきで野宿の準備をしていたのだが、唐突に鈴ちゃんが…

『悠斗、私と手合わせ願いたい』

とか、ぶつ飛んだことをほざいた事から始まった。

〓〓回想〓〓

「唐突過ぎて訳が分からんのだが……」

訳も分からんので、理由を問うと…

「悠斗の気配を感じる能力、身のこなし、猪を捕らえる技。そこから悠斗には相当な武を感じる。分かるのだ、強さが！武人なら強者と戦いたいと思うのは当然だ！」

あゝ随分とまあ過大な評価を……けどさあ…

「でもさあ、こっちは丸腰よ？それに……お客さんみたいだ」

鈴ちゃんと火を囲んで交わしていた視線を向ける。薄暗い森の中から黒いフリフリのドレスを着た…所謂ゴスロリファッションの美少女が出てきた。

「貴様！？」

鈴ちゃんが立ち上がり、旋武を構えるが少女はそれを気にも留めず、無視する形で俺に視線を固定したまま微笑む。

「流石です。お気づきでしたか…」

「まあね。君みたいな女の子だとは気がつかなかったけど。それに、気配の消し方は見事だね。鈴ちゃんが気付かなかったくらいだから」

「っ！？」

【けけけ、鈴ちゃんもまだまだなあ。刺客なら死んでるぜ？】

「黙れ！！」

旋武が少女から殺気がないので敵ではないと判断し、鈴ちゃんをからかい始める。そしてじゃれあう二人をまたも無視し、少女は俺に問いかける。

「どうして分かったのですか？私自身気配の消すのには自信があるのですが…」

「人の視線とか意識に敏感なんだよ俺。んゝもしかして俺が召喚されてから度々感じていた視線も君のものかな？」

その言葉に、少女は驚愕の表情を見せる。ふむ、ビンゴだった訳ですか

「まさか、『遠見』まで見切っているとは思いませんでした。それではさぞ不快な思いをしたことでしょう。申し訳ありません」

「いや、別にそんなに気にしてないよ。それに気を使って俺が眠りに入った時にはやめてくれたでしょ。あと水浴びしてる時とかね」

茶化すように言うと少女の顔が今度は真っ赤に染まる。

「い、いえ！？本当に失礼を！」

ペコペコ頭を下げる姿が可愛らしい。出てきた時にはクールな印象を受けたんだけどな

「さて、そろそろ本題と行こうか。見たところ君は俺に用があるみたいだ…それに…君は…」

言いよどむ。言ったらこの少女は不快な思いをするのではないか？だが、俺の心配は杞憂に終わった。

「はい、ご察しの通り。私は人間ではありません」

やっぱな…

なんとなくそう感じていた俺とは違って鈴ちゃんが声を荒げる。

「人間ではないだと！？貴様、何者だ！？まさか、魔族か！」

そんな鈴ちゃんの言葉に、無表情になる少女。そして不快感を表すような声で…

「魔族？そんな存在と一緒にしないで欲しいわね。まったく、これだから人間って奴は」

「まあ、異分子は排除したがるのは人間としては普通の感情だよ。不快な思いをしたと思うけど、鈴ちゃんはいいい娘だからね、話せば分かってくれる。だからさそのくらいで勘弁してやってよ」

鈴ちゃんをフォローするように会話に加わると興味が失せたとはかりに俺に視線を移し、深々と頭を下げた後

「私は闇の精霊達を司る精霊の姫。闇姫あんきと申します」

【闇姫！？じ、嬢ちゃん精霊姫せいれいきだったのか？】

聞きなれない言葉に俺と鈴ちゃんが首を捻っていると旋武が唯一驚愕の反応をした。

「旋武？精霊姫とはなんだ？」

【ああ、鈴嵐にもまだ話してなかったか。兄ちゃんも聞いてくれ】

そして、旋武が説明を始める。

纏めるところだ。

この世界の創造神。北欧神話におけるオーディンの立場にいるのが精霊王という存在で、その精霊王が生み出したのが六人の姫。

炎姫^{えんき}、水姫^{すいき}、風姫^{ふうき}、緑姫^{りょくき}、光姫^{こうき}、そして目の前に居る闇姫^{あんき}。

それぞれ、炎、水、風、土、光、闇の属性を持つ精霊を統括している存在らしい。

「実際に統括してるのは私たちが作った上位精霊です。上位精霊が精霊を生み出し管理しているのです。私たちがするべき事は別にあります」

「それは？」

「人間達は精霊を使う術を得ました。それによって生じる問題の解決…それが私たちの役目なのです。簡単に言うと悪いことに精霊を使おうとする者を滅す…といったところで」

旋武の説明を闇姫。呼びにくいから今後、あっちゃんに呼称…が補足して行く。

【他にも精霊には中位と下位精霊ってのが居る。下位精霊が集合して意思を持ったのが中位精霊。つまりは俺っちみたいなのだ。んで、上位精霊以上となると実体を持っている】

「ええ、結構博識ね。見たところあなたは緑姉さんの所の者ね」

【へ、へえ！！お初にお目にかかりやす！あっし旋武と申しませあ

「!」

「……この組のもんだ、おのれは」

妙なテンションの旋武に突っ込みつつ、俺は疑問に思ったことを問いかけた

「ねえ、あっちゃん」

「あ、あっちゃん!? あ、あの…あっちゃんとは私の事でしょうか?」

「うん。それで、あっちゃん。聞きたい事があるんだ」

「な、なんででしょう?」

呼びなれない呼称に困惑するあっちゃんだけど気にする事無く…

「なんで、緑姫じよくきなの?」

「………は?」

目が点になり、呆けるあっちゃん。見れば、鈴嵐と旋武も固まっている。

「いや、だってさ、あっちゃんを始めみんな精霊の属性にそった姫だろ?なのになんで緑姫なんだろって、普通なら土姫になるのに…」

「は、はい。それはですね…当初は土姫だったんです。ですが父上

…いえ、精霊王にですね『私だけ可愛くなくい。パパア』』と
年甲斐も無く泣きまして、緑姫になったんです」

どんな王だよ。仮にも神でしょうよアンタ。やっぱり神とはいえ娘
に弱いのか

とか、そんな事を考えていると

「違うだろう！！悠斗、質問するのはそれじゃなくて！何しに此処
に現れたか！？それを聞くべきじゃないのか！？」

旋武^{ほけ}と長年コンビを組んでいる鈴嵐が突っ込む。

「あ、それも聞きたかったんだよ。なんで？」

ようやく話が軌道修正され、若干疲れた表情を見せるが、真剣な表
情になりあっちゃんは語る。

「私たちは先程も申したように異変の解決を目的としています。で
すが、私たち自身では世界に介入できないのです。世界に介入する
には所有者^{マスター}という代行者を必要とします。私たちはその武器のよ
うにエレメンツウエポンとなりマスターと共に任を遂行するのです」

…なんか、嫌な予感がしてきたぞ。期待するような目で見ないであ
っちゃん

「マスターは私達が己の持つ感性にしたがって選ぶのです。そして
…私のマスターはあなた以外には考えられません。お願いです、私
を貰ってください」

予感的中！！って、待て待て

「ちょっと待って。あのね、俺はそんな大層な人間じゃないよ。ぶっちゃけると、誰が何しようが関係ない。勝手にしろよってのが俺の信念だし。そりゃ、勝手にした挙句俺に害をなすってんならボコるけど」

基本的に他人の事情に首は突っ込まない。俺に危害を加えない人間は放置。だって、関係ないし

「それで構いません。その意見には私も同感ですから」

おいおい…

「それでいいのかよ？当初の任とはかけ離れているけど？」

その言葉に、哀愁を帯びた瞳で苦笑いをするあっちゃん

「私は…他の姫たちとは違うんですよ……私の属性は闇。それだけで、人間達は忌み嫌い、禁忌とされている……ですから闇の精霊術を使うものは殆ど居ないんですよ」

なんとなく分かる。ようするに闇＝悪という意識が人間にはあるんだろう。鈴ちゃんも思うところがあるのか悲痛の面持ちで静に聞いている。

「魔族は魔族で精霊を使用しませんから…問題は殆ど起こらないんです。仮に起こったとしても忌み嫌われている私が何故それを解決しなければならぬでしょうか？そんなもの崇拜されている他の姫がやれば済む事です」

確かに、普段は忌み嫌つといて、いざとなったら助けてくださいは虫が良すぎる。

じゃ…それじゃ……なんで

「分からないな……それじゃ、君は何を求めて俺に所有者^{マスター}になれと？」

「忌み嫌われてるとはいえ、人間を滅ぼしたいとは思いません。ですが、他の姫たちのように嫌うもの達のために任を行う気もあります。私はただ、縛られたくない。自由になりたい……それだけなんです。先程も言いましたが、この世界では闇の精霊の力は禁忌とされています。ですが、時にその力に手を出す者も居ます。そして、その禁忌の力とされている物に手を出すのは…」

「碌な奴が居ないわけだ…」

「その通りです。何かしら野望を持つ者やこの世界を支配しようとする者……そんな人達をマスターにたくありません。何より、マスターの条件に合わないんです」

「条件？」

「はい。マスターとなる条件は二つ。力と想いです。私たち精霊姫を扱うにはそれ相応の力の持ち主…私たちは器と呼んでいます、それが足りないと力に耐えられずに身体が破壊が始まるのです。折角マスターとなられた方を死なせるわけには行きませんから、耐えられる器を持つ人物がマスターとなるひとつめの条件なのです」

「まあ、そりゃそうだよな…死なすためにマスターにするわけじゃないし」

「はい…そして二つ目が想いです。これはマスターが私と似通った想いを心に抱いているということです。例えば、私が人々を救いたから力を貸すことを信念にしているとしましょう。ですが、マスターが人々を滅ぼすために力を欲している。たとえ、器が合ってもまったくの正反対な信念では反発してしまい、契約自体が上手く行きません」

「だいたい読めてきたぞ…」

「要するに、その想いがあっちゃんと同じ人が居なかったって事だな？」

「はい。大半の人間が私を拒絶しているのですから当然とも言えるでしょうが…唯一。魔族は闇を崇拜しています、中には同じ想いの者が居たでしょう。ですが…」

「魔族は精霊を使わない。器のほうに問題があるわけだな」

「そりゃ、難儀な……」

「そして…ようやく……ようやく二つの条件が揃っている人を発見したのです。それが…」

「俺なのね」

「はぁ〜とため息を吐く。さて、どうしたものか……」

実際に、この少女の言う事は分からないでもない。俺と似通った部分が多々あるからだ。

「……駄目で…しょうか？」

うう…涙目＋上目遣いのコンボは反則に近いぞ？思わず反射的に了承してしまうところだった。けど、俺にも譲れないものが一つだけある。

「…一つだけ、条件がある。君はまだ俺の事を分かっていない。俺がどういった存在なのかを……」

俺は擬態を解き、本来の紫の瞳であっちゃん…いや、閻姫を見据える

「だから、君が俺という人間を知った時、それでもその気持ちが変わらないなら……その話し受けよう。じゃ、いつてらっしゃい」

そして、俺は自身の記憶をマナに変えて閻姫へと送る。さて…どんな反応を見せるか楽しみだな

数分後、相対したまま硬直していたあっちゃんが動き出す

「おかえり……」

「……あなたは…憎くないのですが？人が……」

俺の記憶を見て、あっちゃんが聞いてくる。

「正直、最初は憎かったさ。けどね…あっちゃんと同じなんだよ。どうでもいい…そうどうでもいいんだ。先入観で忌み嫌うなら好きにすれば良い。そんな奴らを構うよりも、俺という一人の人格を認めてくれる…そんな人を探そうと思ったんだ」

あの女性ひとみたいな人を…

「……私の思ったとおり、あなたは私に似ていますね。だからこそ私はあなたに惹かれたのかもしれない」

微笑を浮かべながらあっちゃんはそう告げ、ゆっくりと俺に近づき

「…契約を」

「…いいんだな？」

「はい。あなた以上に私のマスターとして相応しいものが居るはずがありませんから」

「わかった」

なら、拒む必要は無い。仮に元の世界に帰る事になってもあっちゃんも連れてけばいい。まあ、それによりこの世界のバランスが崩れるかもしれないが、知ったことじゃない。どうせ、俺は居なくなるんだしな。でも…

「契約ってどうすりゃいいんだ？」

「好きな武器を思い浮かべてください。今後わたしはあなたを守護する剣です…後はこちらで行いますので」

むう…武器…武器……やっぱあれだな…

「では…契約です」

そして、唇にやわらかい…あっちゃんの唇が触れる。

すると、黒い光に包まれて…気がつけばあっちゃんの姿は無く…代わり左手に漆黒の鞘に収まった小太刀が収まっていた。

その小太刀を抜いてみると…

月明かりに輝くその刀身も黒、柄も黒。色の濃度や明度は違うものの、見事に黒づくしである。

【これで、契約完了です。今後わたしはあなたの剣として、従者として共にあります】

旋武と同様、声が聞こえる。

「うん、よろしくね。でも、勿体無いな。女の子の姿の方が可愛かったのに」

【心配には及びません】

ポンッとコミカルな音を起て、目の前にさっきのゴスロリ少女ver あっちゃんが現れる。

「申し上げたとおり、上位精霊以上は実体化が可能です。それはエレメンツウエポンになっても変わりません。もっとも、その間は精

霊の力を失い、ただの武器になってしまいましたが」

「ああ、問題ない。そっちの方が俺は嬉しいぞ」

何しろ可愛いしな。さてつと…

「ごめんね、鈴ちゃん、すっかり放置しちゃってとりあえず終わってたから」

端で黙って事の成り行きを見守っていた鈴ちゃんに声をかける

「気にしないで良い。これは当事者の問題で私たちは部外者だ。口は挟めない」

【そーゆうこつた。しっかし、兄ちゃん、姫さんと契約しちまうとはな…やっぱ、只者じゃねえな】

「当然です。私のマスターですよ？」

旋武の言葉に不敵に微笑みながら俺の腕を取るあっちゃん。何はともあれ、新しい仲間を得た。

さてさて、こんな経緯があり冒頭に至る。

その日はうやむやに終わったものの、鈴ちゃんは忘れていないらしく再度手合わせを申し込まれた。そして、今回は武器があるので丸腰という理由は使えない。

なにより、俺以外の面子がやる気満々なのだから始末に終えない。

「はあゝま、いつか。あっちゃんにも慣れなきゃいけないしね」

そんな訳で手合わせが始まったのだが、勝負は一瞬でついた。

開始と同時に、右手を振り魔糸を鈴ちゃんの身体に巻きつかせ、動きを止める。

その奇襲に驚き、意識がそちらに向かった隙をつき、左手にある闇姫の切っ先を首筋に寸止めし

「はい、終わりっ」と

決着は着いた。

「流石マスターです。正直、私の出る幕はありませんでした」

手合わせ後、まさしくOTZ状態の鈴ちゃんに気を使うことも無く、あっちゃんは嬉々として言う。そして、鈴ちゃんを一瞥し…

「最も…相手が弱すぎたのですが」

辛辣な言葉を吐いた。

その言葉がグサリと突き刺さったかのように、拳を地面に打ち付ける鈴ちゃん

「くそ…私が今までやってきたのはなんだったのだ？井の中の蛙だ

ったというのか？」

「というより、戦い方の違いだと思うけど」

見てる感じ、鈴ちゃんの戦い方は一対一に慣れており、尚且つ一点突破。まっすぐ、純粹に一直線に向かってくる。

対して俺の場合、親父との一対一のほかに、母さんが作り出したゴレムとの模擬戦。さらに、オカルト集団や狂信者どもとの実戦で多人数との戦闘にも慣れてる。

さらに、戦い方も剣一辺倒ではなく、魔系などの魔法を使った戦闘をする。

一言で言う、戦い方に幅が無いのだ…

じゃんけんと言うなら、グーしか出せない鈴ちゃんに対し、俺はグーかパーが出せるって感じだ。

その事を鈴ちゃんに説明しつつ

「ぶっちゃけると相性が悪いんだと思うよ？しかも、今まで俺みたくに糸を使う奴と戦ったこと無いでしょ？でも俺は槍を使ってる奴と何度か戦ったことあるからね。その経験の差だよ」

槍とは多少違うが、十分修正が利くし、なにより間合いが読める分戦いやすい。

と、落ち込んだ鈴ちゃんを励ましてると…

「……マスターは…ずいぶんと優しいんですね」

無然とした表情でそう漏らすあっちゃん。ははぁん…

「嫉妬してるの？あっちゃん」

「なっ！？私は……いえ、はい。マスターは私の……私だけのマスターですから」

否定しようとするも、すぐさま認める。顔を赤くし、潤んだ目でそんな事を言う…

「ああ！！可愛いなあ、あっちゃんは」

よしよしと頭を撫でながら髪を梳く。

「子ども扱いしないで下さい……」

ぼそりとそう言いつつも、気持ち良さそうに目を細めて、されるがままになっているあっちゃん。

「鈴ちゃんも撫でてあげようか？」

「いらん！！」

顔を赤くしながら即否定する鈴ちゃん。むう…なんか悔しいぞ。

絶対いつか撫でてやろう…そう心に誓うのだった。

第5話：精霊姫（後書き）

更新完了。

自分でも脅威の更新速度。ってか、出来てた奴を勢いだけでUPしただけなんですけどね…

今回の話で新キャラ登場＋武器入手。

よいよ手がつけられなくなってきた主人公です。

今後どうなるのか？作者にも想像が付きませんが、のんびりいきたいと思いますので、温かい目で見守りつつ応援していただければ幸いです。

では、次回の更新でお会いしましょう。

第6話：銀狐

— Side Yuto Souga

むう…視線が痛い。

国境を越え、大和へと入った俺達は『南城』という街に来ていたのだが…

すれ違う人すれ違う人が、俺の顔を見やがる。

それというのも俺は今、擬態を施していない。それは、あっちゃんと契約した時に

『マスターは今のお姿で堂々とお振る舞い下さい。下賤な者どもの視線如きで、その至高の美しさを隠匿してしまうのは勿体ありません。そもそも。人間というのは…以後、愚痴が続いたので省略』

と言われたのが発端だ。そもそも擬態をしていた最大の理由は元居た世界での追つての目を晦ますためである。また、この世界では擬態時の姿が追つ手の対象となっている。そう考え、ならいっかという事で、金髪の紫瞳で街を闊歩しているわけだ。

「…やっぱりうざいな」

手当たり次第に、何見てんだ！？ああん！？と不良風に喧嘩でもうつたるか？

そんな風に思いつつ、町並みを見回す。

クリアールとはまったく違う町並みで少々面くらう。完全にファンタジーのお城がある街ですね。って感じのクリアールとは違い。此処は元居た世界に似ている。

家屋は和風もあれば洋風の物もあるのだが、全てが木造。

そして、何より驚いたのが

「機関車？」

そう、線路があり、当然レールがあり、駅がある。そこには機関車がポッポーてな感じで走っているのである。

「あれは精霊機関車だ。精霊のエネルギーを利用して推進力を得ている」

ふむ、要するに蒸気機関車の石炭が精霊になりましたバージョンか

「私も乗るのは初めてだがな。これに乗れば首都である『京』まで一直線だ」

駅前の隅の方で立ち止まって、鈴ちゃんの説明を聞く。そして、さつきから不機嫌そうに機関車を見ているゴスロリ少女に視線を向けた

「どした？」

「いえ……機関車は確かに便利なものだと思いますが、その代償の事を考えていたのです」

「……それは、この汚染されつつあるマナの事だな」

「…流石です。お分かりになりましたか」

それはこの街に入った時に感じた違和感。元の世界で車の排気ガスによる空気汚染があるようにこの街ではマナが汚染されている。それは微弱だが確実に進んでいるもので放っておけば生物は死滅するだろう。

「大方、あの機関車に精霊の力を増幅するようなもんでもつけてるんだろうさ。あれだけのもんを動かすのには相当の力が必要だろうからな」

「はい… 1 下位精霊に100しかないエネルギーを1000にしよ
うとすれば当然他のところに代償が出るでしょう」

「問題は肝心の作った奴らがこれに気がついていないって事だろう
なあ」

あっちゃんが言うには各属性の上位精霊がマナを取り込み、そこで
生まれたエーテルが各属性の下位精霊となるらしい。なので精霊姫
であるあっちゃんは当然、この異変に気がつき、また、マナを操れ
る魔法使いの血筋の俺も当然気がつく。

「愚かですね……自ら破滅の道を辿るなど…」

そこで説明を終え、だまって俺とあっちゃんのやり取りを聞いてい
た鈴ちゃんが口を開く

「…正直二人の話は良く分からなかった…だが、この機関車が便

利な代わりに自分達の首を絞めているという事はなんとなく分かった……どうにかなんのか？」

俺の能力を使えば、マナを正常に浄化することも可能だ……だがな

「鈴ちゃん、仮に俺がどうこうできたとしてもね、手を出す気は無いよ。自分の尻は自分で拭けてね」

「ええ。自分達の業を他力本願で何とかしようなど……虫唾が走りますね」

あっちゃんも言い方は辛辣だが俺と同じ意見のようだ。

「……言われて見ればその通りだ。それに、この国の事情に私が口を出しても聞く耳もたないだろうから……だが……」

「安心しなよ。後2、3年でどうこうなるっていう話じゃないしさ。馬鹿じゃなけりや対処法を見つけるでしょ。ってなわけで俺達は歩いていこう」

「はい。ほら、いきますよ」

あっちゃんが鈴ちゃんを急かし、その場を後にする……俺達は機関車には乗らずに徒歩で京を目差す。

南城で派手に余っていた金……といってもそれほど無かったが……を使いきり、食料など必要品を買って再び出発……したのだが……

「薄気味悪いな…」

鈴ちゃんがぼやく。若干声が震えてるし…

そう、俺達が入ったのは地元じゃ妖ノ森あやかしのもりと言っらしい。

通常、南城から京へ行くには機関車を使うか、森を迂回し街道を行くかのどちらかである。俺達はめんどいので森を突っ切ることにした。ちなみに言いだしっぺは俺。

【けけけ、鈴嵐はこう見えても乙女チックでな、お化けが怖いんだぜえ】

先程は小難しい話で会話に入れなかった旋武が嬉々として喋る。退屈だったんだろうなあ

「ば、馬鹿、怖くなど無い！」

声が震えてますよー？

「ふむ…鈴ちゃん、手でも繋ぐ？」

からかうような俺の提案は

—ギョ

若干ムツとなったあっちゃんが実行した

「あっちゃんも怖かったの？」

「違います！私は…た、ただ…マスターが…」

「ごによごによと言葉を濁す。つまりは嫉妬したのだ。ああ、可愛いなあ♪」

「よしよし。で、鈴ちゃんはどつするよ？つて、もうめんどくさいからいいや」

「なっ!？」

右側にはあっちゃんがいるので空いている左手で半ば強引に鈴ちゃんの手を握る…旋武を振り回しているのに華奢でスベスベだ。大方、力の恩恵なのだろう

暫く、真っ赤になった鈴ちゃんの顔と剥れたあっちゃんの顔。そして、二人の手の感触を楽しみつつ、歩いていく…

しかし、それほど起たないうちに繋いでいた手は解かれ…

「はあああ!!」

鈴ちゃんが旋武を振るう。

なるほど…妖ノ森ねえ…

そう、その原因は襲ってくる化け物によるものだ。

河童みたいなの、一つ目の気味悪いガキ。トカゲみたいなのとか…

ウザ！

中でも強敵なのが…

「くっ、まさかスライムとは！」

鈴ちゃんが舌を巻く。俺も驚きでいっぱいだ。

家にあったRPGでおなじみのモンスター最弱層のスライム。当然、あの愛らしい顔なんてもんは無くただの液体が集まったような物体なのだが…

これが、最弱なんてとんでもない。以外に強い。

旋武を振るうも、身体は液体で出来ているスライムには効かない…。何度か振るううちに体の液体が飛び、徐々に小さくはなるのだが、すぐさま飛んだ水滴がくっ付き再生。

おそらく、コイツを倒すには一撃で消滅させないと駄目だろうな…

さらに、身体を構成しているのは普通の液体ではなく硫酸のような酸のようなもので、触れたものが溶ける。

分かりやすく言うなら、酸を薄い膜で覆った知性の低い生物…かな。

なので、相手の攻撃も自分の体から水鉄砲を数滴発射すると言った感じだ。

【マスター、どうして攻撃をしないのです？】

相手の攻撃を避けつつ、鈴ちゃんの雄姿を見ながら分析を行っているところに、エレメンツウエポンモード…（以後、武器あつちゃんと呼称）が話しかけてくる。

「いや…ここで手を出すのはルール違反な気がして…」

RPGで例えるならLVMAXの改造データ使用のキャラが全力でスライムを攻撃するみたいなものだ。

あまりに大人気ない…大人じゃないけど…

【ですが…正直、あの小娘では勝ち目はありませんよ…】

そうだなあ…ま、負けもしないだろうけど

鈴ちゃんは弱くは無いのだが、攻撃が物理攻撃に限られるため、通じない相手とは頗る相性が悪い。

スライムもそうだが、レイス…所謂悪霊タイプの相手とも相性は最悪だろう。

「丁度良い機会だから、あつちゃんの力を使ってみるよ」

小太刀を翳し、魔力を込めていく。

【ああ…あ、あふう…ち、力が…あ…あ…あん…】

……なんかあつちゃんが色っぽい声を上げているが…気持ち良いのだろうか？

とりあえず、気にしないで両手に小さな重力球を作り…

「鈴ちゃん、どいててー」

と、叫んでから、ポイポイツと投げる。

スライムに向かって飛んでいった二つの重量球がぶつかり小さな穴が出来る。

マイクロブラックホール。

その穴にスライムは吸い込まれ、やがて穴は消失。あら不思議、物体が消えましたー！。

それを見届け、手元で小太刀をクルクルと弄んだ後で納刀。

「勝利の醍醐味、決めポーズ！どうよあっちゃん？」

【素敵です…マスター】

「ありがと。あっちゃん的能力も素敵だよ」

あっちゃん的能力は影と重力を自由に操れるらしい。そして、極めつけは重力を利用したブラックホールの形成。

すごいなあ、あっちゃんは。

と、あっちゃんを褒め称えていると…

【さ、流石姫さん。とんでもねえ力だ】

と、旋武の言葉に…あっちゃんはむつとし…人間verになると

「それは違います。私ではなく凄いのはマスターです」

と断言し、説明を始める。

「私たち、姫のエレメンツウエポンはその名の通り、『炎』『水』『緑』『風』『光』そして私の『闇』の六つの属性に分類されます。その他に全てのエレメンツウエポンがこの何れかの属性に属するでしょう」

【おれっちは緑だしな】

「ええ。そして、先程あげたのはあくまで初歩。各属性ごとに極めればさらに上位の力を使えるようになります。つまり、各属性ごとに二つ属性があるという事です」

あっちゃんのもう一つの上位能力が重力だ。

闇属性の究極技はブラックホールを作ることが可能。そしてそのブラックホールを作る際に重力を利用するのだ。その関係から重力を自由自在に操れる。

「上位の属性を先程言った順から並べると、『熱』『液』『塵』『空』『星』そして『重』となります」

あっちゃんの説明だと上位属性は恐ろしく威力が高く、全てが一撃必殺であるらしい。

「そして、いきなりマスターは私の上位能力を使いました…最もこれは私との相性が抜群でラブラブという事もあるのでしょうが、マスター自身の膨大な魔力とセンスによるものが大きいでしょう」

「そんなに褒めるなよお。テレテレ」

照れ隠しにあつちゃんの髪を撫でる。まあ、褒められて嬉しかったという感謝も籠っているが…

そして、あつちゃんの話と先程の苦戦から、鈴ちゃんは…

「…まだまだ……修練が足りんな…私は」

と、項垂れたまま呟く…

「ええ。初歩の『緑』の能力のうち、身体能力の強化しか使っていないのですからまだまだです。マスターの足元にも及ばないどころか、比べるのも失礼です」

「あつちゃん…鬼だな」

死人に鞭を打つあつちゃん。どうやら、俺以外の会話対象に毒を吐くらしい。

俺の言葉を聞き、慌ててあつちゃんは…

「で、でもまあ。あそこまで身体能力の強化という能力を極めるとは思っていませんでした。才能はありますよ」

と、フォローを入れた。

再び、歩みを開始する。

戦闘の結果、恐怖心は無くなりつつあり手は繋がれていない…ちょっとさみしい

「ところで、閻姫。前から聞いたかったのだが、他の姫はどういう方々なんだ？」

歩いていると鈴ちゃんが会話を振る。それに対し…

「…そうですね…一言で言うなら…人格に問題のある…性格破綻者ですね」

「……………」

そのあまりといえば、あまりの返答に俺と鈴ちゃんは固まる。

あっちゃんは続けて説明し、先程の言葉を補足していく

「長女である炎姉様は…筋肉隆々の熱血漢で、いるだけで暑苦しく、鬱陶しいです」

は？

「次女に当たる水姉様は、眼鏡をかけた知的な美人という容姿でプロポーションも抜群です。ですが…同性愛者の上にナルシスト…炎姉様とは犬猿の仲でいつも言い争っています」

ちよ、ちよっと…

「三女の風姉様も容姿に関しては穏やかな美人です。普段も物腰が柔らかい素晴らしい女性なのですが……癩癩もちで……時にヒステリックです」

い、イメージが…

「四女である緑姉様は…極度のぶりっ子の上、天然です。見ててしばき倒したくなります。容姿は美少女なので、それも合間ってさらに腹が立ちます」

も、もうやめてー！。あっちゃん！

「五女である光姫は、真に不本意かつ、遺憾なのですが…私の双子の姉というだけあって、容姿は瓜二つです。違いは髪の色と精神年齢です。あれはガキです。煩いです…おまけに馬鹿です。救いようがありません…」

「そして、最後は毒舌の闇姫という訳か……正直、イメージが崩れるな」

鈴ちゃんがため息を吐きながらいう。今までの事をちょっと根に持っているのだろう。

「誰が毒舌ですか！…そのままの事を正直に話ただけです。あなたの無力、無能もそのままでしたので言葉に出しただけです。真に心外です！気分を害しました」

むう…雰囲気が悪いな……俺はあっちゃんの頭を撫でて機嫌を取りつつ…

「それじゃ、所有者はどういう人なの？あっちゃんは知ってる？」

「申し訳ありません。他の愚図マスターにはまったく関心が無かったので存じていません。ですが、光姫と風姉様はまだ契約していません。行き遅れです…」

「そ、そう…」

ひどいなあ

「ですが、たとえどのような所有者を得ようとマスターには及びません！」

嬉々として、胸を張ってあっちゃんは断言する。

「ありがとね」

物凄く過大評価しているような気がするが…とりあえずお礼を言うておいた。

森の中を暫く歩いていると違和感に気がつく。

いつしか霧が濃くなり、鈴ちゃんの姿も見えない…

「マスター…」

「うん。結界だね」

それに、この巨大な力……どうやらボスキャラのようだ。

「存外冷静じゃの……もう少し狼狽すると思ったんじゃが……拍子抜けじゃ……」

そして、声が聞こえ……その途端に霧が晴れる。

視界には開けた木々に囲まれた場所で、巨大な岩が見える。

そして、目の前には白い着物を着た20前半くらいの年齢の女性が居た。

赤い瞳に、銀の長い髪。着物の隙間から胸の谷間が見えており、非常にセクシーだ……

そのことからダイナマイトばでいの持ち主だという事が伺える。

だが、それよりもだ。その女性の特徴として一番目立つのは、銀の獣耳と同じく銀の7本の尻尾。

「して……強き者よ。我に何用じゃ？討つためにでも来たか？」

「いいや、用件なんてないさ。ただ、この先にある街に行きたいから森を通らせてもらっただけだ」

敵愾心を丸出しにしているあっちゃんを制して、女性の問いに簡潔に答える。

「くくく…面白いの…我的姿を見てそのような態度に出るとは…人間は異端を認めず、我的姿を見るなり斬りかかってくるというのに……」

「まあ、俺もあんたと同じ側…異端サイドだしなあ。それで、そっちこそ用件はなんなのさ？わざわざ俺だけ招待して…」

厄介ことは嫌だなあ…

「何、お主に興味があつたのよ。長年、この森を守護しておつて退屈しておつてのお。遊び相手を探しておいたんじゃ…」

そう言つと、女性の周りに赤い魔力…いや、この場合妖力が纏わりつく。そして、あつちゃんも武器verになり、臨戦態勢になる。

「あのさあ、意味も無く戦いたくないんだけど…俺、別に戦闘狂つて訳じゃないしさあ……」

「ふふ、なら我を満足させたら褒美をやるつ」

褒美ねえ…

あんまし気は乗らないけど…仕方ない……

「分かつたよ。んじゃ、闇の姫に愛されし剣士。宗我悠斗…参る」

「妖ノ森の主にして…七尾の銀妖狐『銀^{ぎん}』いざ、尋常に勝負」

互いに、最低限の礼儀である名乗りを上げて…地面を蹴った。

銀に数本の魔糸が絡むが…

「小賢しい!!」

纏っている妖気が意に介せず、そのまま突進し糸が切れる。

そして、そのまま右手振るう…赤く鋭い爪が襲い掛かるが…

悠斗が小太刀を振るう。

「斬霧^{ざんむ}」

両手の小太刀での超高速の六連撃…それを片手で使う。

一瞬で三連撃を生み出し、一撃目で受け止め、二撃目で弾き飛ばし、三撃目で反撃に出た。

その反撃は銀の左手の爪で受け止められる。

「ふふ、楽しい。楽しいぞ!強きものよ!」

「はあ…」

興奮し、笑みを浮かべる銀に対して、悠斗の表情は優れない。

距離を取って向かいあう。そして…

「近距離は見事じゃが…遠距離はどうかの?」

銀の七本の尻尾がユラユラと動きはじめ、銀の毛並みは赤く、だんだん灼熱の色と変わり、辺りが歪んだように見える。

「…^{ほむ}焰炎！」

そのまま七本の炎の尻尾が伸びてくる。上下左右…様々な方向から七本の炎が迫り来る…しかし……

軽く、本当になんでもないように悠斗は剣を振るう。それだけで、七本の炎は四散した…

「そ、そなた…一体何を！？」

一連の流れに銀は驚愕する。一本でもかなりの威力を誇る焰炎。それを最大出力である七本を放ったのだ。あたり一面を一瞬で火の海へと変える事も可能な技を造作もなく打ち破ったのだ。

悠斗を睨みつけるが、そこで銀は気がついた。

先程とは違い、悠斗からは在る物が生えていた。

それは翼。いや…翼に見える何か……

羽根で出来ているわけではない。ただ、赤く輝く粒子が翼の形に集まって見えるだけだ。

そして、その翼からは無数の赤い粒子が迸っている。

「『フレア』って、俺は呼んでるけどなあ。俺の戦闘形態といった

方が良いかな？これがないと、自分の力に耐えられないんだよ。貧弱なんですね」

勝ち誇るわけでもなく、苦笑いを浮かべ淡々と自分の力の説明をする。

「……弱点を教えてくれるとは……余裕じゃの？」

「というより、こうなったからには勝ち目無いよ」

「ほざけー!!」

舐められている……最強の妖魔の一角とも呼ばれたこの七尾の銀妖狐が…

怒りに身を任せ、己の最大級の術を構築する。

七本の焰の尾は収縮し一つの球に。そこに落雷が落ち、雷を纏う。

「雷光焰塊……」
らいこうえんくわい

炎の塊がバチバチと帯電する。一体、どれほどの威力を誇るのか？

いざ、その球を投げようとしたところで…

「お疲れさん…」

今度は刀を持っていないほうの…右手を軽く振る。

それだけ…たったそれだけで…銀の手に集まっていた力の奔流は跡

形もなく消え去った。

「ば、馬鹿な……」

圧倒的…戦いにすらならない……

そして、ゆっくりと悠斗が闇姫の切っ先を銀へと向ける…

「くっ!？」

その瞬間、とてつもないGが加わり、蹲る銀。

身動きが取れない銀に歩み寄り、悠斗が手を伸ばしたところで銀は目を瞑る…

(殺される!?)

しかし…

「んう!？」

その手は銀の形の良い鼻を抓んでいた。

「俺の勝ちで良いよね」

そう言っつて、そのまま両手でふにふにとほっぺを突っつき始める悠斗。

即座に…

「マスター……！何をしていますか！？」

人型に戻り闇姫が叫ぶ。その表情は面白く無さそうだ

そんな姿を見て、優しく闇姫の髪を撫でる悠斗。

もう既にフレアと言う赤き翼はその背には無い。

そこで、我に返った銀が口を開く

「……止めを刺さんのか？」

その言葉に、悠斗は不思議そうな顔をし……

「殺しちゃったら……褒美が貰えない」

と、言い切った。

「ふふ……くくく……あつはっは！！我の完敗じゃ！」

あまりにも簡潔得的を得た返答に銀は笑うのだった……

しばらくして、ギンちゃんは笑うのをやめ落ち着きを取り戻す。

「しかし……そなたの力は反則染みておる……」

「だから言ったじゃん。こうなった以上……勝ち目無いって。俺も疲れるからあんまり使いたくないんだけど……ギンちゃん強かったから

……それよりも連れが居るから……ご褒美貰って早く行かないと」

「そうじゃったな……」

ちよつと、わくわくする。「ご褒美ってなんだろ……」

「なにやら嫌な予感がします」

あつちゃんが不意にそう漏らす。そして、ギンちゃんが手を差し出す

「手を……」

言われたので俺も手を差し出す。

だが、ギンちゃんの掌には何も無い……

「そのままじゃ……」

言われたのでそのまま待機する。やがて、ギンちゃんの体が白く発光し……光を放つ。

そして、光が晴れるとそこにはギンちゃんの姿は無く……代わりに

「小太刀？」

あつちゃんと同様で銀尽くめの……そして柄に紐みたいな装飾が七本施された小太刀が握られている。

【これが褒美じゃ……妖刀『銀狐七星』】

小太刀からギンちゃんの声がする。

「褒美つて……」

【我じゃ。不服か？】

そう言われてもねえ……どうしたものかと考えていると……

「そんなナマクラ。私が居ますのであなたは要りません」

【ほお……小娘。我と張り合うか？】

「張り合うも何も……相手にもなりません」

なにやら、火花が散っている。

【では、主にどちらにするか決めてもらおうとしよう。もっとも、そんな貧相な身体では主を満足させる事などできんと思うがのお】

「年増より私の方がお肌がピチピチです」

……論点がおかしなことになっている。つか、あっちゃん。あーたも、長生きしてるでしょうに……

「あー、盛り上がっていると所悪いんだけど……本来、俺は小太刀の二刀流……つまり二本必要なんだわさ」

その返答に互いが不服そうな顔をする……

【我だけでよいのに……】

「私だけで十分です…」

同時にそうばやく。あんたら実は結構息合っでしょ？

「とりあえず、ギンちゃん。いいの？」

【もちろんじゃ。正直、退屈しておってのお。そなたを主とし、死する時まで仕えようぞ】

それじゃ、貰ったところ。ここで断ったんじゃ、何のために戦ったのかが分からないし…

何より俺は貰えるものは有益になる限り貰ったとく主義だ。

「んじゃ、ヨロシクね。ギンちゃん」

【うむ…主よ】

こうして、新しく妖刀兼妖狐のギンちゃんが仲間に加わった。

「マスター行きますよー!!」

対照的にあつちゃんの機嫌は加速度的に悪くなっていった…

やれやれ……

第7話：京

——Side Yuto Souga

ギンちゃんを伴い、ギンちゃんの案内のもと、森を進んでいくと…

「うう…い、嫌…や、やめて…」

「……………」

スライムの大群に囲まれている鈴ちゃんを発見した……したのだが……

スリットからスライムが数体、鈴ちゃんの生足に絡みつき、また、びしょびしょの服が身体に張り付いて……

すんごく、えっちな格好だった……

【はぁ、はぁ……うへへっ】

旋武は旋武でそんな鈴ちゃんを心配するどころか、逆にその姿を見て楽しんでいる。

ギンちゃんの一喝でスライムは退散。無事に鈴ちゃんは救出された……流石、森の主

鈴ちゃんは涙目でへたり込むように座っており、両手で濡れた服を

隠している……うん、可愛い

「マスター……」

声に出してしまい、あつちゃんが冷たい視線を投げつけてくるが……
だって、しょうがないじゃない。男の子だもん！

ギンちゃんはギンちゃんで一喝した後、俺の頭の上でくんと匂いを嗅いでいる……

ギンちゃんは、剣の魂の様な役割をし別々に存在できるあつちゃんとは違い、全て一個の存在としてそこにある。

刀verと人型verが同時に存在できないのだ。

そして、そのほかに狐verがあり、本来の大きさは10mを超えるほどでかいが、自由に大きさを変えることが可能らしい。

その結果、手に乗るサイズの子狐となり俺の頭の上に居るのだ。

「……!? 銀!! あなたは何をしているのですか!？」

視線を俺からギンちゃんに移したあつちゃんが叫ぶが……

「うむ……主は良い香りがするの……」

無視してギンちゃんはほにゃっとなる。

「……………」

涙目の鈴ちゃん。

怒鳴るあっちゃん。

ほにゃ／＼となるギンちゃん。

【なあ、兄ちゃん。滅茶苦茶だな】

「言っな……」

このカオス空間をどうしよ……

暫くして、落ち着いた鈴ちゃんにギンちゃんの事を軽く紹介する。

そして、その日はその場で野宿をすることにしたのだが……

「勘弁してよ……」

どうしてだ？最近の女の子の間では戦闘がブームなのか？

そう言っただけ息を吐いた後、旋武を構えている鈴ちゃんを見る。

事の発端は、いつも通りの狩り↓調理↓食事の工程を終えたところ
で……

『弟子にしてくれ！』

と、鈴ちゃんが言い出したことから始まる。

そして、そのまま俺の返答も聞かずに、稽古をつけてくれと、旋武を構えて、今に至る。

旋武を構えたまま、鈴ちゃんは独白を始める……

「私は世界の広さと自分の未熟をことごとく思い知った」

「確かに、無様だったわね」

途中であっちゃんの毒が混じる……しかし、鈴ちゃんは……

「ああ！だから、自分を一から磨きなおさないと！」

開き直った！

あっちゃんも予想外の対応に驚いている……

「くく……良い気迫じゃな。まっすぐで……人間にしては珍しい……」

頭の上からそんな事を言うのはギンちゃんだ。

外見は小動物のギンちゃんが饒舌に喋るのは……なんかシュールだ

「でもなあ……鈴ちゃん、師事する相手を間違えているよ？俺は所有者になったばかりだからエレメンツウエポンの戦い方には詳しくないし、ましてや属性が違っし……」

【そりゃそうだ……】

俺の言葉を旋武が肯定する。

【なあ、鈴嵐。これから行くのはベルンティス最大の学園がある京だ。そこで戦う術をまた学べば良いんじゃないかねーか？】

「そうだな……俺じゃ、訓練の相手くらいしかやってやれないから、それがいいよ。それに、前回から時間たつてないし、俺の魔系の攻略法見つけたわけじゃないんでしょ？」

なら、結果は同じだ。

そう説得を続け、渋々鈴ちゃんは納得し、構えを解いた。ふう……どうにかこの場を切り抜けた……

「……主よ？本当に小娘の訓練の協力をするつもりか？」

「方便に決まってるんだろ。誰が、そんなめんどくせー事するか、そもそも俺は争いを好まない……平和の主義者だぞ」

シンボルを鳩から俺に変えても良いくらい、平和を愛する青年（自称）だ！

それからと言うもの、山歩きはえらい楽だった。というか、そもそも歩いてすらいない。

ギンちゃんが居るので森の敵は襲ってくる事無く、また10m狐verのギンちゃんの背に乗って一気に森を駆け抜け、翌日の昼に

は森を抜けた。

まさにギンちゃんさまさまである。

そんなギンちゃんだが、森を抜ける直前で子狐に戻って、丁寧に自分の足を炎で清めてよじよじと俺の頭の上に登って、丸くなった。どうやら気に入ったらしい。

そして、わざわざ足を綺麗にするあたりが物凄く好感度アップだ。ああ…ギンちゃん大好きだあ。

かなりテンションが上がった状態で街に入る……

「おお！」

町並みは一言で言うと、京都って感じだ！なんとなくけどな！！例の如く、視線を集めつつ街中を闊歩していく。

「して、鈴ちゃんや。どこに行こうか？」

「……城に行こう」

この大和を収めている国主に会って事情を説明しようというのだ。

でもなあ……いくらキャストに寛大といっても……

「帰れ！！」

はい門前払い。まあ、予測済みだけど……

俺達は門から移動して街を練り歩いていのだが……

あっちゃんはジト目で鈴ちゃんを見ており、ギンちゃんは……

「やれやれ……人間というものは理解が出来んな……力も無いのにどうしてえぱり腐ることが出来るのじゃ？」

との事。ギンちゃんは弱肉強食といったシンプルな考え方をする。

まあ、人間以外の生物にはそれが当てはまるんだが……

魔法使いの血筋に七尾の銀妖狐……そして精霊姫。

最強人外オールスターズが揃ったこの面子を門前払いにするとは正気とは思えないらしい……

「身の程をわきまえさせてくれようか……」

「……初めて意見が合いましたね」

なにやら物騒な事を言い始める、最強の妖と精霊の姫。

「くらくら……」

そんな二人を止める。異世界まで来てお尋ね者になるのはごめんだ……いや、もう手遅れか？クリールでやつちまったからなあ……ハハ、追っかけられてばっかだの人生だなあ。

まあ、それは置いて

「んで、マジでどうすつか？」

遠路はるばる此処まで来たのにこの扱い…むう、温厚を心情にしている俺だが、ちとムカツと来るねえ…

「ですから、やりましょうマスター」

「そうじゃの」

暴れる気満々の二人。三人してマジで暴れたら冗談抜きでこの国を滅ぼす可能性がある。いや、可能だろうな……

「は、速まるな！もう一度、もう一度話をしてみよう！」

そんな二人を見て、慌てて鈴ちゃんがとりなす…

「…ふむ、小娘がそこまで言うならよかるう。じゃが…」

「態度が改められなかった場合は好きにさせてもらいます」

怖いよお二人さん…

そして…

「帰れ！！得体の知れない者を城内へは…」

「ゴタゴタ抜かすな！！死にたいのか！！」

うわあ、鈴ちゃん必死だ…

門で言い争う鈴ちゃんと門番。俺はそこからやや離れて場所で鈴ちゃんを傍観している。

頭の上でギンちゃんは機嫌よさげに面白そうに見ており、あつちゃんは返答次第では……と無言のプレッシャーを放っており、それが尚更、鈴ちゃんを焦らせる。

さらに道行く人の視線も集中。人垣が出来る……

そうこうしている内に、城内から鎧を着た男が二人来てつまみ出そうとする…

おお、鎧武者！！かつこいい！

それがこの国の兵士なんだろう。門番は足軽みたいな軽装をしているのに、やってきた増援は鎧を着た武者。

カッコいいなあ。重くないのかなあ？隙見てパクろっかな……とか思いながら見ていると……

「邪魔だー！！」

鈴ちゃんが、旋武を一閃して威嚇。おい、鈴ちゃんやーい…

「曲者だー！！」

「出会え出会えー！！」

状況悪化！鎧武者増大！！時代劇みたいになってきた。まあ、舞台も和風のお城なんだけどさあ……和服を着たお姫様が居ないのが残念だ…あれ？まてよ？

俺達が悪人役か！？

完全に取り囲まれ、どうせなら主役がよかったなあと頭を抱えていると……

「なんの騒ぎだあこりゃ？」

人垣から茶髪のピアスをつけ、この土地では珍しいであろう…薄手のパーカーのような洋服とジーンズのようなものを穿いている、見た感じ、不良高校生です！って感じの男が現れた。

「おお、これは誠人どの！いいところに……この賊どもが我が城に！」

見たところ、結構な立場の人らしく鎧武者の一人が状況説明。そんな中……

「いい加減に鬱陶しいですね……」

「そうじゃの」

二人に魔力と妖力が集まっていくのを感じる。あっちゃんは滅茶苦茶不機嫌…ギンちゃんは声色からしてちよいと楽しんでません？

【お、お二人さん。落ち着きなすつてえ！り、鈴嵐。頑張れ！！この国の未来はお前に掛かっている！つか、兄ちゃんも止めてくれ！】
そんな二人に旋武も拙いと思ったのか、テンパリつつどうにかしようとして俺にすぎるような声をかけてきた。だけど…

「あー。俺は無干渉……中立を貫こうかと」

個人の意思を尊重します。お好きにどうぞ…

そんな俺の言葉に鈴ちゃんが恨みがましく睨むが、それも一瞬の事で……

「貴様ら！状況を分かっているのか！いいから通せ！！」

「賊の癖に！お前らこそ！逃げ道は無いぞ！！観念しろ！」

うん、見事な平行線。見てるだけなのでちょっと面白いと思う俺はギンちゃんと案外似ているのかもしれない。

それを打開したのは……

「なるほどなあ……お前ら、ちょっと下がってる。俺がその姉ちゃんと話をする」

さっきの茶髪君だった。

鎧武者達を下げて、前に出てくると鈴ちゃんと向き合って……

「中に通せと言うが……用件は？」

「だからキャストだ！クリアールにて新たなキャストが召喚された。なのでこの大和にて保護を頼みたい！それをこの門番は……」

「何がキャストだ！此処最近、そのような報告を受けたことは無い！騙されるか！」

……ふむ。

その門番の言葉から推察するに、此処最近で召喚されたのは俺だけ……いや、まだ発見されていないという考えもあるが……そっか、沙那ちゃんは此処にはいないのか……

またも騒ぎ出した鈴ちゃんと門番を宿める茶髪君。

「まあまあ、んであんたがキャスト？」

「違う。キャストはこっちにいる男の方だ。私はメルティアの辺境にある部族。『華星^{かせい}』の鈴嵐という者だ。このものを案内してきた」

そこで視線が傍観者と化していた俺へと向く……そして、息を呑む茶髪

「…あんた……綺麗な顔してるなあ」

「どーも」

マジマジ見るな気色悪い…ただでさえ、沙那ちゃんが居ないってわかってちよっと苛立ってるんだ。

俺もあつちゃんサイドに移行しちゃおうかな……中立？……そんなもん即刻やめてやるさ。

そんな事を考えていると……

「着いて来い」

との事、あれ意外…信じちゃった？

「誠人殿！？」

「この男が着ている服の生地はこの世界には無い。恐らく、こいつらの言っていることは本当だろう。仮に賊だとしたら真正面からたつた三人でやつてくる馬鹿は居ない」

おお、マジマジ見たのはマントの下の俺の学ランかぁ。なんだ、茶髪だから馬鹿かと思ったのに結構頭が良いみたいだ。

茶髪君に連れられ、俺達は見事な日本庭園を通り過ぎ、城内に入る。

一際大きく、中央に天幕がある部屋に通される。時代劇の將軍様が出てくるような…そんな部屋だ。

そして、そこにはちよんまげのお殿様ではなく、一人称が麿の公家かぶれでもなく……

鎧を来た髭面のダンディなおっさんが居た。渋い……

そしてそんなおっさんに報告する茶髪君。

そして、マジマジと俺の顔を見て、おっさんが一言…

「美しい……」

そう呟く……とてつもない悪寒がする。

「あ、コホン。勘違いするでないぞ。そっちの趣味は無い！」

凄まじい程の殺気を撒き散らすあっちゃんに慌ててそう返すおっさん。

「紹介が遅れた。ワシは源豪三郎昌徳みなもとさぶろうまさのりという。この国の最高責任者の立場に居る」

「宗我悠斗ッス」

「私はメルティアにあります『華星』の里から参りました鈴嵐とい
います。」

おっさん（名前が長いので以後こっ呼称）の自己紹介に片手を上げてフレンドリーに返す俺と深々と頭を下げる鈴ちゃん。

あっちゃんは完全にそっぽを向き、無視の姿勢を見せ、ギンちゃん
は俺の頭の上で寝息を立てている。自由だなあ二人とも…

「して…悠斗殿。悠斗殿は異世界の人間……キャストだとか？」

「ええ、それについては私が…」

自己紹介を終え、話に入る。

俺よりこの世界の事情に詳しい鈴ちゃんが代わりに説明を始める。
その間、茶髪君は……

「宗我悠斗？どっかで聞いたような……」

と、しきりに何やら考えていたようだが……

「やーめた。思い出せねえなら大したことないだろ」

あつさり放棄。結構良い性格してる。そして、俺の方に寄って来て

「なあ、どっちが本命だ？」

と、気さくに話しかけてきた。

「……は？」

「だから、あつちで話してる華星の姉ちゃんとその可愛らしいお嬢さん。どっちがタイプなんだ？」

ああ、そう言うこと……うん。どっちも好きだなあ。

鈴ちゃんには鈴ちゃんの、あつちゃんにはあつちゃんの良いところがある。あ、当然ギンちゃんも好きだ。なんだが…

「私に決まっているじゃありませんか」

何を当然なことを言っている？と言った感じで、俺の隣に居たあつちゃんが答える。

「あの雑魚娘に比べたら…私のほうが遥かに魅力的です。何より、マスターへの愛は私が一番です！そんな私が負ける？はっ、寝言は寝てから言っただけいいですね」

あつちゃんの言葉に、そうなん？と俺に確認の意味を込めての視線を送ってくるが肩を竦めてはぐらかす。

そうこうしていると、向こうの話も終わったようで…

「クリアールめ……ホールの異常を利用したか！」

と、おっさんが吐き捨てた。

「ホール？」

聞き覚えの無い言葉に俺が問い返すとおっさんは説明してくれた

「ホールというのは召喚の際の出入り口となる穴だ。一方通行で召喚先に出口が、召喚元に入り口が出来る。それによって道が生まれ召喚が可能となるのだ」

「召喚というより、突然現れてるって感じだな…。俺も三年前にここに来たんだ。それから結構安定してたんだがなあ……原因は調査中なんだが、まだなあんも分かってない」

このことは他言無用で知っているものは限られているらしい。

「国内のは秘密裏に発見次第保護してるんだが……クリアールとはなあ」

「こうしてはおれん。直にクリアールに事実確認と抗議を。誠人あとは頼む」

それだけ言つて、おっさんは慌てて出て行ってしまった。

「行っちゃったよ……んでさ、誠人って言ったか？俺達はどういう処遇を受けるんだ？」

「ん？ああ、俺と同じで、この世界の事なんか殆ど知らないだろうからまず、エレンツァ学園に通つて知識を学ぶことになる。っと、そついやちゃんと自己紹介して無かつたよな。俺は霧谷誠人だ。キヤストの先輩つて奴かな？年は今年で18だ。」

茶髪君が自己紹介をする。

年上か……まあ、どうでもいい。それより、図らずとも学園に通えることになったなが……疑問点がある……

「学費や住居などはどうするんだ？」

「学費や諸々の諸費用は源の旦那の貸しだ。金が出来次第返済することになっている。住居のほうは学園所有の寮だな」

むう……借金かあ……

「誠人殿。すまないが私も学園に通いたいと思っているのだが……」

俺が借金に関して抵抗を感じていると……鈴ちゃんがそう申し出た。

「華星の一族が？なんで今更……華星は厳しい修行を里でしてるんだろ？」

「ああ、だがな……私は里外に出て世界の広さを知った……未熟な自分を鍛えなおしたいんだ。口ぞえを頼む」

鈴ちゃんがそう頭を下げる。

「学園には結構厳しい入学試験があるんだ……まあ、華星っていう点と、悠斗を此処まで送ってくれたって言う点から、源の旦那に言えばそれは何とかなるんだが……学費は？」

「どの程度だ？」

「一年間で50万レーン」

レーンとはこっちの世界のお金の事だ。価値は元の世界の円と同程度……

「それと寮に住む場合は+50万レーン。まあ、朝と晩飯が付いてるからお得だけどな。で、占めて100万レーン」

その言葉に鈴ちゃんは絶句。

ちなみに俺達のもち金はせいぜい295レイン。此処に来るまでの旅費で盛大に使ってしまったからなあ……

「となると…全部で300万レインか」

俺の分と鈴ちゃんとあっちゃんの三人で300万レイン。

あっちゃんの正体が闇姫である事は隠すことにした。禁忌とされる闇の力の最上位のあっちゃん。バレたらめんどくさい事になるからだ。

んで、人間として振舞うと言う風にカモフラージュすることにし、名前も『杏^{あんず}』という偽名を使うことにしたのだ。まあ、さっきはギンちゃん共々正体がバレそうだったがな……

本人はかなりぶーたれてた。曰く『それでは、マスターが護れません！』らしい。まあ自分を護る位なら問題ないし…。ずっと剣の状態で居るつもりか？と返したら渋々了承した。

ギンちゃんは狐状態なので問題ないだろう……多分。

そんな訳であっちゃんも人間としてカウントし俺と共に学園に通うという事だ…だから

「誠人さんや、俺も援助いらないから。借金とかも抵抗あったし、それにあっちゃんと鈴ちゃんと一緒に入学したいから。同じ扱いで良いよ。だから、二人と一緒に金稼いでもう一回来るね」

「そう言うなら俺は構わないけど……当てでもあるのか？」

当てねえ……一番手っ取り早いのは……

「とりあえず、金持ってそんな奴を教えてくれる？そいつんちに強盗入れば……」駄目……」「……冗談だよ」

お茶目な提案に速攻で却下する二人（鈴ちゃんと茶髪）。

「はあ、んじゃ酒場に行ってみる。あんたは華星だという事だし、そこそ腕は立つんだろ？……」

呆れたようにいう茶髪君……そこに行けば、どうにかなるのだろうか？だが、それよりも気になったのは……

俺、さりげなく戦力外通知された？

——Side クリアール

悠斗達が京へと到着した数日後。大和の外交からの書面を見てミハイルは憤慨する。

「カリウス……！国境の兵は何をやっていた……？」

「がなるな。そうは言っても仕方が無いだろう……」

指示が出たのは国境沿いの駐屯軍がある街。

「街道での目撃情報によると、それらしき二人組みは国境付近で街道を外れて行ったらしい。恐らく、街を迂回するような形で国境を越えたのだろう」

国境とひとえに言っても、物凄く広い。全てを把握するのは大人数で事にあたらなければならない。それでも、全ては無理だ。

ましてや、今回は内密に処理しなければならない懸案。国境沿いに兵をずらりを派遣したとすれば、何かありますと公言しているようなもの……本末転倒である。

「くそっ!？」

半ばこのような結果を予想していたカリウスは悔しがるミハイルを横目で見つつ、外交官への激励の言葉を送るために部屋から出て行った。

（これから忙しくなるだろうからな。晩飯に誘ってやるか…美味しい物でも食わせてやろう）

第7話：京（後書き）

更新完了！！そして、今回からはキャラが増えてきたんで、あとがきにてキャラ紹介を行って行きたいと思います。

トップバッターはもちろん、我らが最強主人公です。

name 宗我悠斗

class 魔法使い

闇姫 所持者

weapon

エレメントウエポン 闇姫（小太刀）

妖刀 銀狐七星（小太刀）

ability

宗我流小太刀二刀戦闘術

エーテル&マナ変化・変質（魔系・etc）

?????（現時点では不明）

第8話：金稼ぎ

——Side Yuto Souga

茶髪君に教えられた酒場に行き、中に入る。

酒場は、和風な町並みで外見も和風の建物なのだが、中はまるっきり西洋の酒場。バーテンダーみたいな奴もいた。

空席に座って辺りを見してみる。注文はしない。てか、出来ない。お金がないからねえ…

見た感じ、客も屈強な男やガラの悪そうな男…

「あら、良い男♪」

そして、化粧が厚くやたらと香水臭い女が寄って来る…着ている服は和服なのだが、大胆で肩が出ており、とか胸元も露出している…正直、ちよつと退いた。

「臭いです……それに化石のように厚い化粧…醜いですね。消えなさい」

「あ、あっちゃん!？」

あっちゃんの毒舌がパワーMAXになってるよ!？それに黒いオイルが…いや、比喻でもなんでもなく闇を纏っている。

ギンちゃんも鼻が利くせいか、かなり辛そうで、頭からスルスルと

降りてきて前足と口で器用に俺の学ランのボタン上二つを外して、懐に潜り込み…くんくんと鼻を押し付けてくる。

どうやら、それで匂いを感じないようにしているらしい。その一連の仕草が堪らなくギンちゃんを可愛く見せる。

女性はあつちゃんの辛辣な言葉に怒りを表したが、闇を纏ったあつちゃんの気配に恐れ、足早に逃げていく……生存本能が働いたか。

「悠斗、これを見てくれ」

そんなやり取りを華麗に無視して壁を…いや、正確には壁に張つてある張り紙の数々を見ていたのだが、頃合を見て話しかけてきた。

鈴ちゃんに言われて俺も壁を見てみると、そこにはお尋ね者やなんらかの依頼を書かれた紙の数々が張つてあったのだ…なるほど、茶髪君が言っていたのはこういう事ね…

どうやら此処は賃金で依頼を頼んだりしたり、お尋ね者を狩る賞金稼ぎなどのアウトローたちの斡旋も兼ねているらしい。

つまり、この報酬で学費を何とかしろと言う訳だ。

額が高いほうから順番に依頼の内容を確認していく…

「なんだこれは？ふざけてるな…」

一番高い1億レートの報酬の紙を見て鈴ちゃんが漏らす。

【鳳凰^{ほうおう}の生け捕り？け、正気とは思えねえな。一億でも割があわねえぜ】

旋武も嫌悪感を出す。

「……此処まで愚かだったとは…救いようがありませんね」

「…まったくじゃ。我ほどではないが…人の手に負えるモノではないぞ。ましてや生け捕りなどな…」

あっちゃんと俺の懐からひよこつと顔を出した、ぷりちーなギンちゃんが呆れたように言う……えっと…

「ねえ…俺にも説明してよお」

完全に蚊帳の外何言っているか分かりません。

「し、失礼しました！！マスターをないがしろに！」

ぺこぺこと頭を下げて丁寧にあっちゃんが説明を始めた。

「以前に説明したかと思いますが、上位精霊の事を覚えていますか？」

「あれだろ？属性ごとに精霊を生み出してるって…」

「はい。なので属性ごとに6体の上位精霊がいます。人間達が実際にあがめているのは姫や王ではなくこの上位精霊です」

「ほうほう、んで鳳凰はその上位精霊の一体なの？」

「その通りです。鳳凰は炎の上位精霊です。水には霊亀^{れいき}、風は青龍^{せいりゅう}、土には白虎^{びゃくこ}が居ます」

なるほどねえ。その鳳凰を生け捕りにと……はは、確かに割に合わん。

「そして、光と闇には…私と光姫のように瓜二つの精霊…光には白き『索冥^{さくめい}』が私のは黒き『角端^{かくたん}』が居ます」

聞き覚えがある上位精霊の名前だが、鳳凰と霊亀は四霊、青龍と白虎は四神。

そして索冥と角端は同じく四霊に挙げられる麒麟の一種だったはずだ。確か、毛並や鱗の色で名が変わるらしいのだが…

いずれにせよ、中国に伝わる伝説の生き物だ。

説明を終え、そんな依頼は無理だ。ということで視線を横にずらせば、同じく一億レーンの…

「七尾の銀妖狐の討伐？」

鈴ちゃんが漏らし、視線がギンちゃんに集中する。

「ほう、我もか……まあ、くるなら来ればよい。我は今、世界で一番安全な場所に居るぞ」

そう言って、スリスリと頬を頭を擦り付けるギンちゃん。それは主

の事じゃぞ？という意味だろう。あっちゃんが負けじと俺の腕を取る…

「つかさあ、よくばらないで、もうちょっとランク下げよう？」

もつと…そう、500万程度でいいんじゃないですか？身の回りの物とか買ったりするし…学費引いても三人で200万あれば十分だろう。

「これなんて、どうでしょうか？」

あっちゃんが指を指したのは250万の報酬が貰える依頼が数枚が貼ってある紙。

「二組に分かれて250万ずつ…競争なんてどうでしょうか？」

ありや、珍しい。あっちゃんがこんなこと提案するなんて…

（ふふ、うまくすれば私とマスターが二人きり……）

不敵に微笑むあっちゃん…何考えてるんだか…そして、食いついてきたのは

「ほほう、面白そうじゃな」

ギンちゃんである。

「私もそれで構わない」

やる気満々の鈴ちゃんも了承。

「俺も異論は無いぞ」

と言うわけで、組み分けになる。

「まあ、俺と鈴ちゃんは別れるのが妥当だよな」

ギンちゃんのおっちゃんの超好戦的ペアを組ませるのは想像するだけで恐ろしい。

「となると…あとは私がマスターと…」

「では、我が主と共に行こう」

……あつ、なんかピシッ！って亀裂が入ったような効果音がした。

「……私はマスターと契約したので共に行動しなければ満足に力が使えないんですよ？」

「嘘じゃな」

うん、それは正直問題ない。

確かに俺が居ないとおっちゃんは単体で能力を使えない。それは俺の魔力を糧に力を使うからだ。

だが、俺とおっちゃんが離れたところで問題は無い。それは俺の手にある漆黒の小太刀がおっちゃんと繋がっているからだ。

俺↓小太刀↓あつちゃんと言った感じで魔力を供給すればいいのである。

しかも既にあっちゃんにはある程度の魔力が貯蓄してある。さつきから闇の能力を無駄遣いしてるしね。

「その点、我はひ弱な子狐じゃ。コンッ」

「はっ。虫唾が走りますねその猫撫で声……いえ、狐ですか……いずれにしる白々しい」

ギンちゃんにいたっては姿は可愛らしいが戦闘能力は人型時とそう変わらない……まあ、若干ではあるが人間ベースの方が妖術の精度と威力が上がる分強いらしいが…

ちなみに最も強いのが刀状態で俺が使った場合である。

ともあれ、あっちゃんの言葉でギンちゃんにも火がついた。

「やる気か？小便垂れの小娘が…」

「銀色の狐の皮はどれくらいで売れるんでしょうかね？」

はあ…まったく。

「はい、喧嘩しない。」

100リーラ硬貨を取り出して…

「表がこっちの数字が書いてあるほうね。で、表が出たらギンちゃん、裏であっちゃんが、俺とペア…いいね？」

「うむ、それなら公平じゃな」

「…マスターが決めたことに私は従います」

「よし、じゃあ…行くよ！」

コインを指で弾いて上に飛ばし、落ちてきたコインをキャッチ。

そして、運命のペアが決定した。

「あの二人仲良くやってるかなあ」

ギンちゃんの背に乗り、目的地へ向かいながら俺はそう呟く。

「どうじゃろうな…じゃが、我はあの悔しそうな顔を見ただけで
……くくく……」

ご機嫌なギンちゃん。勝負にはギンちゃんが勝利したのだ。

そして、俺達は妖ノ森の奥に生えているという貴重な万能薬を作る材料各種という依頼を選んだ。

ギンちゃんが居るので凄く楽だ。モンスターは襲ってこないし、場所
はギンちゃん知ってるって言うし……

勝負と言いつつ、絶対にこっちのほうが速く終わる。

「こっちが終わったら、こっそり見にいつて見ようか?」

「そうじゃの…では、急ぐぞ!」

こんな楽な仕事で250万かあ…

——Side Rinran

「……………」

「……………」

無言で歩く私達。正直、空気が思い。

【ひ、姫さん。こういう事もあるって】

旋武がなんとかしようと頑張っているが無視される…ちょっと旋武に同情する。

「いい加減にしろ!過ぎたことをグダグダと……………」

「……………」

まったく…

「ほら、急がないとますます悠斗と合流するのに時間が掛かるぞ?」

「何をしてるんですか!?!鈍足ですね!?!もっとキビキビと歩きな

さい！」

……悠斗の名を出したらこれか…現金なもんだ…

「それと…今回の件。私は手を出しませんので」

と、闇姫が行って来た。

「理由を聞いても？」

「どうして、私が人間同士のいざこざに首を突っ込む必要があるんですか？」

私たちの任務は近隣の村を襲う盗賊の退治。結構有名な盗賊らしく、頭を筆頭に複数人に賞金が掛かっておりトータルで250万。

「なら、どうして着いてきたんだ？」

「好きで着いて来たんじゃないやありませんよ。見ていたでしょう？」

確かに……

「あたなは強く成りたいのでしょうか？だったらこの程度一人でやるくらいが丁度いい修行になるんじゃないやありませんか？それとも…出来ないのですか？」

不敵に笑いながらそう私に問いかける。明らかな挑発…

「上等……やってる」

「ふふ、期待してますよ」

その挑発に私はあえて乗ってやる。

聞き込みをし……盗賊の住処が山岳近くの廃墟であるという事の情報を得た。

「まったく…ようやくですか」

やれやれと言う閻姫。正直、何もしなかった癖にと文句を言いたいが、最初に何もしないとわれ、私自身が肯定したので言うに言えない。

この理不尽な怒りを盗賊にぶつけてやろうと…私はその場所に向かった。

二日後の深夜。ようやく盗賊の根城へと着く。

私達は岩陰に身を潜めて、様子を確認する。

「…全員居るみたいだな……」

悠斗ほどではないが私にも気配を察知することは出来る。もっとも…

「まあ、気配を感じられなかったら正直あなたの能力を疑いますが……なにしろ相手は隠しても居ないのですから」

閻姫の言うとおり、隠している気配を察知することが出来て一流だ。

ただ、気配を感じる程度では戦う者ならむしろ普通。

超一流ともなれば相手の行動すら気配で察知することが可能。しかも、その範囲も馬鹿げてる。まあ、それに該当する人物を一人知っているが…

「それで、どうするんですか？」

闇姫が聞いてきた。

「どうするもこうするも……正面突破だ」

悠斗なら違った戦い方が出来るのだろうが、私には力押しの戦い方しか出来ない……呆れたような顔をするも、闇姫は…

「では、頑張ってください」

と、送り出した…

入り口まで行き…私はドアを蹴り飛ばした。

「なんだ!？」

「お、女!？」

その行動の中には十数人のむさ苦しい男達が居た。突然の事に盗賊は困惑したが、私の姿を見るなりニヤニヤと下種染みた笑みを浮かべる。気に入らない…

「おやおや、こんな美しいお嬢さんがなんのようだい？」

リーダーの男が笑みを浮かべて話しかけてくる…舐められている。

「お前らの…首を取りに来た」

「おほー。賞金稼ぎかよ！良い女なのにもつたいねえ！」

「お頭あ、ひとしきり楽しんだ後、売り飛ばしましょうぜ！」

「…物好きめ…まあ、偶には部下にも褒美をやらんな。お前らの好きにして良いぞ」

部下の男達が武器を手に持ちニヤニヤと近づいてくる。私は荒れ狂う怒気を抑えつつ、逃げるように外に出る。

「なんだよ。にげんなよお」

「お姉ちゃんから来といてそりゃないぜえ」

当然のように追って来る男達。そこで、戦闘にいた男に私は旋武を振るう。

刃ではなく峰。直撃した男は気絶こそはしたが、命には別状は無いはずだ…

「てめえ！！！」

そこで完全に舐めていた男達から殺気が登る…

私は旋武を数度振り構える。

「あのような狭いところでは自由に振り回せないのではな……掛かって来い下種共！」

その言葉を切欠に、私と盗賊たちは同時に地を蹴った。

「思ったよりやりますね。ただの雑魚ではありませんでしたか…」

隠れていた岩の上に座って、私はあのお嬢さんの戦いぶりを見ていた。

自分の獲物と地形を考えて、敵を外に誘き寄せたのもよし…さらに…

『はぁぁぁあ!!』

一撃の下敵を倒す。さらに間合いの広い武器である旋武…そのこともあってか盗賊たちは攻めあぐねてます。

多対一の不利はそれで帳消し。なにしろ相手が一人づつしか攻撃してこないんですから…

「…いくら盗賊だからって、あの人達は馬鹿なんですか？」

見た目は馬鹿みたいに悪いが、中身も相当馬鹿みたいですね…

「マスターと比べたら雲泥の差ですね。やっぱり、マスターは最高です……」

うつとりとマスターの顔を思い出し陶醉するが、今頃あの薄汚い雌狐と一緒に居ると思うと虫唾が奔る……もう、無視してマスターの所に行こうか？でも、そんなことしたらマスターはどうするでしょう？

怒るのか？呆れた様に笑みを浮かべてくれるのか？

「いずれにしても、マイナスイメージな事に変わりありませんね」

首を振って、さっきまでの考えを棄て、視線をお嬢さんに戻すと…

「…あら？」

状況は変わり始めていた。

ふがない部下に痺れを切らしたのか、敵の頭が出てきたのだ。手に持っている武器は大きな赤い戦斧……いや、違う…

「炎姉様の所の子ですね…まったく、碌なのが居ない…」

そつ、その戦斧が赤く見えたのはうつすらと炎の精霊を纏っているからだ…

「だらしねえ！！つつても、しょうがねえか。相手がアーツとはな思わなかったぜ」

5人ほど部下を倒すと、そう言いながら敵のリーダーが出てくる…

「お頭！？アーツってまさか！？」

「気がつかなかったのかよ？その姉ちゃんの持っている武器は紛れもなくエレメンツウエポンだぜ。俺の『焼失』と同じな」

アーツとはエレメンツウエポンの所持者の事だ……そういえば、悠斗には説明していなかったな……今はそんな事を考えている場合じゃない。会話から察するにあの男も私と同じアーツ。

そう考え、油断せずに相手を見据えて旋武を構える。

「今度は俺が相手だ…」

部下を下げて、一步前に出てくるリーダー

「行くぜ！おらあああ！！」

雄たけびを上げて駆けてくる。スピードは重量級の武器を持っている割には早い……だが…私には関係ない。

—ガキン！！—

振り下ろされる戦斧を受け止め、そのまま鏢迫り合いに入るが……

「ぐっ、な、なんて馬鹿力…」

徐々に私が押し始める。旋武で強化された私の力が負けるわけが無い……

相手を弾き飛ばすと、今度は私から仕掛ける。

旋武の力で身体を強化した私は、重い青龍偃月刀を羽根のように軽々と扱い、またそれによりスピードを殺すことも無い。

同じ重量級相手に白兵戦で負ける要素が無い……が、一つだけ懸念事項がある。それは……

「……!?」

再度ぶつかり合った私と敵の刃から出た火花が炎となり私を襲う……
……懸念事項とは……そう、相手の能力。

私はすぐさま距離をとり、旋武を振り回し残り火を風圧で消しつつ、相手を睨みつける。

「へへ、驚いたか。俺様の焼失に」

得意げに語るリーダー。

「まあ、もっとも使うことは無いと思ったんだがなあ……最初の鍰迫り合いで分かった。あんた……強いな。こっからは俺も全力で行くぜえ！」

言うなり駆け出す。

迫り来る戦斧を受け止める…が

「くっ!?!」

先程のように鍔迫り合いにはならない。またも火花から私を襲う炎……徐々に私は押され始めた。

「くだらない」

相手の能力を見てみれば何のことは無い、火花を派手に炎に変えているだけ。まったく持つて、くだらない。武器を使いこなせていない。第一、あのエレメンツの精霊はあの男に協力しているそぶりは無い。あの男は武器に自身のちっぽけな魔力を込めて起こる現象に喜んでいだけ……

正直、宝の持ち腐れ…

「何を苦戦しているんですか!」

イライラする。あの格下相手に何をしているのですか…。

パワー、スピード、テクニク。全てにおいて上におり、尚且つ、旋武と会話できるまでに力を使っているのに、あの小細工に気を取られて、押されている。

気がつけば……

「何をしているんですか!! そんな小手先だけの芸に騙されて! や

る気があるんですか!？」

そう叫んでいた。

「おお、ギンちゃん、ギンちゃん、見てみ、あっちゃんが熱いぞ！」

「良いものが見れたの……」

「——っ!？」

突然の声に驚く。それは私の後ろから聞こえてきた…

そう、私が最も愛する人の声と今、最も憎らしい狐の声が…。

「——っ!？」

戦っているとなんな闇姫の怒鳴り声が聞こえる。

【鈴嵐!！】

「分かっている!！」

その通りだ。私は何を怖がっている。たかがあの程度の炎に…

私は旋武を両手で構えて…

「はぁぁぁあ!！」

——奥義 大旋撃——

最も威力のある奥義、最大限に強化を施し両手で旋武を振う、薙ぎ払う一撃

「ぐっ！…ぐ…ぐ…ぐおおわぁあ！？」

その一撃を相手は戦斧によって受けるが、威力と衝撃で炎を出す余裕が無く…そのまま耐え切れず、戦斧ごと吹っ飛んだ。

「ふう〜」

深呼吸をし、相手を見る。吹っ飛んだまま頭を地面に打ったようで気絶したみたいで動かない。

そして、残った部下達に視線を移せば…

「ひっ！？」

「お、お頭がやられた！？」

「に、逃げるぞー！！」

と、逃げ始める。

「くっ、待て！」

迂闊だった。対象を筆頭に、部下も合わせて250万リーラ…逃げられるわけにはいけなかった。私一人では一人しか捕まえられず…

自分の迂闊さを恥じ入ると…

「……………詰めが甘いですよ」

闇姫から声が掛かる。その後ろを引きずられてきたのは……………自分達の影に拘束されて動けなくなっている、逃げた筈の部下達であった。

「う、動けねえ!？」

「か、影が!？どうなってるんだ!？」

困惑する盗賊たち

「これは…?」

「あっちゃんが影を使って拘束してるんだよ」

私の問いに答えたのは…

「悠斗?」

「やほ。仕事が速く片付いたんであっちゃんの気配を辿って見学に来たんだよ。しかし…鈴ちゃん、強いね」

笑みを浮かべてそう言うが…

「……………嫌味かそれは?」

悠斗に言われると嫌味にしか聞こえない。

そんな私の言葉に悠斗は苦笑いで返して…視線を闇姫に向ける

「あっちゃんもお疲れさま」

「ありがとうございます。マスターに労いの言葉をかけて貰えると疲れも吹き飛びます」

私と居る時には殆ど見せなかった笑顔を見せる闇姫。

手伝わないって言ったくせに…

「なんですか？その目は」

私の視線に気がついたのか闇姫が惘然とした声を出す。

「……なんでもない」

「なら、いいですが……」

まったく…大方、悠斗が来たからサボっているわけには行かなくなつたのだろっ……

「……………ねえ、ギンちゃん。これは仲良くなつたと見て良いのかな？」

「微妙なところじゃな…」

私たちのやり取りを見て悠斗と銀がそんな事を言っている……

ふう…何はともあれ…

これで、学費の目処はたった。

第8話：金稼ぎ（後書き）

更新完了！

では、前回に引き続いて、今回もキャラ紹介！

name 闇姫

class 闇の精霊姫

personality

マスターである宗我悠斗を慕い、崇拜しているが、基本的にはクールで毒舌。

ability

闇極

操影術

悪夢

重力形成・変化

ブラックホール形成

第9話：編入試験

— Side Yuto Souga

鈴ちゃんが倒した盗賊を魔系で縛り上げて、廃屋の片隅に転がしておく。

念のためにあっちゃんの能力の『ナイトメア悪夢』を使用。これで三日間は悪夢を見続けるので目を覚まさないはずだ……ついでに俺の影に質量を持たせて見張りをさせとく。

魔力を20%くらい影に持たせることで俺の2割程度の威力の魔法も使用可能……つと。よし、あっちゃんグッジョブ！

起きた時の精神状態を想像するとちょっと気の毒だけど……ま、いっつか。

「んじゃ、よろしく」

「了承した」

影の俺は真面目な性格のようだ。ちよつと、面白い……。

ちなみに、姿形は俺の姿で色が黒一色。濃度で差がある位の、まっくろ黒助である。

「街に着いたら転移させるから」

俺の影を戻す際に、盗賊たちも一緒になって転移させるという寸法。

こんな人数運ぶのは嫌だからの措置である。そして、いざ、帰ろうとしたところで…

【待つて】

と、小さな女の子の声。

「ん？」

視線の先には鈴ちゃんと戦っていた奴が持っていた武器が地面に転がっている。

「……焼失ですか。炎姉様の所で生まれた割には可愛い声ですね」

どうやら、敵の持っていたエレメンツウエポンが喋っているらしい。

「妙だな…私にも声が聞こえる…」

鈴ちゃんがぼやく。エレメンツウエポンは通常はそのエレメンツウエポンと使い手が同調し、ある程度力を使いこなせなければ、その声を聞くことができないという。俺と精霊姫であるあっちゃん、妖狐のギンちゃんは例外。

同じエレメンツウエポンである旋武も聞こえるらしい。

そして呼び止めた用件を聞いてみると…

【焼も行く^{うし}】

とのこと…

「何処に？」

俺の問いかけに焼失は無言。むう…ちょっと寂しい

「…ふふ、マスターを無視すなんて…消しましう！」

あつちゃんの殺気を浴びても微動だにせず。まあ、武器だかんね…

「ふむ…焼失とやら、誰に言っているのじゃ？」

ギンちゃんの問いにも無視。

怒るギンちゃんの頭を撫でつつ…残っている鈴ちゃんに視線を向ける。

「私に言っているのか？」

【…うん】

どうやら鈴ちゃんに言っていたらしい。

【焼は気がついたらあのおじちゃんのモノになったた。……あのおじちゃん好きじゃない。お姉ちゃんは好き、だから行く】

むう、補足すると……私は無理やりあの男に奪われました。逆らえなかった。でも、お姉ちゃんがあの男から助けてくれた。もうあの男は嫌だから連れてって…という所か……勝手な妄想が入っている

気がするが、気にしてはいけない。なにより……

「な、なんていう鬼畜！！一発殴つとこ！」

「お供します！」

「我也行こうぞ」

連れ立つて中に入り、リーダーの男に一発づつ攻撃を入れて戻ってくる。その間にも、話は進んでいたようで…

「いや、私には旋武が居るから……」

【連れてって】

「だから…」

平行線を行っているらしい。そこで旋武が…

【連れてってやれよ】

焼ちゃん陣営についた。

「せ、旋武？」

【今の戦い方じゃ限度があるだろ。その嬢ちゃん火を扱える。使いこなせりゃ、この間みにスライムに遅れをとりはしないだろっ…】

「だが！私には旋武がいる。その上、戦斧なんて使ったことが無い。

やっぱり無理だ」

【だったら、街に着いたら別の器を用意すりゃいいだろ？】

と、旋武。

「そんなこと出来るのか？」

俺が疑問に思ったことを聞くと…

【ああ、俺っち達は武器に魂が入ってる状態だからな。武器なんてもんは刃こぼれもするし…使っているうちに壊れてくる。だから、器は変えられんだよ】

とのこと…なるほど……

「あ、それともう一つ。契約したエレメンツウエポンのマスターをほいほいと変えちゃって良いの？」

「それに関しては問題ありません。そもそも、契約を必要とするのは精霊姫だけです。基本的にアーツとなるには条件はありません。ただ、エレメンツウエポンによっては力を与える代償を要求する者も居て、その場合には契約と言う形を取る者も居ますが」

補足として鈴ちゃんのアーツの事を説明する。なるほどねえ。焼ちやんは運悪くあの男が持ってしまったから……今まで苦労しただろうに……

「…もう一発殴ってこよ」

「お供します！」

「そうじゃの」

勇み足で再度殴りに行くこととするが…

「や、やめておけ！流石に死んでしまっ！」

鈴ちゃんに止められた…ちえ……

ギンちゃんに乗りあつという間に京に帰ってくる。うーん、ギンちゃんさままだ。よし、後で何かご褒美をあげよう。

そして、あつという間に依頼を片付けて目を丸くし驚いている酒場のマスターから報酬であるお金を貰い、茶髪君に会うために城に向かった。

「…早！？マジでもう稼いだん！？」

城には居なかったので門番に呼べと命令…（あっちゃんが）をして、やってきた茶髪君の第一声がそれだった。

「遅いですよ」

「んなこといっても。俺も学生なんだよ。これでも授業抜け出してきたんだぜ？後で弁解頼むよ？」

不機嫌なあつちゃんの毒舌に両手を合わせてそんな事を言う茶髪君。

「んじゃ、まあ行くか」

それだけ言って歩き出す茶髪の後にく俺達。

「とりあえず、金は集まったけどこれからどうするんだ?」

歩きながら質問する。

「ああ、話は通してあるから直にでも編入試験だ」

「編入試験!？」

困ったな……実技関係はなんとかなるけど、頭を使ったものはどうにもならん。

頭が悪いわけではない、ただキャストである俺はこの世界の事を知らない。そんなもん出されたらお手上げである。

「キャストは本来試験免除で入れるんだが、援助断ったから一般入学と同じ条件だぞ?」

「……参考までに聞くが…試験内容は?」

「今回は華星も居るし、キャストだって事で実技試験……戦闘演習だと思ふ。ある程度の強さはこの世界で生きていくのに必要だからな。そういうのも学べる場所だし……本来はそれと筆記試験もあるんだけどな」

た…助かった……。その言葉に心底安心していると…

「でも、覚醒してないなら悠斗は厳しいかもなあ……そこんことどうなん？」

「覚醒？」

なんじゃそりゃ？

「覚醒って言うのはキャストなら誰もがするものさ。召喚対象っていうのは別に完全にランダムなわけじゃない。何か潜在的な能力を持っている奴とか……そういった奴らが召喚対象になる。例えば、超能力者とか……霊能力者とか」

あ、アハハ……俺、見事に合致してるじゃん！

「んで、普段は眠っているんだけど召喚されたのを気に一気にその能力が開花する。それを覚醒って言ってた。んで、どうだ？不思議な力とか使えるようになってないか？」

元から使えます！！ってのは拙いよなあ……

「あ、ああ。それなら心当たりはあるな」

「そうか！じゃ、安心しな。試験はどうあれ、能力をある程度見せれば試験なんて通るからさ」

そう言っただけで笑う茶髪君。まあ、これで心配事は片付いたし、気楽に行く事にした。

「広いなあ」

学園へと続く道……その巨大な門を潜って俺の感想が漏れた。

「こんなもんじゃねえぜ。演習場もいくつかあるからな。あ、此処が正面入り口で庭みたいなものだな。綺麗なもんだろ？」

確かに、中央に噴水がありまわりにベンチ。そして花畑がある……うむ、見事なり。

「訓練場は校舎裏だ。まあ、今は授業とかしてるし、案内とかは編入してからだな。とりあえず事務室に行くぞ」

ロビーを抜けて少し行ったところに事務室があり、窓口に俺達は来ている。なんか大学みたいだ…。

「宗我悠斗さん、鈴嵐さんに杏さんですね。話は伺っております。本校に編入希望だとか……早速ですが、翌日の午後3時から試験の方がありますが、御都合はよろしいですか？合わないようでしたらまた日を改めますが……」

どうやら、茶髪とおっさんが手配してくれたらしく、いきなり編入試験の話になる。

別段、予定はないのでそれで了承した。

「んじゃ、明日またな。頑張れよ」

茶髪君とは門の入り口で別れる。別れ際に労いの言葉をかける茶髪

君……結構良い奴かもしれない。

翌日、再び事務に訪れた俺達は案内され昨日茶髪君が言っていた訓練場と思わしき場所に通された。

訓練場は一言で言えばコロシムみたいな場所だ。円状に広い武舞台となる空き地がドンとあり、その周りを壁が囲み、その上には観客席みたいに座れるように石が階段のようになっている。

そこで待っていたのは5人の男女。

「よう」

挨拶をしてきたのは、昨日あの言葉をかけながら別れた茶髪君。実は暇なんだろうか？

とりあえず手を軽く挙げて挨拶を返すと、眼鏡をかけたいかにも……教師ザマス！といった感じの女の人の前に出てくる。着ている服はスーツ……この世界で初めて見た……

「待っていました。あなた達が本日の試験を受ける方ですね？」

一人ひとり名前を確認して行き、俺が名前を名乗ったところで……

「……宗我悠斗？」

後ろに控えていた、茶髪の隣の女性が反応する。

年は俺と同じくらいに見える。髪の色は黒髪、黒い瞳に目は若干、切れ目だが、それでも美人といえる顔立ち。スタイルはスレンダー…着ているのがTシャツにハーフパンツなのだが、一層細く見える。つか、腰細え…胸は…鈴ちゃんの勝ち。よかったね！でも足綺麗だなあ…

馬鹿な事を考えていると、それがバレたのかマジマジと俺の顔を見る女性。俺も負けじと見つめ返すが…やがて頬染めて俯いてしまった。よし！勝ったぞ！

そう思ったのもつかの間、その時の女性の表情が幼く見え…誰かと重なる…誰だ？

「……………それでは試験の説明をします」

おっと、やべ。

今まで長々と校風がなんちゃらか説明していたザマス先生（以後こう呼称）が試験の内容説明に入ったところで、考えることを止めた。うん、後にしよう…

「あなた方には一人づつ、こちらに居る在校生と模擬戦闘を行ってもらいます。勝敗は合否に関係ありません。ただ、そこで自分の力を示してください。それによって私とハインツ先生が合否の判断をします。」

「ハインツです。よろしく」

キラッと齒を光らせるのは、ウザい位のロングの茶髪男……元居た

世界じゃ、ウーロン茶っていうんだっけ？ちなみに飲み物のほうの意味じゃない。

「では、あなた達と戦う在校生の説明をします。まずは……」

「おーほっほっほ！お久しぶりですわねえ！筋肉馬鹿鈴嵐！」

途端に騒ぎ出したのは金髪縦ロールの女性。睫毛が長く、また可愛い顔立ちしてる……スタイルも悪くない……ただ、可哀想に

……おつむが逝ってしまっている……

「相変わらず騒がしいなリーデル」

呆れたように言う鈴ちゃん。さっきの縦ロールの言葉と良い、知り合いのようだ。

「ムキーーーー！！その態度！！よろしいですわ！私、不肖リーデル・ロデル・グレーデルが貴方のお相手をいたしますわ！」

長い名前だなあ……とかデルが三つもついてる……。とか、突っ込むところが多いな。やべえ、頭は逝ってるけど、この娘おもしろいかも。

そして二人目は……

「めんどくさいけど俺が相手。もう、名乗ってるから自己紹介は良いよな？」

茶髪君だ……んで……

「どっちの？つっても、俺のか」

「だなあ、女の子よりは戦いやすいからな」

んで、残った一人が……

「私の名前は水無月沙那。よろしくね」

さっきの女性……へえ……沙那ちゃんねえ……って、おい！

「マジ！？沙那ちゃん！？いや、そう言われると面影があるけど……
……いやあ、ちょっと見ないうちに大きくなって……」

子供は成長するのが早いなあ。異常な気もするけど……

「……まさか……ううん。だって、姿違うし……」

俺の言葉に困惑する沙那ちゃん。あ、そっか……

「ああ、前会った時は姿違ったからねえ。言っただでしょ？俺は……」

魔法使いだって。

言葉の代わりにまた、擬態をかけた姿に戻る。

「——っ！？」

んで、感動の再開！ってなる筈なのだが……あれ？

——ギリッ

なんで、そんな恨むような目で睨むのさ？

「……誠人」

「な、なんだ？」

底冷えするような沙那ちゃんの声に茶髪君もビビる……

「この男の相手、私がするからね？」

拒否は認めないと目で脅している。

「は、はい！！」

当然、ビビった茶髪はそれを認めるのだった……

試験が始まる。訓練場の中央には鈴ちゃんと縦ロール。擬態を解いた俺はあつちゃんと懷にから顔を出したギンちゃんというメンバーで舞台を眺めている。

「して、主よ。何をしたのじゃ？」

沙那ちゃんのことだろう……

「さあ？覚えがないんだよねえ」

「そうですよね。ずっとマスターを見ていましたがあの娘とは接点はありませんでした」

「ふむ……じゃが、主よ」

「…分かつてるよ……」

わざわざ反対側に陣取っている相手メンバー側から物凄い殺氣が送られてくる。視力2・0あっても顔なんて良く見えないのに…

念のため視力を魔力で強化してみたが殺氣の元は押して知るべし……

「本人に聞くしかないなあ」

元々深く考えるという事はしない。疲れるしね。

そう考えを切り替えて、殺氣に負けじと殺氣を叩き込もうとするあつちゃんと諫めて、無視して鈴ちゃんの応援をする事にした

。

「ふふ、久しぶりですわねえ。貴方とこうして向き合うのも……」

強化した聴力で音を拾う…縦ロールは不敵な笑みで方天画戟を構えている。鈴ちゃんといい…あんたらはどっかの武将か!?

「そうだな……2年前にお前が里を出て以来だな」

「ふん!あんな古臭い里に居る限り強くなんなれませんか!私が此处で身につけた力を見せ付けて差し上げます!」

「里への侮辱は許せん!!」

おおゝなにやらライバルって感じがする。バチバチと火花が散っている…っと、忘れてた。

「よいしょっと…」

脇に置いてあつた焼ちゃんと掲げる。

「見えるー?」

【……うん】

昨日の今日では焼ちゃんを別の媒体にするのは間に合わなかった…だから、戦闘には使用せず俺に預けていたのだが、置いてある角度からは試合が見れないと思ったので手に持って見えるようにしたのだ。……前から疑問なのだが、どこが目の役割を果たしてるんだろっ?

そんな事を考えていると……

「では、試験内容を確認します。私が戦闘続行不可能と判断した場合は即座に戦闘を中止します。それと相手が棄権した場合もそれに限ります。制限時間はありません…存分に力を振るいそれを私たちに見せてください。では……始めます!!」

中央脇にウーロン茶先生が控え、ザマス先生がそう告げて試合が始まった。

「先手必勝ですわ！！烈波^{れつぱ}！！」

【御意】

烈波と呼ばれた縦ロールの戟が振られる。するとそこから猛烈な強風が発生し鈴ちゃんを襲う。

「くっ！」

鈴ちゃんは身を屈めてその風に耐えるが、丁度鈴ちゃんの真後ろに当たる俺達の場所は、先生が結界を張っているらしく影響は無い。よかった、よかった。

「あれは風姉様の所の子ですね」

「ふふ…初めてまともな精霊を見たの」

「………どういう意味ですか？まだ思考が幼い焼失や色情の旋武は分かりませんが、私のどこに不満が？まったく、目がどうにかしてるんじゃないありませんか？」

「その口の悪さじゃな」

「……ふふ、良い度胸です。もう十分生きたでしょう？剥製にして差し上げます」

「ふん！おもしろい！」

まったく、こいつらは……

殺気立つギンちゃんとあっちゃんをペシッ、ペシッと叩く。

「あう！？」

「きゃん！？」

「喧嘩しないの」

涙目で無言の抗議をする二人を叱るが……

「何も叩くこと……銀、可哀想に……痛かったでしょう？」

「なんの…それよりもお主こそ…酷いことするのお」

こゝこいつら……結託しやがった！？

「はあ……俺が悪かったよ。後でギンちゃんには毛繕いを……あっちゃんには子守唄を歌ってあげるから…それで許してくれ」

この二人に組まれた勝てない……俺の敗北宣言に二人は手を取り合
って喜んでいる……おまえら、実は仲良しだろ！？

「おーっほっほほ！！どうしたんですの！？」

甲高い縦ロールの笑い声に視線を戻すと、鈴ちゃんが防戦一方とな
っていた。

「切り裂きなさい！『烈迅』」

縦ロールが戟を振るうと、カマイタチが発生して鈴ちゃんを襲う。

鈴ちゃんは旋武でそのカマイタチを受け止めており、どうにか直撃は免れているが、攻撃のリーチが違いすぎる。反撃の手立てが無く防戦一方で、直撃はしないものの、所々に切り傷ができています。

「ほら、ほら！当たってしまえますわよ！」

悦に入った縦ロールが容赦なく攻撃を仕掛ける……そして、鈴ちゃんの取った手は……

「調子に…乗るなあああ!!」

「なっ!？」

は？

思いもよらぬ行動に誰もが驚愕する。俺も正直驚いた……対戦相手の縦ロールは俺の比じゃないだろう…

鈴ちゃんはあるう事か、旋武をぶん投げた。

しかも、相手の風の攻撃をついでに吹き飛ばすほどの勢いで……

完全に不意を付いた攻撃だったが、縦ロールもなかなかやる。

「くっ!!」

咄嗟に戦で受けようとするが、あまり接近戦は得意ではないのだろうか？もしくは、鈴ちゃんの攻撃力が桁外れだったのか？

そこら辺は分からないが、受け止めた戟は旋武の威力を殺しきれずに、旋武もろともすっ飛んだ。

自身は間一髪直撃を避けているが、冷や汗を掻いた事だろう。

「あ、相変わらず馬鹿力ですわね!!」

吼える縦ロール。その間に鈴ちゃんは距離を詰め…

「お前こそ、相変わらず非力だな!!」

縦ロールの顔を殴るつける。もちろんグーでだ。

旋武が離れた事で強化はされておらず、威力は高くは無いが、それでも殴られれば痛いだろう。しかも、顔だし……

「や、やりましたわね!!」

縦ロールの反撃。掌で鈴ちゃんのお腹を討つ。

「…ぐっ」

苦しそうな鈴ちゃん。ふむ、中国拳法の浸透系ってやつかな？内臓に直接ダメージを与えるのだろう。

「はぁぁぁ!!」

「やぁぁぁ!!」

……それから10分。今だ決着が付かず互いに顔を腫らしている…

美人が台無しだ。

最初の方は、互いに拳法。鈴ちゃんは打撃で縦ロールを殴り、縦ロールは浸透系で執拗に内臓を狙っていた。まさに剛と柔の戦いである。

だが、後半になると、拳法は影を潜め……言っちゃなんだが、喧嘩にしか見えない。

狙いも最初はボディーブローから顔へのコンビネーションとかをお互いにやっていたが……

今となっては、引つ掻いたり、抓ってみたり……あ、縦ロールが腕に噛み付いた…

服も所々が破け、血に染まっている。そんな姿を見て……

「無様ですね……」

あっちゃんが眉を潜めて侮蔑の視線を送る。それとは対照的に……

【頑張つて！】

焼ちゃんは一生懸命応援している。

俺としては忘れられているであろう旋武が不憫でならない……つか、止めてやんなよ、ザマス先生。

そして、決着は付いた。

互いに渾身の力を込めた一発が互いの顔に入る。

両方とも拳での一撃……そして、鈴ちゃんが崩れ落ちた……

「は、はあ、はあ……か、勝ちましたわ！わ、私の勝ちですわ！！」

カン、カン、カーン。試合終了！勝者、縦ロール！。

勝因は俺の見る限り前半のダメージの蓄積の差だろうと思う……いやはや、凄い戦いだった。

勝ち誇っている縦ロールだが、もはや余力は残ってないんだろう。そのまま座り込んでしまった。

その姿を横目で見ながら俺は席を立ち、鈴ちゃんの所に向かった。

「ありやりや……可愛い顔が台無しじゃない」

それに乙女の柔肌が傷だらけだ。嫁入り前にこれは拙いんじゃないかな？まあ、よくよく見れば所々に小さな傷跡があるが、これは訓練の際にできたものだろう……じゃ、問題ないのかな？

気絶している鈴ちゃんの様子を見ていると……

「医療班が待機していますので、鈴嵐さんは大丈夫ですよ。すぐに治療を行いますから」

俺と同じく、やって来ていたザマス先生がそう言った。

「あ、いえ、結構です」

折角の申し出だが断っておこう。俺が治した方が早い。本来なら力を隠しときたいのだが、沙那ちゃんには知ってるからなあ……意味が無いだろう。

そんな俺の態度を訝しげに見ていたが、突っ込まれる前に、鈴ちゃんを抱っこしてそそくさと逃げる。その際に、吹っ飛んだ旋武を回収。

「……マスター」

客席に戻つてくると、あっちゃんから物凄い迫力で睨まれる。はて？……ああ、鈴ちゃんを抱っこしてるから嫉妬してるのか……

ちなみに抱っこはお姫様抱っこである。気絶している人間を一人で運ぶには一番楽だし、何より見栄えが良い。

ぶー垂れてるあっちゃんの頭を軽く撫でて、鈴ちゃんを座らせて、その顔に手を当て、治療を開始。

「……ほう、そのようなことも出来るとは……器用なものじゃの」

俺の魔力を変質させて、鈴ちゃんに送り込み自己治癒を促進し、補助する。暫くして、あら不思議。鈴ちゃんの顔の腫れが引き、元通り。

「こっちの傷跡は消さない方が良いかな」

先程の戦闘で付いた傷は跡形も無く消したが、元々あった物は消していない。何か意味がある…大事なものかもしれない…そう思ったからだ。

「では、次は私の番ですね」

治療を終え、一息ついているとあっちゃんがそう言った。

「だね。あっちゃん、きついのは分かっているけど……」

「はい。分かっています。私が闇の能力を使えるという事は隠します」

自分でも厳しい要求だと言うのは分かるが、バレたらあっちゃんの風当たりが強くなるかもしれない。最低でも学園でこの世界の知識をある程度つけるまでは我慢してもらわないと……

まあ、それが終わったら。その必要はなくなる。居心地が良いなら学園に残るし、そうじゃなければ去る。それだけだ……

とはいえ、まずは学園に入るための試験だ。

「では、行ってきます」

「頑張つてね」

微笑を浮かべるあっちゃんに、俺はそうエールを送るのだった。

第9話：編入試験（後書き）

更新完了……。

最近スランプ気味です……なので、今年最後の更新になると思います。

ですので、来年もよろしくお願いします。

では、最後にキャラクター紹介です。

name 銀

class 七尾の銀妖狐

personality

妖の中でも最上位に位置する存在で、
その事もあってか自己中心的な考え方を
し、弱肉強食
を真理としている。

それゆえ、自分に勝った悠斗を主として
いる。

古風なしゃべり方が特徴的。

ability

獣化・人化

炎術・雷術などの妖術

銀爪

銀狐七星

第10話：重速／虹炎

——Side ANKI

「まあ、お手柔らかな」

訓練場中央で私と向かい合うのは、趣味の悪い茶髪ピアス……マスターに比べたら美の欠片もありませんね……

そんな事を思いながらも、私は策を練ります。

マスターから供給されている魔力は100パーセント……いえ……溢れんばかりで……本当にマスターの魔力の総量には驚かされます……

それに、なんと心地よい魔力でしょうか……

っと、いけません。こんな高揚した状態で戦っては間違いなく全力を出してしまいます。勝利は確実でしょうがマスターに迷惑が掛かってしまいます。

軽く深呼吸をして、気分を落ち着かせて……

要するに……バレなければ良いんです。

私は開始の合図と共に駆け出しました。

——Side Yuto Souga

あっちゃんが宿っていない、ただの器の小太刀を握って魔力を供給しながら、戦いを始めたあっちゃんを見ている。

ふむ…区別化のために小太刀にも名前をつけた方がいいかな…

と、そんな事を考えていると…

「ほう…なかなかのスピードじゃな」

頭の上で見ていた、ギンちゃんが感嘆の声を漏らす。ちなみに鈴ちゃんは今だ気絶中。

開始早々、あっちゃんは残像を残す程の速度で動き周り、茶髪君を翻弄していた。その秘密は…

「重力じゃと？」

「そう」

あっちゃんは自身に掛かっている重力の付加を減らしているのだ。例えるなら月だな。

月の重力は地球のおよそ6分の1。つまり、ジャンプ力も移動速度も単純計算で6倍。同様にあっちゃんは自分の周囲の重力を調整し、軽くしているのだ。

「じゃが、あれだけの速度で動けば体に負担が掛かるのでは無いか？」

俺の説明にギンちゃんが疑問を返す。

「確かにそうだ。速度が上がればあがるほど、空気抵抗やGが掛かる。Gの方は軽減した重力下で動いているから負担も軽減される。だけど、空気抵抗はそうは行かない。普通なら空気の壁にぶち当たって、身体がボロボロになる。でも、あっちゃんはそれを最小限にしているんだ。重力の膜でな」

抜群のコントロールである。流石、闇の姫。

あっちゃんは自分の周りの重力を調整している。イメージ的には球状のバリアが張ってありその中央にあっちゃんが居る。

内側の重力は軽減された重力。つまり、高速移動を可能としている力。

そしてその境界線となる。バリアの部分…ここに薄い膜状な物がある…これにより空気抵抗を軽減しているのだ。

服の上に、もう一枚服を着ているようなもんだ。言うなれば……

「グラビティコートってところか…」

バリアとしてもかなりの強固を誇る…重力の膜。空気抵抗を減らす程度なら訳がない…もっとも、二重に重力変化をしている事から、これ以上の強度アップは不可能みたいだけど……

説明をしながら戦いを見てみると、ギンちゃんがあることに気が付く

「…あの茶小僧……あれだけボコボコにされているのに堪えた様子

が無いの…」

「そりゃそうでしょ…むしろあっちゃんの方がダメージはでかい」
あれだけのスピードで攻撃しているのに攻撃は軽い。そりゃ、体軽くしてるからなあ。

高速で動いているからその推進力を利用した威力はあるが、重力を軽減している分威力は落ちる…大体イーブン。

さらに、元々あっちゃんは華奢…腕とか滅茶細い。人を殴るよう
にできていない…殴ればその分ダメージはあるんだろう。

「それでは、意味が無いではないか…」

「いや、あっちゃんが何処を重点的に狙っているか見てごらん」

そう、あっちゃんの狙いとは……

「……眼…か？」

「ああ、相手の視界を狭めるつもりなんだろうな」

鞭のように拳を打ち付けることで軽くても目は腫れる……

——Side Anki

そろそろですね…

これ以上はこちらの身体が持ちません。この一撃で決めないと……

私は移動するのを止め、足を止める。

「痛っ…お、お嬢ちゃん。は、速すぎ…」

腫れあがった眼でそういう茶髪ピアスに構う事無く、私はトドメの一撃を入れるために動き出す。

まず、先程と同様に高速で縦横無尽に走り回り、相手をかく乱して上に跳ぶ。

私のジャンプ力は重力の影響で通常の数倍。そして、そこから今度はバリアの重力を拳に一点集中…そして今度は重力をプラスにし、重力を利用して落下。

勢いのまま、私は拳を振ります……

——ドオオオン！

轟音と共に地面が抉れ、粉塵が舞う。……避けられたましたか……

私の姿を捉えられないように視界を奪ったのに……まだ、相手を見くびっていました。

「こ、殺す気か!？」

その証拠にそんな事を言う元気もありますようです。

「よし！今度は俺の番だ！散々やられた分…たつぷりとおしお…」
参りました」……きい！？って！なあ！？」

拳を覆った重力の膜はバリアの役割を果たし、攻撃の反動を少なくする……そのお陰で骨は折れてはいないが、拳は赤く腫れている。もともと私は殴ったり、蹴ったりなどの野蛮な行為に向いていません…なので…

「ギブアップです。私の負けです……」

「こ、これからなのに！！な、なんで！？」

ギヤーギヤー煩いピアスを無視して私は背を向けて歩き出し……あ、そうです……

「あっ
っ」

私はワザとその場にへたり込みます。そして、目でマスターに助けを訴えます。

すると、マスターは早足で着てくれました……ああ、マスター……大好きです♪

——Side Yuto Souga

へたり込んだあっちゃんの元に行ってみると……怪我らしい怪我は拳が腫れてるくらいだ。若干疲れているが、歩けないほどじゃない……

「マスターあゝ」

期待した目で俺を見つめてくる。……ピンと来た。

「良く頑張ったね。えらいよあっちゃん」

まあ、これくらいのご褒美はいいか。頑張ったし

あっちゃんの言いたいことを察し、期待通りに数度頭を撫でてあげた後、抱き上げる。

「マスター、マスター、マスターあゝ」

幸せそうに頭を胸に擦り付けてくるあっちゃん。うう……愛いやツめえ。

「杏さんがキブアップを宣言しましたので試験は終了です」

そんなやり取りを冷めた目で、ザマス先生がクールにそう告げる……そして、残った茶髪君は

「な、納得いかねー！ー！」

手に持つてる鎖が茶髪君の武器なんだろう。結局、彼は一方的にやられただけで勝利した。うむ……そりゃ、喜べないわな……

客席に戻り、あっちゃんの治療を終える。さて、次は俺の番だ。

「悠斗、大丈夫なのか？」

あっちゃんの試合中に目を覚まし、治療中に負けたことに気がついて、隅っこで落ち込んで、焼ちゃんと旋武の励ましにより復活した鈴ちゃんが、問いかけてくるが……はて？

「何が？」

「何がって……お前の相手は知り合いなんだろう？」

あーそう言うこと……

「大丈夫でしょ？ 適当にあしらって来る。行こうかギンちゃん」

それに元々そんなに深い関係でもない。考えてみれば話したのも少しだけだし……付き合いは無いといっても言いかも知れない。

鈴ちゃんにひらひら手を振り、銀狐七星となったギンちゃんを手に、俺は訓練場中央へと足を運んだ。

対峙する沙那ちゃんは物凄い目つきで俺を睨む。むう……

「あの可愛かった沙那ちゃんが、こんなにグレてしまった」

「な、何の話をしているのよ!？」

「まあ、まあ。そうツンツンしないで、まずは話し合いを……」

「あんと話すことなんて無いわ!!」

やる気満々の沙那ちゃん。やれやれ……

「では、試験を始めます!」

そんな俺達のやり取りを我関せずで試験開始を宣言するザマス先生。それと同時に距離をとる沙那ちゃん。どうやら遠距離タイプみたいだ。

「……なんで構えないの!？」

手に得物であろうボウガンを持ちながら、開始から動かず、構えも取らずに沙那ちゃんを見ている俺に怒鳴る。

「いや、構えも何も……」

もう……仕掛けてますから♪

「なっ!？」

指を軽く動かせば、5本の魔系が鈴ちゃんの動きを封じる。ボウガンも左手に持つてはいるが、肘に絡みついた糸を動かして照準を客席の茶髪君にロックオン!

その他に右腕、右脚、左脚、首店それぞれをぐるぐる巻きし、ちょっときつめに絞める。……若干、えっちな姿だが気にしてはいけな

い。

「これで、落ち着いて話が出るね」

「くっ!？」

抵抗すればするほど糸が食い込む。別にそういう仕様ではない。あくまで結果論である。

「ほら無駄な抵抗はやめなさい。お話ししよう!」

そっいいながら、拘束したままの沙那ちゃんに近づいて…

「で、なんでそんなに俺を邪険にするのさ？」

目を見てそう問いかける。

無駄だと分かったんだろう…抵抗を辞める沙那ちゃん。

そして、俺の問いかけに沙那ちゃんは顔を赤く染めて、プイッとそっぽを向いて、ポツリと……

「……………なかった…」

何かを呟いたが聞こえない……

「はい?もうちょっと大きな声で…」

「……………助けに来てくれなかった!…」

半ばやけくそ気味に沙那ちゃんはそう叫んだ。

はて？

「ごめん。話が見えない……順番にちゃんと説明してくれない？」

「——っ!？」

その言葉に、沙那ちゃんは逸らしていた視線を俺に戻し、また睨みつけてくる。むう……対応間違えたかなあ。

「……もういい！フェミィ!!」

沙那ちゃんがそう叫ぶと同時に、左手の鈴の付いた腕輪に魔力を込めていくのを感じ、バツとその場を飛びのき距離をとる。そして、沙那ちゃんを拘束していた糸が切られ、俺が居た場所の地面に鋭い爪跡が刻まれた。

現われたのは白き獣。尾は二股、猫目に猫耳、ふわふわの白い毛……大きさは猫くらい……ってか、ぶっちゃけ、猫である。

——Side Rinran

「あの女は『エスペランカ』だったのか!」

私はあの猫が女の手にあるアクセサリーから召喚されたのを見てそう言う。

エスペランカとはアーツとは異なるもう一つの戦闘形態。

エレメンツウエポンを使い、近接戦闘を好むのがアーツの基本的姿だが、もう一つ。クリアールの魔術師が編み出したのがエスペランカである。

クリアールの魔術師は己の魔力を使い、術を扱う魔術と呼ばれる力を使う。

魔術の術式を構築や、詠唱呪文を唱える際に術者は無防備となる。それを守る為の手段が必要だった。

そして、彼らは召喚の儀式を用いて使い魔を召喚することを思いついた。

ちゃんとした主従関係を築いている者もあれば、強制的に契約し主人となる者も居る。いずれにしろ、契約によって自らの守護者とする。

普段は自由に自分の住んでいる場所で使い魔は過ごすが、召喚の儀式を用意て契約した使い魔を召喚し、使役。自分の護衛の役割が済んだら送還をする。これがエスペランカの基本的姿。

彼女は自身が魔術ではなく、遠距離武器を使うことから少々特殊なエスペランカだ。だが、役割は変わらないように見える。

異世界から召喚するキャストとは違い、使い魔は同じ世界の異なる場所から召喚される。それにより、リスクも無く、大規模な術式や魔力も要らない。大抵の者がアクセサリなどにその術式を書くと

いう。あの女が持っている腕輪がそうなのだろう。

さらに、エスペランカの恐るべき力は使い魔に自身の魔力を供給し、強化するという所だ。

ある者は魔力を糧に精霊に力を借り、炎や氷を使い魔に纏らせる。

ある者はそのまま魔力を身体強化にあてる。

そして、彼女…沙那さんはその両方だ。

「なんて魔力だ…」

覚醒したキャストは大きな力を持つと聞くが…悠斗を初め、それは事実らしい。

沙那さんの使い魔である白き猫は肉体の強化と同時に、あの忌々しい女の能力と同じく……風を纏っている。

その効果だろうか？先程の闇姫までとは行かないもののかかなりのスピードで移動し、爪を振るう事で切り裂く風を発生させて攻撃している。だが……

「流石だな…」

そう、一撃も当たらない。悠斗が避けているからだ。

悠斗が避けた場所の地面には確実に風の爪跡が残っている。そのことから当たればかなり深い傷ができるはず……

「私なら…こうは行かないな」

私ならもう負けているだろう。

そっと自分の顔に手を当てる。

リーデルにやられた傷や腫れは嘘のように…先ほど怪我をした事実
さえも無くしてしまったかのような奇麗なままの顔。

悠斗が治してくれた…

あの系の能力で自分を圧倒し、閻姫や七尾の銀妖狐を従えている。

宗我悠斗…もしかしたら、彼こそが私の一生を捧げるべき主なの
かもしれない。

——Side Yuto Souga

「ほいつと」

突っ込んでくる白い獣の爪をひょいと横に移動して避ける。何回か
こんなやり取りが続いていたのだが……

——ヒュン

今回はちょっと違った。

「おっと…」

避けたところに、沙那ちゃんが手にボウガンを持ち援護射撃をしてきたのだ。

飛んできた矢を手で掴んで地面に棄てながらそう文句を言っても、沙那ちゃんは再度トリガーに指をかけ、白い猫は突貫。

「あらよつと」

——ヒュッ

——パシッ！

ポイツとな

「よいしょつと」

——ヒュッ

——パシッ！

ポッイ

突貫され、避ける。射られ、矢を取る……この繰り返し……ちょっと飽きてきた。やれやれ……動物虐待は趣味じゃないんだが。

「な、なんで当たらないの！！フェミイ！！」

当たらないことに焦りだす沙那ちゃんがそう怒鳴る。

その言葉に触発され、一層速度を上げて駆ける猫。

だが、所詮は虚実もない直線の動きだ……

真正面から突っ込んできて、振われる爪を最小限で避けると同時に……

抜刀した銀狐七星を振るう。

「ふみゃ!？」

「フェミィ!？」

白ネコはそのまま沙那ちゃんのとこまで吹っ飛んだ……ああ、カウ
ンターで入ったからな相当なダメージだろ。とはいえ……

「峰打ちだし、死にはしないだろ」

基本的に動物は好きだし、殺す気はない……ちなみに、一番嫌いな
動物は人間だ。二番目は蛇。

ある程度、強化されていただろう。綺麗に入ったのにまだ起き上が
る猫。さらには戦闘態勢に入る。

「まだ、やれるわね？」

沙那ちゃんの問いかけを肯定するかのように、身をかがませる猫。

やれやれ……でも、こっちも少し試したいことがあるし、もう少し付
き合っかな

『んじゃ、ギンちゃん。デビュー戦だしド派手にやってみようか』

『そうじゃの……では、行くぞ主よ!』

試したい事…それは銀狐七星の力だ。

掛け声と共に、ギンちゃんの刀に意識を集中させる。

柄についた七本の帯が炎と変わり、それぞれ七色の炎の色をなす。
とってもビューティホー!

『流石じゃの。こうもやすやすと同調するとは…』

あつちゃんとギンちゃんの場合、力の発言の仕方が異なる。

あつちゃんの場合は、俺が魔力を注ぎ込みあつちゃんがそれを変質
させて力が発動し、それを俺がコントロールする。

それに対し、ギンちゃんはギンちゃん自身の妖力で能力を発動させ、
それを俺がコントロールするのだ。

そして、どちらにもメリット、デメリットがある。

前者の場合は自身の魔力が力の元なのでコントロールがしやすいが、
自分の魔力を消費するので燃費が悪い。

それに対し、後者は自分の魔力を使うわけではないので、ガス欠の
心配はないが、その分コントロールが難しい。

最も、俺の場合は保有するエーテル量も多く、またマナを扱えるの

でガス欠の心配はないし、元々の能力が魔力の変質なので他人の魔力を扱うのは苦でもない。

まさに、俺に合わせたかのような愛刀…もとい、相棒達に笑みが浮かぶ。

『いいね、いいね。すっごく綺麗だ』

炎に見とれていたのか、攻撃が中断していたのだが、暫くして、我に返ったのか再び飛んでくる矢をたたき落とし、ついでに燃やしていく。

振るう度に七本の炎が軌跡を残し、その七色の軌跡が凄く綺麗で嬉々としていると。

『……むっ。マスター！私も抜いてください。今、おそばに行きますから！！』

対抗心を燃やしたあっちゃんがそう言ってくる。

『っと、ごめんね。ちょっと舞い上がってた。今回はギンちゃんの感触に慣れたいからこのままで行くよ。あっちゃんは今度ね』

けして蔑にしている訳ではないと伝え、気を静める。

『……主よ。そろそろあちらに気を向けてやらんと少々哀れじゃぞ』意識の七割を念話に向けながら、矢を落としているとギンちゃんが声をかけてきた。

『だね、でもなあ。流石に試験で大けがさせたらまずいよねえ……』
色々思案した結果、もういいかなと判断して…当初の予定通りにすることにした。

炎を消して、……銀狐七星を納刀し…

「ザマ……っと、せ、先生。俺、棄権します」

ザマス先生にそう告げた。

「なっ!?!」

絶句する沙那ちゃんと未だ戦闘態勢を崩さずに成り行きを見守っている猫……

そんな一人と一匹をとりあえず無視して、ザマス先生の言葉を待つ。

「……よろしいのですか?」

「ええ。目的は力を見せることですよね?もう十分頑張ったんじゃないかと……だからもういいです。これ以上やって怪我するのも嫌だし」

「……分かりました」

ザマス先生に告げてその場を立ち去る。待ちなさい!とか、逃げるな!とか、何か叫んでいるが無視…正直、付き合ってられん。

にしても……はあ、心配して損した。子供だから助けてあげよる。

それが大人の対応だ！とか思ってたから、気にしてたのに……

そんな事を考えているとギンちゃんが念話で先程のやりとりについて、話かけてきた。

【主……最初からそのつもりじゃったな？】

【まあな。正直此处で俺が勝ったら、沙那ちゃん立場ないだろ】

【……主は優しいのお。じゃが……】

【分かってるさ。殺し合いとかなら俺は躊躇も油断もしない。喚いているうちに、とつとと斬っちまうさ】

あくまでこれは試験での試合。まあ、お遊びみたいなもんだ。もし、沙那ちゃんの復讐心から、俺の命を危険に晒すなら

情け容赦なく。後顧の憂いを無くすためにも……殺す。

【ふふ……流石は我の主じゃ！】

【あはは、もっと褒めて、褒めて】

ギンちゃんに褒められつつ、観客席に戻る。その途中、みんなの死角に入った所でギンちゃんが子狐に戻り、定位置となった俺の頭によじよじと登る。

そんな愛らしい姿に笑みを零しつつ、俺はあっちゃんの所へ戻るのだった。

先生二人が合否の判断をするための相談をするらしく、暫く休憩という事になった。

「……………」

「まだ膨れてるの？」

不機嫌そうなあっちゃんの頬をぷにぷにと押す。俺があそこで棄権したのが納得いかないらしい。

鈴ちゃんは…

「おーっほっほっほ！！無様に負けましたわね！」

「…いい訳はしない」

高笑いをしながらやって来た縦ロールの対応をしていた。悔しげに俯く鈴ちゃんと、勝ち誇る縦ロール。しかし、縦ロールの顔には、治療のための魔力が込められた絆創膏やガーゼなどがある。対して鈴ちゃんは俺が治したのでいつも通りの綺麗な顔をしている。

【どっちが勝者かわからねーな…】

【……………次は…私もやる】

そんな姿に旋武が突っ込み、焼ちゃんは闘志を燃やしている。

それが聞こえたのだろう。鈴ちゃんが勝ち誇る縦ロールに反撃に出た。

「それで、その勝った筈のお前の方が怪我が多いようだが？」

「そ、そういえば……あ、あなた！　どういう妖術を使いましたの！
？あの、見るも無残な顔が……」

「単に私の方がダメージが少なかったただけだろう？」

「キーーーーー！！！！これでは私が負けたみたいではないですか！
！」

どうやら勝った事を自慢するのに一生懸命で気が付いていなかったらしい。憤慨する縦ロールを嘲笑する鈴ちゃん……攻守逆転である。つか、治したのは俺なんだがね……

あっちゃんの機嫌を取るために頭を撫でながら、横目に見ていると

……

「——っ！？」

「……どつたの？……つて、あー」

あっちゃんから殺気を感じる。向かった先には俺を睨みに睨んでいる沙那ちゃんの姿が……わざわざこっちに来なくても。

「……マスターに何か御用ですか？」

「別に、なんでもないわよ」

あっちゃんは沙那ちゃんへと歩み寄り、その声をかける。声色は物凄く冷たい…対して沙那ちゃんは一瞥しただけで視線を戻し、そう答えた。

「そうですか…用がないなら消えてください。その視線は物凄く不快です」

「あなたには関係ないでしょ？」

「関係はあります。マスターは私のマスターですから」

「…さつきから、なんなのよ……ん？マスター？…」

視線をあっちゃんに戻して、そう呟きながら何かを思案する沙那ちゃん。

ああ、嫌な予感がするなあ…

そして、答えに到達したのか…

「へ、変態！！鬼畜！！ロリコン！！」

真っ赤な顔でそんな事を叫ぶ沙那ちゃん。何を想像したんだかなあ…

はあ……。あの、お兄ちゃん…と呼んでくれた沙那ちゃんは何処に行ったんだろう……嘆かわしい…

「マスターへの侮辱は許せません！死「はい、ストップ！」…マスター…」

闇を纏い始めたあっちゃんを止める。それで言いたいことが分かったんだろっ、悔しげに俯いて沙那ちゃんから離れる。その際に……

「…月夜の晩ばかりだと思わないで下さい」

暗殺宣言。まあ、そうなたらあっちゃんのテリトリーだしねえ。

そんな感じで時間がたち、俺達はザマス先生の前に立っている。可否を聞くためだ。

「では、結果を発表します。まず、リーデルさんと互角に渡り合った鈴嵐さん…後半の試合はともかくとして、前半の攻撃を凌いだ点と相手の武器を弾き飛ばした技は見事でした。続いて杏さんですが、棄権したものの、あの高速移動と最後の攻撃は素晴らしいの一言に尽きます。そして最後に宗我さんも、棄権したとはいえ、前半の水無月さんを拘束した技と攻撃を捌く力量、さらにあの炎術…総合的に能力の高さが伺えます。以上の点から三人とも、学園でやっていくには十分の力を持っていると判断します。よって、合格とします！」

教師の職業病なのか？分からないが、長い話をした後、ザマス先生は合格を宣言した。

ふう〜、良かった……まあ、落ちるとは思ってたけど内心どうしよう？くらいは思ってた。思い返せば、俺がやったのは二人に比べて地味な攻撃…さらには相手の攻撃を避けて、使い魔らしき、猫に一撃くらわせただけだったし。炎は出ただけで攻撃とかはし

なかったからな…

「では、後の事は任せますよ。私たちは手続きをしにいかねければ行けないので…」

ザマス先生とウーロン茶先生は、茶髪君達にそう言うのと去っていく。

まあ、何はともあれ。

無事に学園に通えることになったわけだ。

— Side A t h e r

「以上が編入する三人のプロフィールと試験記録です」

試験が終わり、試験官をしていたレイチエルは学園長室にいた。

そこにはもう一人、紫のローブを纏った老人が椅子に座っていた。その眼光は鋭く、長い白髪と髭が威圧感を引き立てる。

その老人、学園長のザラクは映像を記録する水晶で、試験の模様を見終えると、プロフィールが書かれた資料を見ながら、口を開く。

「…華星にキャストか……この杏とかいう娘は？」

「旅の途中で出会った娘とか…」

その言葉をどう取ったのか、ザラクはしばし無言のまま資料を見つ

めて、ゆつくりと机の上に置いた。

「なににせよ……監視は必要か……」

「はい。キャスト一人で国家間のパワーバランスが変わりますからね」

キャストの恐ろしいところはその魔力の高さなどもあるが、最も怖いのは知識だ。

例えば、核兵器。当然この世界にはそんなものはない。

だが、その詳細な知識を持っている科学者が一人召喚されれば、いずれ核を生み出し、兵器転用を図るだろう。

「国主に、燕璃えんりと鷺扇しゅうせんの姉妹に監視を願いたいと伝えてくれ」

「！？上忍の……しかも最も隠密に長けているあの姉妹にですか！？」

「念のためじゃ……。頼むぞ」

「はっ、了解いたしました」

一礼し、レイチエルは部屋を出ていく。ザラクはその後ろ姿を見送ると、物思いに耽るのだった。

第11話：学園寮／酒盛り／チョコビーヌ

— Side Yuto Souga

試験に合格した俺達は、学園寮へと向かっていた。

不機嫌そうにそっぱを向きつつ、歩いている沙那ちゃん。

鈴ちゃんに突っかかつては、言い返されてムキーっと叫んでいる縦ロール。

俺の頭の上で丸まっている銀ちゃんに、付き従うように横に並んで歩いている、あっちゃん。

そんな超個性的なメンバーで道を闊歩している。そんな訳で、俺は同じく暇そうな茶髪君と会話をしていた。

「んで、寮ってどういう所なんだ？」

「ああ、大概の学生はここで生活してるな、沙那とかメルティアの貴族なんかは高級住宅地にある自宅やら別荘やらから通ってる。」

「ふーん、おまえは？」

「俺も…まあ、自宅からだな」

何故か苦笑いを浮かべながら言う茶髪。聞いちゃいけないことだったか……

「なのに態々着いてくるとは律儀な奴等だな」

「はは、先生に頼まれたしな」

話題を変えることに成功して、そのまま何気ない雑談をしながら歩いていると、交差路に行き着いた。

「此处を真つすぐ行けば、町に出られる。んで、左の道が女子寮。右が男子寮へと続いている」

茶髪が説明をする。なるほど、風紀上の関係だな。まあ、あんまり意味はないと思うがねえ。夜這いなんて言葉があるくらいだし。

「そんな訳で、俺らはこつちだ」

「ああ。んじゃ、またね」

俺と茶髪君は男子寮へと続く右の道へと歩いて行くが……

当然のようにあっちゃんが着いてきた。

「あんたはこつちよ!!」

それを見て、沙那ちゃんが咎めるが…

「お断りします。私とマスターを引き離すなどという愚行を働くとは……万死に値しますよ」

意に介せず、逆に殺気混じりで答えるあっちゃん。

「いいから着なさいよ！あんたは女の子なんだから女子寮よ！」

「……あなたに私を縛る権利はありません。黙りなさい！」

二人の殺気が膨れ上がる。言わずもがな、沙那ちゃんとあっちゃんだ。

やれやれ…

「あっちゃん、我儘言っちゃダメじゃないか」

メツて感じて叱る。その途端に、あっちゃんは俯き…

「マスターは…私と一緒になのが嫌なのですか？」

悲しげにそう漏らした。

うつ！？

「いや、そうじゃないけど…決まりだし……」

って言うても、無駄だろうな……そう思ったので、念話で説得することにした。

『あっちゃん、大人しく従つといて、後で合流しようよ。迎えに行くからさ』

「……そうですね。分かりました」

早っ！？まあ、聞き分けがよくていいけどね。まあ、論点は俺と一

緒の部屋が良いって事だから、目的は達してるしな。

俺の言葉であっさり意見を変えたあっちゃんを腹立たしげに見る沙那ちゃんと、苦笑いを浮かべている鈴ちゃん。

そして、あっちゃんは踵を返そうとして、ふと何かに気が付き。

「マスター、申し訳ありませんが屈んで貰えませんか？」

「ん？こっ？」

言われたとおりに屈むと、あっちゃんは頭の上の銀ちゃんの首根っこを掴んで、頭の上から下ろす。

『どういつつもりじゃ？』

物凄い不機嫌そうにギンちゃんが念話で文句を言ってきた。

『ふん、雌狐だけ残していけるわけがないでしょう。あなたも女子寮です』

『ほほう…乳臭い小娘が、我と主のらぶらぶな逢瀬の時を邪魔するといつか？』

『ええ……万年発情期の駄狐の毒牙にかけるわけには行きませんか
らね』

『『ふふふ……』』

まったく…ほら、黙り込んだじゃった俺らが不審そうに見られている

じゃないか

『ギンちゃんもあっちゃんと一緒に女子寮に居なさい。後で迎えに行くから、反論したり、喧嘩したら……お仕置きだからね?』

『お、お仕置きですか!?!』

『ぐ、具体的に何をするつもりじゃ?』

そっだなあ…

『徹底的に無視する。んで、あんまり度が過ぎたら……捨てちゃうかもなあ』

『なっ!?!あんまりです!』

『そうじゃ、主よ!お主は鬼か悪魔の血でも引いているのではないのか!』

ふふ、効いてるな……、実際そんなことするわけないけど…脅しだ。

『仲良くすればいいんだよ。問題ないでしょ?それとも、もう手遅れだとか?』

『そ、そんな事はありません!ねえ、銀!』

『そうじゃ、我らは仲良しじゃぞ!』

『うん、それじゃ後で迎えに行くから』

手を振ってあっちゃん達と別れて、俺は茶髪君とともに寮へと向か

う道を歩き出した。

「んで、学園てのはどういうシステムなんだ？」

歩きながら、俺は学園のことについて茶髪君に問いかける。

「クラスごとに教室が分かれててな。クラスっていうのは戦闘能力で決まり、星の数で表わされる。悠斗達はシングル…一番低いクラスだな」

これだと茶髪君が服の裾を捲る。ベルトには星のバッチのような物が三つ並んでいる。

「俺はトリプルクラスだ」

「へえ、俺としては学問方面だけ学べばそれでいいんだが…」

「とは言っても、戦闘能力は何するにしても必須だしな。自分自身を守る事が出来るようにって事だ。だから、講義も戦闘能力関連は必須だ」

むう……めんどいなあ。

そんな俺の不満げな態度を見て、茶髪は苦笑いを浮かべつつ、説明を続ける。

「んで、講義だけとレベルに応じた講義を各自受講して、試験などの結果から単位を貰うんだ。そうそう、戦闘訓練は必須授業だからな」

ふむふむ…システムのには大学に近い感じだな。

「一日の流れとしてはまず業務連絡があるからクラス毎の教室に集まって、それから各講義を受けに行くんだ」

「なるほど…んで、クラスってのは上がればなんかいい事があるのか？」

「より高度な講義を受けられるのと、職に就く際の能力評価の基準になるからな、高い給料が貰える職業に就けるって訳だ。それに卒業してからそのクラスは付きまという。高ければ高いほど、羨望と尊敬の眼差しを受ける。んで、学園の編入試験に合格できるだけの戦闘能力が最低ランクのシングル。それに満たないのは商人とか農民とかになつたりするな」

愚かだな…。

それを聞いて思ったのは侮蔑の感情。人の価値を人が決める……笑わせる。

いくら高い評価を得ようと所詮人は人。いや、それどころか人間だけの世界という狭い空間で優劣を極めることでより、より高い位へと昇華する可能性を摘み取ってしまっている。

ゆえに世の中の広さを知らず、あたかも自分たちが最上位に居ると錯覚し他の生物を蔑む。無論、すべての人間がそうでないことは知っている。

だが、結局、人はどの世界においても愚かな者が多いな……とそう

思った。

「どうした？」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

黙り込んだ俺に声をかけてくる茶髪に気にするなと手を振り、説明の続きを絆す」

「分かった。んで、学園の卒業条件は星四つ以上…クアドラプルのクラスになり、さらに128単位取得することで卒業資格を得られる」

「星つてのはどうすれば貰えるんだ？」

「一般では月に一度、クラス昇格の試験があつて、それに合格すれば貰える。大体がこれで星を獲得するな。ただし、三回までしか同じクラスの試験は受けられない」

「何？それじゃ卒業規定に満たずに三回落ちてしまった人はどうなるんだ？」

俺の問いに、茶髪君は自分の首の前で右手をツイッと横に引く。

「強制退学だな。規定を満たしている奴…例えば星5つの試験を三回落ちた奴は強制卒業だ」

ううむ。結構ハードだなあ

「逆を言えば、受ければその分だけ学園に残って星を上げること

集中できる。星5つ以上からは学費も無料の特待生扱いになるし、月に幾ばくか金も貰えるようになる」

「って、それじゃ5つ以上になったら試験を受けなければ、ずっとその生活だぞ」

「いや、半年に一回は絶対に試験に受けなければいけないんだ。だからそれは無理だ」

そんなに甘くはないってことか……

茶髪君にあれこれ説明を聞きながら、学生寮へと着いた。

学生寮は京の町並みでは人際浮いた木造の西洋風の三階建ての建物である。

「京の町並みに比べると大分印象が異なるな……」

「ん？ああ、エレンツァ学園はメルティアと大和が共同で作った学園でな、大和が土地と武器や道具とかを、メルティアは学園や寮の建設を担当したらしい。だから、建物なんかの作りがメルティアよりなんだよ」

「ふうん。まあ、どうでもいいけどな」

「聞いたってそりやないだろ……」

俺の言葉にゲンナリとした表情を見せつつ、寮の中に入って行き俺

もそのあとに続く。

案内されたのは三階の一番奥の部屋だ。室内は6畳半で板張りの床の中央に質素な絨毯が敷かれており、奥の扉を開けるとトイレとバスルームに洗濯機のようなものが置いてある。家具は机が二つと二段ベット。左に視線を向ければ、ちんまりとしたキッチン。

「普通は二人で相部屋なんだけどな。編入生だし、一人で独占だ。どうだ？ いいだろ？」

「ああ」

相部屋というのは予想していなかったが、一人でよかった。あつちやんやギンちゃんなどを招き、今後についての会議とか色々親睦を兼ねた語り合いをしたいと考えていたからだ。

俺の武器となり、俺と共に居ると言うことを二人が示し、俺達はいわば共に生きるパートナーとなった。しかし、まだお互いのことを詳しく知らない。必要最低限の出来事は知っているがまだまだ知らない事が多い。

そもそも魔女の子、精霊姫、妖狐と言ったようにそれぞれ種族も違う……相手のことを詳しく知る必要があるのだ。

例えば寿命だ。魔女の血の影響で俺は不老であり肉体は老いない。

だが、不死と言う訳ではない。致命傷を受ければ老いなど関係ないので当然死ぬ。

しかも、俺には治療関連の魔法は一切効果がない。これは自身が持

つ抗魔力の高さゆえの結果だ。

外面に作用する抗魔力は自分で制御できるために外傷に関しては問題ないのだが、内面に関しては常時強力な抗魔力を発揮しているため、内臓なんかがやられると自然治癒に頼るよる他ない。

その反面、幻術やマインドコントロールなどの精神汚染系統の魔術はキャンセルされ効果がないというメリットもあるので善し悪しだ。話は逸れたが、そう言ったこともパートナーとなる二人には話しておいた方がいいだろうと思っている。だが、相部屋となった場合にルームメイトが邪魔になるのだ。

まあ、適当に眠らせたりしてから話せば問題ないのだが手間が省けるなら、それに越したことはない。

「まあ、とりあえずはあっちゃん達を迎えに行こうかな」

小太刀と繋がっているあっちゃんの気配を探って居場所を調べて、念話で状況を確認した後、俺はずぶずぶと自分の影に埋まって行くのだった。

あっちゃん達を迎えに行った後、鈴ちゃん達を誘って町を散策し必需品を購入してついでに夕食を食べることになった。

場所はこの間の酒場。幹旋所だけかと思いきや、マスターの腕がいいのか料理がかなり美味しかったのである。行きつけ決定だな。

そして、何より驚いたのが、料理の名称や食材が元の世界と殆ど変わらないという事だ。ふむ、ひよっとするとこの世界……

いや、考えるのは後だ。今は食事を楽しもう。

「んぐ…んぐ…ぷはー！美味しい！」

考えるのは後にして、俺はジョッキを片手にビールを一気飲み…美味えええ。

「おい！学生の飲酒は校則違反だぞ！」

パンフとかに書いてあった校則を覚えたのだろう。向かいに座っている鈴ちゃんが目くじらを立てる。

「固いこと言わない！ほら、鈴ちゃんも飲んで飲んで」

「ばつ！わ、私は…ん！？んぐ！？」

無理やり鈴ちゃんに酒を飲ませながらも、ほかの面々の様子を見る。

ギンちゃんは俺の左隣で、ちょこんとテーブルに乗りつつ、おちょこでチロチロと酒を嘗めている。ちなみに飲んでいるのは日本酒。

あっちゃんは右隣で、俺に寄り添いつつワインをグラスで優雅に飲んでいる。

『なあ、あんちゃん。前から思ってたんだが…酒ってのはそんなに美味しいのか？』

「酒の味を知らんとは…いささか不憫だな。ふむ…試してみるか…
…マスター！ビールを樽でくれ」

俺のオーダーに一瞬ギョツとするもすぐさま注文道理の品が出て来た。

なみなみと樽に注がれているビール。そこに旋武を突っ込んだ。

『おお！なんか、ふわふわした…いい気分だぜ！！』

見る見るうちにテンションが上がっていく旋武。酔っているらしいな…理屈はよく分からんが、まあ、これで酒の味が分かるなら良しとしよう。

『…私も』

焼ちゃんも興味があるらしいので、旋武と共に樽に突っ込んでやった。

そして三十分後…俺はつくづく後悔した。

「グス…聞いているのか！」

「はいはい聞いてますよ…」

赤い顔をしながら対面に座っている鈴ちゃんがずっと顔を近づきながらメンチを切ってくる。

「リーダー如きに負けるなんて…うつ…わ、私は…」

わああと泣き始める鈴ちゃん。ちなみにこのやり取りは三回目。

まっさか、絡み酒&泣き上戸だとは…

『ひゃっほお!!』

旋武も妙なくらいのハイテンションで騒いでるし…

『あっはっはっは!!』

そして焼ちゃんは普段の物静かな態度とは一転してケラケラ笑っているし…

あっちゃんはあっちゃんて…

「マスタあー。今夜あたりどうですかあ？気持ち良くしてあげますから…」

ふふふと怪しげな笑みを浮かべ、体を摺り寄せてくる…

「あー、あっちゃんや…冷静になりなさい。酒の勢いでそういったことすると、後でもろもろ問題が出るだろうから」

「ふふ…マスタあー…今夜…」

駄目だ、聞いちゃいねえ。

『主よ、酔っぱらいに何を言っても徒労に終わるだけじゃ』

「みたいだなあ。つか、酒癖悪いなあ…」

まともなのはギンちゃん位だ。小さい体であれだけ飲んだくせに全然酔っていない。

『そのうち静かになるだろうて…むっ？主よ、すまんが酌を…』

「あ、はいはい」

狐状態のギンちゃんが自分で注げる訳もなく、俺が酌をしているんだがペースが尋常じゃない。つか、俺の片手は酌をしっぱなしである。

もう片方の手で酒を飲んだり、つまみを食べていたのだが、あっちゃんがしがみ付いているのでそれも出来なくなってしまった。

「はあ〜」

溜息を吐き、今度飲むときは一人で来ようと心に誓ったのだった。

酒乱共が揃って寝息を立て始め、起きている俺とギンちゃんはほろ酔い気分ながらも酒を楽しんでいた。

ちなみに、ギンちゃんは先ほど隠れて人間verになり、着物の肌蹴た部分から豊満な肢体が見えるのが、とてつもなく目に毒だ。

耳と尻尾はギンちゃんが隠蔽の妖術を使っているみたいだが、念のために俺もその上から認識遮断の魔術を使っておいた。なので、バレル事はないだろう。

「ほれ、主よ。一献」

俺にしな垂れかかりながらも、お酌をしてくれるギンちゃん。色気抜群だな……是非とも自覚してほしい。いや、自覚しながらもやっているのか？

するとギンちゃんが唐突に切り出した。

「主は強い……」

「ん？」

「いや…今更ながら知りたくなったのじゃよ。我を圧倒した主の力を思い出しての、如何にしてその力を身につけたかを…」

「ガキの頃から剣は父さんに、魔法は母さんに仕込まれてたんだよ」

「にしても、あの力量は相当の年月による修練の果てに修得した物であろう？ いかにかがあつても、10、20年ではあの階位に到達できるはずがない……」

「まあね、いくら才能があつてもそれを磨く時間と言うのは必ず存在する。でも、俺は実際には17年しか生きてない。これは事実だ。さて、どんな裏技を使ったでしょうか？」

意地悪な返答を返してやる。いや、別に教えてもいいんだけど…

「主よ、意地が悪いぞ」

そう、そのギンちゃんの拗ねた顔が見たかったのだ。うん、やっぱり可愛いね

「あはは、ごめん、ごめん。ちゃんと教えるから……簡単に言つと母さんの力なんだよ」

〳〵回想〳〵

それはまだ幼い頃、正義の味方という子供ながらの幻想を抱いていた時の事だった。

「やっぱり、攻撃にはバリエーションが必要よねえ。あ、次はこれ试试看よう！」

白き広大な空間。見渡す限り果てもなくどこまでも続く白。地面も空もない。そんな無空間。

そこに場違いな程でかいTVと最新のゲーム機に、ゲームソフトやDVDが散乱していた。

ここは我が家のリビング。しかし、魔法の修行用に母さんが手を加えに加えた特殊空間となっている。

そして、母さんはゲームのコントローラを握っており、TVの中では魔法使いがド派手なエフェクトと共に魔法をぶっ放していた。

「もう一回…」

「おっけー。チョコビーン！エクスプロードよ！！」

母さんが叫びながら、ボタンを押す。それと同時にTVの中の魔法使い（母さん命名チョコビーン氏）が先ほど同様ド派手なエフェクトの魔法を放ち、敵を屠っていく。

どうでもいいが、名前にセンスがなさすぎる。

「あ、もうチョコビーンのMPが無い。んで、どう？いけそう？」

「やってみる」

チョコビーンに気を取られている場合じゃない、俺は先ほどの魔法を頭の中でイメージし、自身のエーテルをそのイメージに沿って変化させていく。

「んじゃ、的はペソーネ7体よ。こいつ嫌いなよねえ。屠っちゃって」

母さんの言葉と共に、先ほどのTVでチョコビーンの仲間の筈のペソーネ氏が七対現れる。ジョブは戦士。

そのペソーネ七体に向かって、俺は構成した魔法を放つ。

TV画面でチョコビーンが放ったエクスプロード同様に眩い輝きとともに、大爆発が巻き起こる。

「よっし、エクスプロード習得♪いい調子よ」

嬉々として母さんが喜ぶが、俺は目の前で無残にも爆散したペソーネ氏に黙禱を捧げていた。

それを終えて、戻ってくると母さんがシミジミしたように言う。

「しかし、アニメーションとかゲームとか。すごいわよねえ。私にも考え付かないような魔法を考え付くんですもの。もしこれが空想じゃなかったらと思うと、ゾツとするわね」

そう、これは魔法の修行の一環で、母さんがやっているゲームのキアラの魔法を実際に再現しているのだ。

「でも、そのおかげでずいぶん魔法が使えるようになった」

「そうよねえ。私たちの魔法で一番大事なイメージの部分をこれで大きく補えるんですもの。大したものだわ……それにゲームも面白いな」

「……あ、チヨビー又が死んでる」

「へ？ああ！！気を取られて操作忘れてたー！！ペソーネは……ちつ、使えないわね。それじゃポンタの回復……ってポンタまで！！いいえ、まだよ！この戦闘を乗り切れば蘇生も可能よ！」

「……あつ」

「き、キヤー！ここで毒！？トンデンあんた主人公でしょ！勇者でしょ！根性を……って、このへっばこ——！！」

母さんが叫ぶ。TV画面には敵だと思われる、緑色の気色悪い二足歩行の豚が、ゲヒゲヒ笑っている…

所謂全滅をしたのだ。

「あ、ああ……はあゝま、いいわ。今日も結構魔法習得できたし、続きは今度ね」

「それで母さん。いい加減、この部屋から出して…」んじゃ、またねー！」「…おい！！」

くそ、また置いていかれた。

母さんが出ていくと同時に、わらわらと異形のモンスターが現れる。

この空間は母さんが管理している一種の異空間らしく、一定の間隔でモンスターが現れるのだ。

さらに、この空間の時間軸は狂っており、向こうでの一日がこっちでは……何日になるんだ？ああ、いい加減日数数えるのめんどくさくなっただけだなあ。

ま、とにかく俺はもうカーなり前からこの空間にいる。

しかも食欲、睡眠欲などの生理的欲求もない。一定の間隔でモンスターが現れ、そいつらと闘ったり、母さんが居なくなった途端にTVが本棚に変化し、そこにある本で知識を学んだりの生活をしている。もう精神年齢は結構なお歳ではなからうか？

でも、俺は努力する。だって、正義の味方になりたいから。

とりあえず…

「エキスプロード!!」

チヨビーヌの死と共に会得したエキスプロードでこいつらを焼き払う事にしよう。

俺の話にギンちゃんは絶句する。

「主の母君は一体何者なのじゃ？」

「魔女だよ！魔女！つか悪魔だ！いや、たぶん悪魔の方が慈悲の心あるな」

「辛かったじやろうに…」

慈愛の籠った声でそう言ってくれるギンちゃん。だがしかし！だがしかし！

「ふっ……ギンちゃん。それがね…それはまだ第一段階だったのさ…」

どこか遠い目でそう語る俺にギンちゃんは絶句する。

「ある程度の戦闘技術が身についた後は実戦形式でね、空間もジャングルに変わり、敵も数万とかになって…普通に腹が減るようにも眠くなるようにもなった。そのおかげで、アウトドアの知識と、気

配を読む術を身につけたんだけどね。その他にも人間を指揮できるようにって、軍の将校としての多対多の訓練もしたし、暗殺とか護衛ってシチュエーションもあったかなあ」

あの世界は一種の精神世界だ。ゆえに肉体は成長しない。なので実質17年しか生きてなくても精神年齢は………幾つだ？

正直、あの世界での年数なんぞはいちいち数えちゃいけないので分かん。

「我が勝てないはずじゃ………」

その結果で俺は確かに力を経た。人を護る筈だった力を……そして裏切られた。

「……主？」

「あ、なんでもない。ちょっと酔ったかも」

俺の異変に気がついたのかギンちゃんが声を掛けてくるが、適にごまかす。

「ねえ、ギンちゃん。ギンちゃんは確かに強いよ。でもね、もしかしたらそれ以上の相手がいるかもしれない。戦うことになるかもしれない。その時は、俺が必ずギンちゃんを護るから」

「あ、主！？」

「あはは、照れてるギンちゃんも可愛いね」

ぽんぽんと頭を軽く叩いて席を立つ、ギンちゃんが小声で子供扱いするでない…と愚痴を漏らしているが、聞こえないふりをして、寝ているあっちゃんを背負う。

「んじゃ、帰ろうか」

「そうじゃの…むっ？主よ。小娘はどうするのじゃ？」

「放置する。酒は呑んでも吞まれるなってね。いい教訓になるですよ。それに、女子寮まで送るわけには行かんでしょうよ」

基本的に男子禁制だしな。

「それともギンちゃんを送ってく？」

「そんな義理はないの。では、帰るか主よ」

こうして、三人で帰路に着いたのだが、翌日、顔を合わせた鈴ちゃんがご立腹だったのは言うまでもない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147b/>

デイズブレイク

2010年10月9日13時42分発行